

人文学・社会科学の研究評価をめぐる 36 の論点
—研究者 125 名の聞き取りから—*

公開日:2026 年 10 月 19 日

一橋大学大学院経営管理研究科
イノベーション研究センター
軽部 大

*本調査報告書は、SciREX 事業「共進化実現プログラム」の研究プロジェクト「我が国の人文学・社会科学の国際的な研究成果に関するモニタリング指標の調査分析」(研究代表者:軽部大)において実施した、研究者 125 名への聞き取り調査の結果をまとめたものである。SciREX 事業「我が国の人文学・社会科学の国際的な研究成果に関するモニタリング指標の調査分析」(研究代表者:軽部大)<https://scirex.grips.ac.jp/project/coevolution3-4.html>。なお、本調査報告書の著者の承諾なしに無断引用や転載すること、そして生成AI等で分析・学習に供することを一切禁ずる。

目 次

序 本調査報告について

第 I 部 何を業績とみなすか——業績概念の輪郭

- 論点 1 業績の序列は分野ごとに頂点が異なる
- 論点 2 単著か共著か——評価単位としての著者性
- 論点 3 書籍という業績形式とその質保証の不在
- 論点 4 査読は普遍的な基準ではない
- 論点 5 査読という制度の実際——時間・負担・作法
- 論点 6 「論文・著書」の枠外にある仕事をどう扱うか
- 論点 7 翻訳をどう評価するか
- 論点 8 教科書・辞書・一般書・メディア——教育と普及の位置づけ
- 論点 9 商業誌と依頼(招待)論文——日本に固有の評価装置
- 論点 10 境界線をどこに引くか——「その他(MISC)」という受け皿
- 論点 11 速報性の高い業績評価(学会発表・国際会議・プレプリント)をどう扱うか

第 II 部 言語と国際化——何語で書かれた業績を評価するか

- 論点 12 日本語・国内業績が上位に立つことには理由がある
- 論点 13 英語というリンガフランカの支配とその濃淡
- 論点 14 国際業績が支配的な領域と世代・組織による分岐
- 論点 15 「国際的な業績」とは何か——定義の揺れ
- 論点 16 国際化偏重の副作用
- 論点 17 国際化を支える実務的条件

第 III 部 測定をめぐる対立——測れるのか、測るべきか

- 論点 18 測定への懐疑
- 論点 19 可視化・計量化の擁護
- 論点 20 測定インフラの欠落という前提問題
- 論点 21 質的評価とピアレビューは代替になるか
- 論点 22 何を「質が高い」とみなすか

第 IV 部 制度としての運用——誰が、いつ、何を評価するか

- 論点 23 事前評価への偏りと事後評価の不在
- 論点 24 評価の時間軸
- 論点 25 自己点検の形骸化
- 論点 26 人事(採用・昇任)という避けられない評価
- 論点 27 個人評価と機関評価の乖離

第 V 部 評価が研究を変える——誘因としての評価

- 論点 28 ジャーナル至上主義と標準化の両義性
- 論点 29 「評価軸の多様性」は解になるか

第 VI 部 社会との関係——社会的インパクトをどう扱うか

論点 30 社会的意義は測れるか

論点 31 社会的有用性による評価をめぐる賛否

論点 32 有用性の時間軸と事後性

論点 33 学術的質と社会的インパクトは両立するか

論点 34 誰に向けて発信するか——オーディエンスの構造

第 VII 部 総括——評価の対象と単位を再定義する

論点 35 研究業績の評価と研究者の評価は別のものである

論点 36 未解決の問い

序 本調査報告について

1. 本調査報告の目的

本調査報告は、人文学・社会科学の各分野間における研究文化・研究慣行の同質性と異質性を明らかにすることを目的とした聞き取り調査の記録である。人文学・社会科学における研究成果の定量的把握の困難さは、これまで主に技術的な問題として語られてきた。統合的なデータベースが存在しないこと、研究者・研究機関の名寄せに不備が見られること、業績カウントに関する統一的な手法や前提が確立していないこと。いずれも実務上の障害であり、解決すべき課題である。しかし、それを解決・克服する前に、より本質的な問いに答える必要がある。

それは、人文・社会科学に従事する研究者が、そもそも何を業績とみなすのか。どのような成果を、どのように把握することが適切だと各分野の研究者は考えているのか。そしてその理解は、分野を超えてどの程度共有されているのか。この問いに対する明確な回答や方針を持たないまま、研究成果もしくはモニタリング指標の設計を構想することは、適切さを欠いた対応となりかねない。

本調査は、そのようなより本質的な問いから出発するものである。人文・社会科学は、しばしば言及されるように、自然科学と全く異なる研究文化や研究慣行を有しているのだろうか。そのように自然科学と対比される人文・社会科学分野は、そもそも同質的な考え方や慣行を有する研究者の集合体なのであろうか。あるいは自然科学と考え方や思考様式が類似する研究者によって構成される研究分野とそうでない研究分野との混合体なのだろうか。本調査は、このような基本的な問いを確認するために実施された。人文・社会科学分野の中でも、それぞれの個別の分野間の違いがどこにあり、どこには違いがないのかを、研究者自身の言葉から明らかにすることを目指している。

2. 調査の方法

調査の構成

本調査報告書は、2024年1月から2026年2月にかけて実施した聞き取り調査に基づいている。第一期(2024年1月～2024年3月)は、科学研究費補助金の中区分レベルを単位としたパイロット調査として実施した。聞き取りの設計と質問項目の妥当性を検証するとともに、人文学・社会科学の主要分野における研究慣行の輪郭を把握することを目的としている。聞き取り調査で実施した質問項目は、報告書の最後に掲載されている。調査の第二期(2024年4月～2026年2月)では、第一期の知見を踏まえ、科研費の審査区分表に基づき小区分を層として設定し、各層についてメールアドレスを公開している日本国内の研究者から無作為に抽出する層化抽出を行った。すべての小区分において最低1名以上の協力者を得ることを方針としている。各層への配分は分野規模に比例させておらず、分野間の比較を可能にすることを優先した設計である。

協力者

人文・社会科学分野の本調査報告の分析対象は、日本の研究機関に所属する研究者125名である。うち2名は、調査の実施期間中に海外の研究機関へ転出している。日本における研究経験に基づく内容であることから、分析対象に含めている。所属機関の内訳は、国立大学、私立大学、大学共同利用機関法人、国立研究開発法人等多岐にわたる。

対象範囲

人文・社会科学分野は、科学研究費補助金の中区分レベルで10分野全てを対象とし、結果的に小区分レベルでは69分野中64分野を網羅している。網羅できなかった5分野については、各分野毎に各10名

合計 50 名の研究者に依頼を出したが、残念ながら調査の協力を得られなかった。本調査報告書の記述がこれらの分野の研究慣行を反映していない点に留意されたい。

実施形式

聞き取り調査は、オンラインおよび対面により実施した。対面調査は日本に点在する各地の所属機関等に赴いて 1 件の例外を除いて全て研究代表者が行っている。一件あたりの所要時間は、おおむね 30 分から 2 時間の範囲であった。

倫理的配慮

本調査は、一橋大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:2023C052、承認日:令和 6 年 1 月 23 日)。調査対象者には、調査の目的、任意参加であること、回答の拒否や途中で中止が可能であること、データの管理方法および公表方法について口頭で説明し、同意を得た。また、本調査報告の草稿については、公開に先立ち協力者に送付し、1 か月の確認期間を設けた。

海外の研究機関に所属する研究者への調査

本プロジェクトでは上記に加え、2024 年 1 月から 2026 年 2 月の間に数回に分けて、日本の研究文化・慣行の固有性を確認することを目的として、海外の研究機関に所属する研究者 9 名への聞き取りを実施した。本調査報告は日本の研究機関に所属する研究者への聞き取りを対象としており、この調査の内容は本文に反映していない。ただし、日本の研究慣行のどこが固有でどこがそうでないかという視点は、本調査報告の論点構成を検討する際の参考としている。なお、本プロジェクトのウェブページに記載の 129 名は、本調査報告書の分析対象 125 名に、海外の研究機関に所属する研究者 4 名を加えた数である。聞き取りの協力者は、両調査を合わせて計 134 名となる。

3. プロジェクト全体における位置づけ

本調査報告は、SciREX(科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業)の共進化実現プログラムにおける研究プロジェクト「我が国の人文・社会科学の国際的な研究成果に関するモニタリング指標の調査分析」(研究代表者:軽部大、行政担当部署:文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室)の成果の一部である。

同プログラムは、政策担当者と研究者が課題設定の段階から共に研究を進める点に特徴があり、本プロジェクトも「人文・社会科学の研究成果のモニタリング指標について(とりまとめ)」(令和 5 年 2 月 7 日、科学技術・学術審議会学術分科会人文・社会科学特別委員会)を踏まえて設計されている。

本研究プロジェクトでは、定性・定量の二つのアプローチを並行して進めてきた。定量的アプローチでは、エルゼビア社の Scopus と科学技術振興機構(JST)の researchmap を活用し、人文・社会科学分野の研究者約 95,000 名を対象に、分野別の研究業績の動向や業績ポートフォリオの可視化を行っている。本調査報告書は、この定量分析と対をなす定性的分析の基礎資料である。数値として現れた分野別の業績ポートフォリオの背後に、どのような研究文化や研究慣行、そして研究業績に関する見方や考え方が存在するのか。その解釈の手がかりを提供することが、本調査報告書の役割である。

4. 本調査報告の読み方

論点の抽出

聞き取りの内容は、研究代表者が発言者を匿名化した上で、匿名化データを研究協力者と共有しコーディング作業を行った。コーディングは、研究代表者および研究協力者 3 名(宮澤優輝、于雷、橘樹)の計 4 名

が独立して実施し、結果に不一致が生じた箇所については、判断が一致するまで調整を重ねている。本調査報告書に収められた 36 の論点は、この作業を通じて浮かび上がった論点群を整理したものである。

論点という形式について

本調査報告は、結論を提示するものではない。各論点は、問いとそれをめぐる複数の立場を示す形で構成されている。この形式を採った理由は二つある。第一に、本調査の目的が分野間の同質性と異質性を明らかにすることにあり、単一の結論に収斂させることが目的ではないためである。

第二に、研究評価をめぐる論争の多くは、事実認識の相違ではなく、何を重視するかという価値判断の相違に由来する。測定への懐疑(論点 18)と可視化・計量化の擁護(論点 19)を並置しているのは、どちらかが正しいと述べるためではなく、この対立の構造そのものを示すためである。

構成

本調査報告は、七部から構成されている。第 I 部では、何を業績とみなすかという業績概念の輪郭を扱う。第 II 部では言語と国際化、第 III 部では測定の可否をめぐる対立、第 IV 部では評価制度の運用、第 V 部では評価が研究行動に及ぼす影響、第 VI 部では社会的インパクトの扱いを、それぞれ主題としている。そして最後の第 VII 部では、評価の対象と単位を再定義する視点から全体を総括している。

引用と匿名性の扱い

本文における聞き取り内容の提示は、ごく一部の例外を除いて逐語の引用である。基本的に、発言者の事後的な修正を除いては要約や言い換えは行っていない。引用にあたっては、発言者個人が特定されない形とし、所属分野(科研費の小区分レベル)を付して整理している。なお、個人や組織の特定を防ぐため、調査で取得した一次情報は研究代表者がコーディング作業の前に伏せ字や記号化による匿名化措置を講じている。また、所属分野の公開については、調査依頼の時点で協力者の了解を得ている。個人名および所属機関名は記載していない。

本調査報告書の限界

分野を付して特定の発言を示すことは、その発言が分野の「代表」事例として解釈され、その解釈が一般化される危険性を孕んでいる。したがって、分野の代表性には常に注意を払う必要がある。なぜなら、多くの各小区分の協力者は分野の分母に比して少数であり、分野によっては 1 名の発言を以てその分野の記述としている箇所が存在するためである。したがって、本文中の引用は、当該分野の代表的見解を提示するものではない。あくまでも、分野における一例として読まれるべきものであり、同じ分野の他の研究者が異なる考えを有している可能性は常に残されている。ただし、調査の際には、限られた発言事例を収集することの限界を理解しつつも、聞き手と発言者の間で、代表性や一般性に留意するように調査を実施した。

そもそも、本調査報告書の意図は、各分野の総意を確定することにはない。分野を超えてどのような考え方の相違が存在するのか、その広がり示すことにある。個々の引用は、その幅を構成する具体例として提示されている。なお、本調査は、小区分レベルで 69 分野中 64 分野を網羅しているとはいえ、小区分レベルで 5 分野の研究文化や研究慣行を捕捉することはできなかった。また第二期の層化抽出は、分野規模に比例した配分を行っていないため、協力者の構成は人文学・社会科学の研究者全体の構成比を反映するものではないことにも注意が必要である。

5. 謝辞

本調査に協力いただいた 134 名の研究者に、心より御礼を申し上げる。聞き取りの合計時間は、約 134 時間 55 分である。このような膨大な時間を本プロジェクトのために割いてくださった。聞き取りでは、各分野における研究業績の捉え方や評価をめぐる実情について、率直な考えを聞かせていただいた。しばしば慎重な扱

いが必要となる制度運用や慣行の評価に関わる内容を含むにもかかわらず、時間を割いて丁寧にご回答下さったことに、あらためて感謝を申し上げたい。本調査報告書に収めた論点は、日本の研究機関に所属する協力者から得た情報に基づいている。また、海外の研究機関に所属する協力者から得た情報は、本文には収めていないものの、日本の研究慣行や文化の固有性を考える上での視座を与えるものであった。調査にあたっては個人が特定されない形での公表を前提として協力を依頼したため、氏名および所属機関名、そして所在地の情報などは記載していない。

本研究プロジェクトを推進する上で、IMPP事務局の増井友香さんと東郷みやさん、そして田中李歩さん(神田外語大学)と佐藤優子さん(東京科学大学)、そしてインタビューにも一部同席くださった押海圭一さん(国文学研究資料館)にもお礼を申し上げる。特に、膨大な作業を陰ながらご支援くださった増井さん、東郷さん、そして大学院生やポスドクの3名の学生には格別の感謝を申し上げたい。最後に、本研究プロジェクトの定量分析作業における共同研究者の原泰史先生(神戸大学)にもお礼を申し上げたい。共同研究の過程で交わされた議論は、本調査報告書を整理する上でのアイデアの源泉ともなっている。

最後に本調査の実施にあたり、文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室の皆様(名子学氏、高田安隆氏、林史晃氏、石川智規氏、室橋涼子氏、吉永理央氏、間部夏未氏、肥後和典氏、大場亮平氏、築田さおり氏、楠凱斗氏、上条優喜奈氏、岩村優賢氏)には多大なご協力をいただいた。ここに記して深く感謝申し上げます。なお、所属は調査当時のものである。

もともと、発言の整理やコード化作業、その整理を含む本調査報告書の内容に関する責任は、すべて筆者自身にある。

第Ⅰ部：何を業績とみなすか——業績概念の輪郭

論点1：業績の序列は分野ごとに頂点が異なる

論点の整理

研究評価をめぐる「語り」の最初の論点は、評価基準の厳しさや緩さではなく、評価序列の頂点に何を置けるかが分野ごとに異なる、という事実である。単著の学術書を不動の頂点とする分野(英文学、宗教学、公法学、日本文学)と、査読付き論文のみを実質的な業績とみなす分野(金融・ファイナンス、教育工学、理論経済学)が、同じ「人文・社会科学」という括りの中に並存している。さらに、両者を併記しつつ相対的な重みづけを行う分野(教育社会学、日本語学、哲学)、逆に序列そのものを細分化・厳格化しつつある分野(一例としてのアジア史)もある。

ここから導かれる論点は二つある。第一に、共通の評価尺度を上位から適用しようとする、必ずどこかの分野で矛盾が起きること。第二に、序列の違いは単なる慣習ではなく、その分野で知識がどのような形式で蓄積されるか(体系書か、実証論文か)に根ざしているため、序列の変更は研究の作法そのものの変更を意味するということである。この点は以下の各論点、とりわけ論点2(著者性)および論点3(書籍)で具体的に展開される。

語り

研究業績の範囲(1)

「これは難しいですね。たぶん、「国内、国外、査読有無、書籍、翻訳」、このかつこの中のこれらは全て研究業績となると思います。査読なしでも……。難しいな。基本的には書籍が、単著が大事な世界なので、単著をトップとして査読付き論文、その下が共著に収められた1章、ブックチャプターみたいなそういう形でどんどん下がってくとは思うんですけども。」

〔中区分2:英文学および英語圏文学関連〕

研究業績の範囲(2)

「もちろん一番はやっぱり学術論文と著書だと思います。それで学術論文に関しては私は少ないんですけどもやっぱり国際誌も特に最近は見られるようになってきていると思います。ただ、その日本語学ということもありましてほかの文献のほかの分野に比べましても日本語で書いたものというものの価値が比較的高く、そんなに国際誌でないといけなとか英文でないといけなみたいなのは比較的弱いほうだとは思いますが。査読論文はやはり評価されて人事などでもそこは当然見ます。」

〔中区分2:日本語学関連〕

研究業績の範囲(3)

「論文とか書籍とかは評価対象になりますけど、予稿集とか、あと学会で発表しただけとか、そういうのはあまり業績にならない印象です。」

〔中区分2:言語学関連〕

業績の評価順序

「そうですね。単著がもう必ず一番上で、その次が一応、査読付き論文です。」

〔中区分2:英文学および英語圏文学関連〕

単著書籍至上主義

「分かりやすく言うと。その文字化の指標は本であるほどいい、単著。次、単著、共著、それから雑誌の論文。雑誌の論文も重めの研究論文が評価をされ、法律の研究者だと制度紹介とか判例評釈とか、ルーティンの感覚でやるんですけど、それはその次くらいです。でも、文字化されてるものが非常に評価され、これも、これは私の感覚なので、ちょっと他の先生、違うことをおっしゃるかもしれませんが、発言語は問わない。」

〔中区分5:公法学関連〕

書籍の評価

「日本の、例えばしっかりした出版社から、かなり堅固な大著、体系書を出してるとか、そういうところで評

価をされる要素のほうが強い。」

〔中区分 5:公法学関連〕

研究業績（学術書）

「これはもう、学術書がやっぱり、本として出していることが一番評価されるっていうのは、これは疑いないとこだと思います。特に一般書はやっぱり評価されないんで、それはどっちかっていうと社会貢献みたいな枠で、「よく分かる神様」とか、「世界の宗教入門」とか、ああいうのは評価対象にはならないっていうか、むしろ、ちょっと本業おろそかなんじゃないのとかっていう評価がされたりするので。学術書を、なるべくであればきちんとした出版社から出しているっていうのが、一番評価されるというふうに思います。」

〔中区分 1:宗教学関連〕

紀要・雑誌論文・書籍・学術賞

「学内紀要はあまり。まあ、でも、結局国内の学会誌が一番評価されているので、そこで学内紀要を引用するっていうことは多々あるので、もちろん評価はされるんですけども、学会誌に次ぐっていうようなイメージですかね。あと、国内で本を出版するっていうのも学会誌に載ることと同じか、それ以上にやっぱり評価されます。国内で単著を書いて学会の賞を取るっていうのが、メインストリームになっているかなと思います。」

〔中区分 5:国際法学関連〕

査読誌も本も大事

「基本は、学術雑誌の投稿論文で掲載されて、査読誌、査読論文ですね。レフリー論文何本通ったかとか、難しいジャーナル通ったかとか。そういうようなのが一番メインの基準にはなってると思いますが、それにプラスアルファで、人文系の分野ですので、刊行物ですね。図書とか。割合、最近は博士論文もよく著書として刊行されるようになってます。若い方も本出すようになってますけれども。そういう著書がどれくらい出てるか、あるいはいい本が出てるかとか、というところですね。それもありますし。」

〔中区分 9:教育社会学関連〕

査読付学術雑誌を優先：研究評価の階層性

「分かりました。私の分野は欧米主導型の研究分野でもあるので、そんなに大きくずれてはいないと思います。国内のほうがむしろ、少なくとも私の職場においては研究評価っていうのは細かく細分化されて、その中で査読付き雑誌論文が一番でと。査読なしだともうちょっと下がって紀要は評価しないみたいな、そういう厳格化というのが行われているので、査読付きの学術雑誌というのに優先的に自分の業績を出していこうという傾向はありますね。」

〔中区分 3:アジア史およびアフリカ史関連〕

紀要より査読誌

「学内の紀要もたくさんありますが、やっぱり査読誌に出すのがいいっていうことになってるんじゃないですかね。」

〔中区分 2:言語学関連〕

紀要の位置づけ

「紀要みたいな論文はまあ、まあという感じですが、やっぱり査読付きの論文とか単著とかに比べたら、あってもなくてもっていう感じには捉えられてます。」

〔中区分 4:人文地理学関連〕

論文・書籍以外の業績評価

「非常にいろんな項目があります。例えば研究というところと、あとは実務のところの職務内容の話もありますけれども、それ以外に、例えば社会貢献活動とかいろんなものがあるんですけども、正直、やはり論文書籍以外のものというのは点数が低いというのが現状です。」

〔中区分 9:子ども学および保育学関連〕

何を業績とするか

「これも最初に申し上げたとおり、複合領域なんで全部のことをいえるわけじゃないんですが、その中でも私が特に関わっている領域についてなんですけども、研究業績とするのは、まずジャーナル論文で国内と海外とそれぞれありで、ただ、どちらも査読ありのものを業績として認めると。それプラス、書籍としてこれも国内も国外もありですし、本 1 冊書くんでもいいし、分担執筆でもいいんですけども、ただし、いわゆる「注が付いてるもの」という言い方するんですが、典拠、引用の注がちゃんと書かれてるもので。その 2 つが業績で、それ以外の、例えば査読なしのジャーナルに書いたものとか、翻訳とか、最近だとデータベース公開とか、そういったものは基本的に研究業績としては認めない。全く認めないわけじゃないけど、評価しないということだと思います。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

研究業績の範囲

「その意味では、非常にいろんなものを業績として評価対象にします。査読論文は、もちろん、きちんと評価の対象になりますし、あと、この分野は著書という形で研究発表される方が多いので、著書というのはまず第一に評価の対象になります。ただ、査読論文と著書だけで評価するわけではなくって、もっといろんな媒体で発表されたものの中にも内容的には高く評価する必要があるものもたくさんありますし。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

昇任の業績

「教授に上がる時とかは論文、査読付き論文だけでチェックするんでって感じですね。」

〔中区分 9: 教育学〕

論点 2: 単著か共著か——評価単位としての著者性

論点の整理

業績の序列を規定するもう一つの軸が著者性である。人文系の多くの分野では単著が業績の基本形であり、宗教学では「単著がないと業績としては一つ認めにくい」、日本文学では「共著という風土は皆無」、社会法学・民事法学でも一人で書き切ることが標準とされる。人文地理学や文化人類学では、一つの民族誌、一つの地域に深く沈潜した「厚い記述」を一人で書いていることが伝統的な要件として語られる。

他方、同じ社会科学でも経営学の組織論では共著主義が浸透しており、哲学・倫理学や日本語学でも共著の増加が観察される。ただしその共著は二、三人、多くて四人という規模であり、理系のラボ単位の共同研究とは性格が異なる。

評価実務の側では、共著をどう割り引くかという技術的な問題も生じている。日本語学の分野ではページ数に係数を掛ける方式が用いられ、社会法学では執筆分担が明示されていなければ点数の付けようがないとされる。人文地理学者の語りは、英語論文を数え切れないほど持つ候補者に単著がないことが採用面接で論点になった経験を伝えており、単著の有無が単なる形式ではなく能力の証明として読まれていることを示している。

ここでの論点は、著者性の規範が分野によって異なる以上、異なる分野の研究者を業績数という同一の単位で比較することが原理的に困難だということである。単著中心の分野では生涯に一、二冊しか出せないのに対し、共著が標準の分野では同じ期間に数倍の点数が積み上がることが指摘されている。

語り

単著を重視する

「私たちは連名で論文投稿や発表することが多いのですが、共同研究をする際に、お世話になった教育学系の先生に「連名も原則嫌やし、写真なんて何で載せないといけないんだ」ってめっちゃ言われたっていうこともあって、驚きました。そういう人たちにとっては基本単著……。人文系学部に所属していると、連名やと人数でポイント割るとかで評価されてしまうことがあるそうです。教育学分野で普通に査読付き論文を書いても、4 人で書いたら 0.25 になるから、学内で評価されるためには、紀要でも単著のほうがいいから、学内の昇進のために紀要を書きなさい、みたいに言われるそうです。教育学分野では評価さ

れない査読なし紀要を学内昇進のためだけに書く、ということになりますね。」

〔中区分 9:教育工学〕

単著の重視

「これはもちろん単著のほうが、つまり共著といってもほんとに 2 人、3 人で書く共著もあれば何十人で書く共著もあってやっぱり単著のほうが重視されるでしょうね。」

〔中区分 1:宗教学関連〕

単著を評価する文化

「そうはいっても、社会科学系の領域なので、一番優先されるのは単著の本。それは英語も日本語も大事なもののなので。日本語でも本であれば、しかも単独の本であれば、やっぱり大事だと思っていて。ただ、やっぱり基本的には読まれてなんぼなので、引用がされると、要は引用は 1 つの指標ではあるっていう感じですね。」

〔中区分 1:科学社会学および科学技術史関連〕

単著の重要性

「あと著書に関してはやっぱり単著があるっていうのはそれなりの重みを持っていると思います。その多くは博論をまとめたものとかが、あるいはそれ以降にまた大抵はやっぱり論文をまず発表してそれを特定のテーマでまとめ直すっていうことが多いと思うんですけどもそういうかたちでの単著っていうのはかなり重視されます。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

単著重視の変化

「それはありまして。ただかなりこの 10 年、20 年で変わったかなと思うんですけども。私が大学院生の頃とか、若手の着任直後の頃は、研究は単著で出しておく方がいいよっていうアドバイス結構受けて。単著の業績のほうを優先して頑張れっていう指導は、特に年配の先生が、シニアの研究者の方から受けたんですけども。最近はどういうことはないかなという。共著の研究も、実際、数も増えていると思いますし、共著だからといって、単著より業績が低いと見られることはだいぶ減ったかなと思いますが、まだちょっと少しそういう考えもある、残っているかもしれません。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

単著が原則

「これはもう単著であるのが原則っていう感じだと思います。共著の場合には、論文集みたいな本を出すっていう意味での共著は、担当部分が論文 1 本カウントみたいな感じになるかと思います。人と一緒に 1 冊本書くとかっていうのは、宗教学にもいろんな流派っていうか細分化があるので、そういうのを、例えば聞き取りとかを一緒に共同調査するとか、質問紙調査を人と一緒にやって、その結果をそれぞれが論文に書くとか、そういう意味での共著はあるかと思いますけど。歴史系はもう、基本 1 人で 1 冊書くっていうのが多いです、評価もされると思います。論文も同じような感じだと思います。」

〔中区分 1:宗教学関連〕

単著の不可欠性

「これは禅に限らず、人文学自身がやっぱり今でも単著がないと、やっぱり業績としては一つ認めにくい。いわゆる博士論文ですね。博士論文を単著として出版するっていうのが一つのステップなんだろうとは思っております。それは決定打ではなくて、その二の矢、三の矢に続いていくって意味では、理系に比べても単著がなきゃいかんっていうムードはまだあろうかと思います。」

〔中区分 1:宗教学関連〕

単著の支配性 (1)

「大きなポイントは、いわゆる哲学系、他の人文系の少なからぬところにも通ずると思うんですけど、やっぱり 1 人ってのが多いんですよね。もちろん共著とか、例えば共訳とかそういう仕事もそれなりにももちろんあるんですけど、今もちろん増えてはいるんですけど。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

単著の支配性 (2)

「組織論においては、ご存じのとおりやっぱり共著主義、共著でも全然問題ないという感覚があります。それは国内においてもそういうふうになってきているというふうに思います。一方、日本の経営史学においては、まだまだ単著が主流です。単著主義がまだ非常に強いという感覚です。私自身は、その両方に身を置いていて、共著をもっともっと進めていくべきだというふうに思っています。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

単著が一般的

「分野によってはあります。日本語教育の中でも共著で書くのが普通という人もいますが、理系とくに比べると圧倒的に単著が多いですし。」

〔中区分 2: 日本語教育関連〕

共著は皆無

「共著という風土は皆無です。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

共著は割り引かれる

「共著は確かページ数掛ける何かだったと思います。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

共著の増加

「共著も増えてますね。増えてます、明らかに増えてます。ただ、共著とはいっても 2 人、3 人とですよ。多くて 4 人。4 人はまずない。2 人とか。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

英語圏でも単著

「そうですね。手には取る時は確実に単著ですし、英語圏だと。あとは、その後も本で自分を紹介しますよね。でも若手のある一時期にすごいジャーナルにあると、たぶんみんな「すごい、この人は。今後すごいことになるんじゃないか」とは言いますので、それですね。でも、そのヒエラルキーはあります、やはり。単著が上なんでしょうね。」

〔中区分 2: 英文学および英語圏文学関連〕

単著の一般性

「単著を出すということは、ある意味、当たり前というか、共著でアイデアを出して合って何かまとめ上げていくというようなことは、割合としては非常に小さい、少ないですね。ただ、2000 年代以降に入ってきてから、例えば実定法の研究者と統計に明るい学者が、要するに異なる領域の研究者がデータ分析の観点を加味した新しい法理論の構築を目指すというようなことは少しずつ広がっているところなんですけれども、それでも 2 人とか 3 人とかいった程度の範囲にすぎなくて、大半の論文は自分で考えて、自分で調べて自分で書くというようなことですね。」

〔中区分 5: 民事法学関連〕

単著の希少性

「単著は一生の間に 1 冊か 2 冊しか出さないの。多分歴史学や美術史も一緒だと思いますけれども、だからそんなに簡単にらせるわけじゃないんですね。大体一生の間に 1 冊か 2 冊です。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

単著支配性 (1)

「そうですね。特に文化人類学は 1 つ民族誌を書いていないとっていうような、分厚いものを書いていないとっていうような風潮があると思いますし。」

〔中区分 4: 人文地理学関連〕

単著支配性 (2)

「単著で書く、例えば1人の執筆者で書き切るっていうのが多くて、複数の人間で分担するっていうことのほうが少ない。」

〔中区分 5: 社会法学関連〕

博士論文の刊行

「ですね。もし単著で出るとしたら多分博士論文を出すことが、自分がずっとこれまで積み重ねた業績がまとまって本になるっていうことが多いと思います。」

〔中区分 5: 社会法学関連〕

日本語単著書籍の支配性

「(トップジャーナルという考え方)あんまりそういう考え方をそもそもしないというか。日本語単著のプレゼンス高いですよ。」

〔中区分 5: 新領域法学関連〕

単著と共著の優劣

「いや、そこはないです。」

〔中区分 3: 博物館学関連〕

単著の意義

「やっぱり論文だとどうしてもページ数とか普通限られていて、1 個の論文で 1 個のことしか言えないっていうふうになると思うんですけど。単著っていうのは、多分何本も自分の論文を集めて体系化するっていうもので、そこがやっぱりポイントなのかなって思います。体系化されてるかどうかっていうのが。」

〔中区分 4: 人文地理学関連〕

単著がないことの評価

「私が採用面接にいた人事で、すごい英語論文をたくさん何本も、多分数え切れなくらい持ってる先生がいらっしゃったんですけど。単著がないっていうか、やっぱり問題になって、「なんで単著がないんですか」っていうのを面接で聞かれたりとか。なんかそこがやっぱりすごい引っかかるみたいですね。」

〔中区分 4: 人文地理学関連〕

基本は単著

「はい。ただ、大学なんかは共同研究して共著論文をどんどん出してほしいと思ってるんですけど、われわれは基本は単著なので、ほとんどの業績は。だけど、時々共著で出すこともありますし、割と基礎的な作業、翻訳をしたりとか解説をするっていう、そういう作業は共同でやることも結構あって、共同の名前で出してるものも多いと思います。プロジェクトとしては一緒にやりましょうみたいのは結構あるので、向こうのプロジェクトに参加したりとか、そういうのはあります。」

〔中区分 3: アジア史およびアフリカ史関連〕

研究の単独性

「そうですね、結局一人一人でやっちゃうところが大きいですね、われわれ。どうしても自分で調べて自分で書いて、「はい」っていう部分があるんで。それから、そういう激しい議論なんかがあったりしたとしても、結局それがみんなで共有されていってみんなで何かしてって話にはならないから、ちょっとどれも何かすごく一匹おおかみ的なところがありますね。」

〔中区分 5: 基礎法学関連〕

単著の重み

「共同で発表する。やっぱ研究というのは、調査でいろいろ分担者がいて、それで医療系ですと共同で発表して、書籍も共著で出すというのがスタンダードなのに対して、文系は単独でやるっていうことに価値があるというふうに。ちょっと極端な言い方をすると、そういうふうに考えます。やっぱりちょっと重みがあります。」

〔中区分 1: 宗教学関連〕

論点 3：書籍という業績形式とその質保証の不在

論点の整理

もともと、書籍を最上位に置く分野において、その書籍の質を誰がどのような形でどの程度保証しているかは自明ではない。査読誌には形式化されたピア同士の審査手続きがあるが、国内の学術書の刊行には必ずしもそれがない。会計学者の語りは「査読がなくてお金払えば誰でも本書ける」状況を指摘し、日本文学からも「誰でも、ある意味、出せてしまう」という認識が示される。大学によっては、学術書であろうが啓蒙書であろうが同じ点数になるという運用が報告されている。

この書籍の質の保証の不在を埋めているのが、出版社の「格」である。英文学では大学出版局かどうか「バロメーター」として機能し、商学分野にあるユニバーシティプレスを格上とする序列が、人文系にもあると語られる。日本史では地方の小出版社と東京の著名出版社では難易度も費用も異なるとされ、宗教学でも「きちんとした出版社」から出すことが評価の条件とされていた。すなわち、査読の代替として出版社のブランドが質保証の役割を担っている。

それと同時に、その出版社の機能そのものが劣化しているという観察もある。地域研究者は編集者が実質的な仕事をしなくなったと述べ、美学・芸術論からは執筆者の持ち出しや買い取り保証によって刊行が成立している実態が語られる。ヨーロッパ史からは、オープンアクセスの進展によって研究論文へのアクセスが容易になる一方で、書籍は相対的にそうでもないことが原因となって、研究成果の発表媒体としての書籍の価値が問われつつあるとの指摘も示される。さらに、書籍と論文は代替関係ではなく相補関係にあるという整理も重要である。哲学者の語りは論文と書籍を半々で書き、論文で密度の高い議論を立てた上で書籍で体系化する往復運動の過程を説明している。経営学者も、書籍が体系を示し、そこから論文が生まれる構造を指摘する。

語り

書籍公刊の陰

「査読がなくてお金払えば誰でも本書けるっていうような今状況になってると思うので、その意味では非常に玉石混交で、悪貨が良貨を駆逐するじゃないですけど、書籍なんて業績じゃないよねって思われてしまう側面もやっぱりあるよねと思います。」

〔中区分 7: 会計学関連〕

書籍の多様性

「書籍もいろいろですね。本当にきちんとしたものを書いているのと、中身の薄い柳の下みたいなものがあったりとか、そこもさまざまかなと。読み手によるかなという気はします。」

〔中区分 9: 高等教育学〕

ブックチャプター

「ブックチャプターっていうのは結構「知り合いから誘われたんでしょう？」みたいな感じで評価が一応、低いっちゃ低いとは思いますが。ただ、そういうのを気にされるのは若手の時だけで、たぶん欧米でもデニユア取っちゃえば、もう関係ないと思うんですけど、首にならないので。」

〔中区分 2: 英文学および英語圏文学関連〕

本の重要性

「やっぱり本書いてないと一人前じゃないっていう文化はありますね。」

〔中区分 5: 新領域法学関連〕

研究成果を書籍としてまとめる意義

「本を書くべき研究テーマで本を書いている人って少ないですよ。歴史学とか言語学とか、そのアプローチで会計をやるんだったら本にせざるを得ないじゃないですか。ですけど、そうじゃないところ、海外の持ってきて、ちょっと日本のデータで回しましたを 10 章にして 1 冊の本ですみたいなのが多くて。それって何の意味があるんだろうっていうのがちょっと僕にはよく分からないという。」

〔中区分 7:会計学関連〕

書籍で体系を示す

「それを基にしながらいろんな論文が生まれてくるっていう、この構造がある以上はやっぱりまだ。否定はされるかもしれないですけど、論文一つ一つよりはどちらかというと本のほうが。本で一つの大きな思想なり、分析の体系を示すっていうことは、比較的意義があります。ただ現状の印刷状況でそんなにすごい本書くと、本屋に嫌がられるってのはあると思うんで。実際に出てくる本と、歴史に残ってる本ってのはちょっと違ってるとは正直言ってますけど。まだ結構あるとは思いますがね。」

〔中区分 7:経営学関連〕

書籍にはやはり価値がある

「そういう点で単に論文として発表するんじゃないくて、それを単著でなくて別に共著でもいいんですけど要は書籍のかたちでまとめ直すっていうのはやっぱり意味があることだと思います。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

単著がやはり大事である

「あとやっぱり書籍は大事かなと思います。特に単著ですね。これは、人文系では特に、やっぱり単著の有無っていうのは大きい。単著のある人、ない人ってのは、まずそれは研究者としての一人前かそうじゃないかぐらいの。やっぱり、単著があるよねっていう人と、そうじゃないっていうのは、ちょっとその瞬間に区別してる部分は、まあ、あるんじゃないかなと思います。」

〔中区分 2:日本文学関連〕

単著が主たる業績である

「単著が主ですね。これはローカルルールなんですけども、書籍という形で業績に載せることができるのは、〇〇に名前が出る程度のことをしてる人、それから、誰かの編著の中にそういう形でポイントのミュートしただけのは、これは論文扱いだとか、その他の業績扱いだとか、そういう扱いにしています。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

書籍へのアクセスの困難さ

「だから人文系は基本的に書籍が一番評価がされるんですね。書籍を出すっていうのが一種その研究の集大成ってところがあるんですけど、その分今の特に関心する人にとっては、書籍というのかえってアクセスが非常にしにくいというのがありますので。・・・書籍というのはある程度見通しをつけるという点では非常に重要ですので、評価自身は非常に高いです。書籍というものの重要性は変わらないです。ただ、アクセスという点では。今 J-STAGE ができたのはそのせいですけど、いわば良書を出してもそれがかえって読まれなくなって、CiNii とかの簡単にアクセスできる、いわば紀要論文のほうが引用されてしまったり、ちょっと困ったような論文までが見られてしまうというのを考えて、J-STAGE ができたと思うんですけど。」

〔中区分 3:ヨーロッパ史およびアメリカ史関連〕

変化の兆し

「いわば査読付き雑誌やある程度質の高いものに対するアクセスを確保するという点では、書籍というものはちょっとこれから難しくなるかもしれません。」

〔中区分 3:ヨーロッパ史およびアメリカ史関連〕

書籍の評価

「学術書であろうが、啓蒙書であろうが、同じ点数になるという不思議なカタチで。」

〔中区分 1:中国哲学、印度哲学および仏教学関連〕

出版の質を担保する方法

「やっぱり本っていうのも出し方にはよさと思うんですけど、査読がない部分もあるので、いろんな人に見てもらった後に、まず、だから論文に注力をして、論文がある程度、本数が固まってきたら書籍として例えば出すとか、そういうふうこれから回っていかないとはいえないかなとは思ってます。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

出版社の質の相違

「やっぱり話聞いているとユニバーシティプレスが格上で、〇〇みたいのはちょっと下みたいなのは人文系の中ではあるらしいです。」

〔中区分 7: 商学関連〕

英語大学系出版社

「あとは、内容はもちろんそうなんですけど、プレスがどこかというのは、結構実はバロメーターにはなりません。だからアメリカの大学出版の、ある 3 社ぐらいが人文系だと良いとされていて、最近はずいぶん〇〇大学と、〇〇はいつもいいとは思いますが、ちょっと失礼な言い方ですが、イギリスの商業系の学術出版、〇〇とか〇〇とか〇〇とかそういうとこだとちょっとワンランク落ちるかなみたいな感じで。」

〔中区分 2: 英文学および英語圏文学関連〕

英語商業出版社

「〇〇とかになりますと、もうがばがば出してまして、表紙が全部テンプレートになって出ていくので、やはり大体そこそこであれば出るんでしょう、みたいにはなっちゃって。あとは、コピーエディターって内容を直してくれる人も 1 名適当に付いたりするので、たぶん自分ですごく直さなきゃ駄目で。だから、〇〇とかになると、著名な大学だとテニユアに使えないとか聞いたこともあります。分かれるらしいんですけどもそれは。」

〔中区分 2: 英文学および英語圏文学関連〕

出版社の相違

「地方のちっちゃな出版社と、例えば東京の〇〇みたいな有名なところだと、もちろん難易度とか、かかってくる費用も違うので、それは本来であれば分けるべきだと思います。ただ、分ける軸の作り方は難しいなと思って。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

出版の容易さ

「本のほうは、これは難しく、やっぱり誰でも、ある意味、出せてしまう、逆に言うと。例えば卒業論文だって、本にしようと思ったらできてしまう。なので、結構、本だからいいとは思ってないんですけども。でも、その 1 冊を書くだけの力量っていうのは、それなりに評価されるべきかなと思ってます。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

多様な出版評価

「結構、考え方ばらばらじゃないかなって気がします。人によれば、本出すことにそれほど意味を見いださない人もいらっしゃいますし。だから、学会誌とかそういうところで評価されて何ぼだという人もいますし。やっぱり本 1 冊出したほうがっていう人もいますし。結構、だから人によるんじゃないかなって気がします。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

読まれない本の行き先

「だいぶ読まれてないと思いますね。なので、これも要は執筆者から、執筆者で 5 冊、例えば論文だったら 10 冊とか、常勤の先生は 10 冊とかってふうにもう最初に買い上げる約束で。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

出版社との関係

「基本はこっちで持ち出し、ある程度その持参金というか、これだけは確実に買うっていうことを出版社に保障した上で出すっていう意味では。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

商業出版の反応

「商業出版っていうのは、今減っていますけど、4,000 部とか 5,000 部、あるいは新書だと 1 万部とか、もうちょっと 1 万何千部とか。そうするとやっぱり、必ずしもそういう高いというか、密度の高いっていうか、密度の濃いコンテキストを共有してない人が、思わぬ人が読む。思わぬ人が読むことによって、思わぬ反動と

かがあったりするんで、それが僕にとっては面白い、重要なところですね。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

出版戦略

「だから、僕自身は最近の出してる数冊の本は全部、論文としても誰もまだはつきり書いてないから、先端的な研究でありながら、かつ、できるだけ多くの人が届くようなそういう二兎を追うようなことを意識的にやっています。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

書籍と論文の関係

「結構、でも、連携してるんですよ。まずは論文って形にするために、とんがって、密度の濃いことをする。そうすると、わりと効率がいいというか何というか。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

作品性

「やっぱり、ほんとに単著で全体を通して、作品の読解とかこれまで使われてきた人文学の諸概念の吟味とかがほとんどですので、そういうのを丁寧に。読解が丁寧で、他者の作品や概念の読解を通して新しい物の見方を提示しているというのが評価軸だと思いますので、結構単著全体の、芸術家じゃないですけど、作品性みたいなのはちょっと重視されるかなとは思っています。なので、そこが例えば質的な社会科学とかよりもさらに強いかなとは思っています。だから質的社会学とかでも、やはりもう少し、いわゆる研究コミュニティの間主体的なざっかっ付きの客観性というのは、もう少しやりやすいというか。書き方もそうですし、社会科学なので。センテンスの最後に依拠してる文献をばーって並べて。人文学だと文献並べるだけじゃ駄目で、それらを結構精読していかないと駄目なので。」

〔中区分 2: 英文学および英語圏文学関連〕

単著出版が一般的

「ここに 2 つあるんですけど、私、ほとんど書いてなくて、「初めに」を書くとか 1 章を書くとか、それぐらいで、あとはひたすら編集をやっているっていうような、あって。私の隣接分野の、考古学もそうですけど、人文系って、単著、分厚い博士論文とかをそのまま本にするのが今でも重視されるんです。私はそれをやってなくて、その代わりに編集してますっていうので、2 冊です。」

〔中区分 3: 考古学関連〕

書籍の性格

「本の場合も、結局単行論文のひとまとめの本が多いんですよ。」

〔中区分 5: 社会法学関連〕

書籍の意義

「難しいですね。僕個人は好きですけど、使い方によるんだと思うんですよ。1 つ僕が思うのは、1 つのジャーナルの論文で書けることって極めて少ないので、自分が想定しているピクチャーみたいなものを十分に伝達することができないという問題はあるんだと思うんですよ。なので、複数の論文をパイルアップして、それで初めてお見せできるピクチャーがあるんだとすると、書籍が多分一番望ましいんだと思います。なので、そういう意味での媒体としては必要不可欠なものなんだろうかなと思います。」

〔中区分 7: 会計学関連〕

本とジャーナル論文の比較

「本のほうが同業者にも届くかなっていうのはありますね。英語でトップジャーナルに出すとかっていうことになると、もちろんそれはそれで英語圏の人に読んでもらえる。それはそれでメリットで、横のつながりが、そういう研究者とつながるっていうのはメリットではあるかなとは思いますが。ちょっとコストがかかるというのが正直なところ。本を出すのも別に簡単ではないですけど、日本の研究者コミュニティでは、人文系は、いい本を出すっていうのは、すごくプレスティジヤなことだと思います。」

〔中区分 1: 宗教学関連〕

博士論文の書籍化

「あとは内容も評価としては。私自身がその単著書いたことがないし、あんまり自分の分野の中でそれを、そんな話をしたことないですけど。ただ、よくあるパターンは博士論文の内容をベースにして、それを基に科研費の出版助成とか取って、それで単著にするっていうのはよくあるパターンで。それはやっぱり一つステータスではあると思います。で、それは学内の業績評価でもやっぱり大きいと思います。一方で教科書とか入門書みたいなものを共著で書いているというパターンあって、それは別かなって。ものによりますけどね。ものによりますけど、別かなってということもあれば、でも、そうでもないかな。研究業績とは別だけれども、でも一定の評価はあるんじゃないかなと。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

博士論文を書籍化する

「他のちょっと研究者の方とかと話していたりとか、他の先輩の研究者たちがいうには、多くの人文系の研究者の方というのが博士論文を単著で書籍化するっていうのが普通というか。なので、その流れだと。」

〔中区分 1: 芸術実践論関連〕

博士論文の出版

「これも分野にも先生方にもよるのかもしれないんですけども、博士論文は出版が最近では基本で名刺代わりということで、博士論文は皆さん基本的には出版されてると思うんですけども、その後の書籍を別に書かなくても、逆に筆が早いと怪しまれるところではありますね。」

〔中区分 1: 宗教学関連〕

博士論文の単著としての出版

「私はそういう意味では、ここに入った時の状況が博士論文を出してすぐってということで、できれば著作化したいというような状況なので、自分の目標と基準が合っているので、著作を、単著を優先的にやろうと思ってますけども、それ以上ではないかなと。片方をやろうとするとなかなかもう片方はおろそかになってしまふかなというのが、現状1年たってみての感覚ですね。著作のほうに集中しようとする、またそれとは別に論文3本っていうのはなかなか、不可能ではないと思うんですけども、気合いがいるなというふうに感じます。」

〔中区分 3: 考古学関連〕

本とジャーナル論文の対比

「自分が、ほとんどやったことないんで、あんまり。ブックチャプターみたいなやったことあるんですけど。一応、国際的な業績だと思いますけど、研究業績っていうよりは、付き合いでやってるなっていう感じなんで、そんなに僕の分野で、例えば、歴史学とかだったら、・・・本を書くっていうの、すごい大事だと思うんですけど、僕の分野では、本を書くっていうのはそんなに、もちろん、重要じゃないかって言われたらそんなことないんですけど、でも、ジャーナルの論文書くっていうのがメインの仕事で、本書いてるって言ったら、なんか、時間あんなっていう感じはある。」

〔中区分 7: 公共経済および労働経済関連〕

論点 4: 査読は普遍的な基準ではない

論点の整理

査読の有無は、分野横断的に使える最も便利な指標として評価する側からするとその機能や役割を期待しがちである。しかし語りの中では、査読を「この中で一番の基準」とする立場(金融)と、「あるかないかはあんまり関係がない」とする立場(科学社会学)が正面から対立している。

対立の背景には、査読の情報価値が学術誌の分布状況に依存するという構造がある。人文系ではインパクトファクターを持つ雑誌がごく限られ、他方で国内学会誌は「多過ぎる」ほど乱立している。高等教育学の語り手は紀要を「全く玉石混交」と評し、社会心理学の研究者からは国内査読誌の質の低下が、言語学の研究者からは国内査読誌の市場そのものが縮小しているという観察が示される。金融・会計学の研究者からは、国

内学会誌が国際的なジャーナルランキングに位置づけられることは「絶対ない」という率直な評価が提出されている。加えて、いわゆるハゲタカジャーナルや「結構緩い査読付きジャーナル」の存在が、査読という手続きの外形だけでは質を判別できないことを示している。

紀要の位置づけも一様ではない。哲学では紀要しか書かない研究者はもはやいないとされ、政治学では採用や科研評価を意識して個人の出版媒体としては避けたいとされる。他方、美学・芸術論では紀要が院生の修行の場として、日本語学では従来の論文の型に収まらないものの受け皿として積極的に位置づけられ、日本文学からは「業績じゃありません」と言われるのは違うという反論が提出されている。

ここでの論点は、査読という手続きの存在を品質の代理変数として扱えるかどうか、分野の出版構造次第で変わるということである。会計学者が言及するジャーナルランキング(ABC ランキング等)のように、査読の有無ではなく掲載誌の格付けを用いる運用も存在するが、それは人文系の多くの分野では成立する基盤を欠いている。

語り

研究業績の範囲 (1)

「本もそうだし、あと論文集みたいなやつですね。特に国内だと、別に論文集で査読は普通付かないです。書籍内論文みたいなやつとか、それから論文も、いわゆる紀要論文みたいなやつであっても、別に「いいものはいい」という感じはありますし。なので、私もだし、多分他の方もそう思っていると思いますけど、査読があるかないかは、あんまり関係がないんじゃないかなという感じを持っています。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

研究業績の範囲 (2)

「多分これは私個人も分野的にも、そんなに大きく違わないとは思いますが、やっぱり一番論文が書かれるのは、国内の雑誌、学会誌、ないし紀要ということです。査読の部分までは、当然査読がありがたいとは思いますが、ないからといって研究業績と見なさないという考え方には立たないです。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

研究業績の範囲 (査読の有無)

「この中ではやっぱり査読の有無だけです。査読の有無のところが一番です。やっぱり国内においては研究書みたいなものを、モノグラフを出したりっていうのも業績に入るかと思います。ここに書いてある教科書みたいなものとか翻訳はもう全く研究業績にはカウントされないですね。」

〔中区分 7: 金融およびファイナンス関連〕

査読誌の評価

「学術誌でも、査読をするのは大体近い分野の人が査読をして、それで評価していくということになるんですが、一方で、学術誌のステータスっていうのは結構問題になってて、理系みたいにインパクトファクターとかそういうところに載ってる雑誌っていうのは、ごくごく限られちゃうんですね、人文系の場合。」

〔中区分 3: アジア史およびアフリカ史関連〕

国内雑誌 (学会) の乱立

「国内のジャーナルっていっぱいあり過ぎて。僕も関係してる学会も、「え、こんなん載せんの？」っていうの、やっぱりあるわけですね。だから論文より本じゃないかな。ブックチャプターにしても。やっぱり読ませるっていうことを考えた時に、学会誌なんて、ほっといたって読まざるを得ないじゃないですか。でも本は、やっぱり読ませる工夫をしないと読んでくれないの。しかも、こういうネット時代だから。本っていうのは、また違う意味で評価されるべきではないかなと思うんですけど。」

〔中区分 4: 地域研究関連〕

学術誌の定義の多様性

「あれを学術誌と捉えるかどうかっていうことですが、それでも携わる人間が出しているから学術かなと。大学が出版しているという意味ですかね。基本的には査読、きちんと同僚の中で精査されたものって

「いう意味での学術誌。」

〔中区分 9:高等教育学〕

邦文査読誌の国際的地位 (1)

「いや、それはないと思います。それはないです。ABDC で B にも入らないかもしれないですね。」

〔中区分 7:金融およびファイナンス関連〕

邦文査読誌の国際的地位 (2)

「絶対ないです。国内の何かの学会誌がトップジャーナルとして認識されるかってことですよ。」

〔中区分 7:会計学関連〕

紀要雑誌の評価

「ただ紀要に関して言えば、これは全く玉石混交かなと思います。」

〔中区分 9:高等教育学〕

ハゲタカジャーナルの存在 (1)

「あります。ハゲタカとはいえないけど、あの出版社はもう付き合わんとことか。」

〔中区分 4:地域研究関連〕

ハゲタカジャーナルの存在 (2)

「そうです。もうリソースがない時点でやっちゃうと、今度犯罪とか。ほら、さっき言ったプレダトリージャーナルとか、何か訳の分かんないことやり出すわけですよ。人間のモチベーションとしてね。」

〔中区分 7:経営学関連〕

緩い査読誌の存在

「ただ、それにだまされちゃいけないって思うのが、その人たちの世界では結構緩い査読付きジャーナルっていうのが存在するんです。で、何か結構、そのラインに乗ってない人文社会系の人っていうのはいると思うんですけど、そんなゆるゆるの査読付きジャーナルに通って出してる。よくよく読めば、そんなにクオリティーの高くない論文があるんですよ、査読付きであっても。うわさでもあるんです、あのジャーナルはゆるゆるだよとか、すぐ出してくれるよとか。」

〔中区分 63:環境動態解析関連〕

国内査読誌の質の低下

「今だんだんと質も落ちてきて。私も、国内の雑誌の査読をすることもよくあるんですけども、そうすると言われてることが、「国内の雑誌なんだから、海外の雑誌のような高いレベルを求めているといけない」という。だから、わりと甘めの、昔に比べると甘めのコメントを書いたりとか、査読の基準もちょっと下になってきているかなと思って。」

〔中区分 10:社会心理学関連〕

国内査読誌に誰が投稿するか

「結局偉い人が投稿して、それで埋まるんだろうなっていうふうには思ってます。」

〔中区分 2:言語学関連〕

国内査読誌の市場

「どんどん小さくなっていってると思います。やっぱり投稿者数も減ってるみたいですし、学会レベルでも、一応要旨を見て判断してるんですけど、もっといてもいいのになんていうか、誰も落とせないっていうぐらいの人数しか集まらなくて。それはでも必然かなと思いますね。」

〔中区分 2:言語学関連〕

かつて紀要論文のみを書く人はいた

「一昔前は紀要論文しかない人っていましたよね。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

紀要論文のみを書く人はいない

「それはないです。紀要しか書かないっていう人はあまりいないので、紀要は研究活動の一部というぐら

いになってるんじゃないでしょうか。紀要だけ書いて、それで定年迎えるって人は、たぶんここはいないと思います。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

学内紀要

「あまり重視していないですけども、個人の出版媒体としてはなるべく避けたいと思っていて、これも採用とか科研評価に関連するような分野で考えると、若い研究者の方はそういった部分もないよりはいいんだろうというような意識ですかね。」

〔中区分 6: 政治学関連〕

院生修行の場としての紀要論文

「個人的には、やっぱりどうしても院生が中心に修行の場というのが、とりわけ人文系とか、僕が関わってきた人文系だと、そういう印象はどうしても強いですかね。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

受け皿としての紀要論文

「その即効性とか従来の研究論文の型にはまらないようなものとかでしょうかね。論文というよりか資料みたいに近いみたいなどところとかデータとして取りあえず出しておきたいって。だからその日本語学とかの場合、そういう先ほど申し上げたように研究論文とは別のカテゴリーが実は作られていてそういう受け皿は作られてはいるんです。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

紀要の位置づけ

「私自身も、査読のない紀要には書いてますので、それを、「あなたは業績じゃありません」というふうに言われたら、それは違うというふうに考えますし、もしそういう見方をされるなら、紀要には書けなくなると思います。やっぱりそれは業績であるというふうに理解しているし、理解されていると思いますので。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

査読論文か書籍か

「単著(自己の論文集)」であれば当然「単著のほうが上」です。「単著(自己の論文集以外の一般向けの単著)」であれば「査読論文が上」です。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

ジャーナルの質

「はい。ただ国際高等教育っていう国際が付く場合はかなり海外志向が強いので、海外誌だったり国際学会っていうのが多いんですけども、国内のトップジャーナルに関しては国際、国際誌にもほんとに玉石混交なんですけれども、かなり良いレベルにはあるかなとは感じて。」

〔中区分 9: 高等教育学〕

国際査読誌の質の評価

「これもなかなか難しいですけど、国際的な業績、どこまでがっていう範囲の話になると思うので、全然名前も知らないようなジャーナルに載っけてても国際的な業績になるかという、それは言えないと思うので、その線引きをどうするかっていうことですけど、私自身はやっぱり有名なというか、ある程度知られてる出版社から出てるジャーナルであるとか、そういうジャーナルのランキングみたいなところに高くなくてもインデックスされてるようなものであったりというのは1つの基準としては考えています。」

〔中区分 2: 外国語教育関連〕

研究の質（ジャーナルリスト）

「これは、僕個人の見立てというのと、多分世間一般っていうのがあるんだと思うんですけど。僕の専門分野では、恐らく ABC ランキングとかの A ランク以上はいいよねって。で、A スター付いてるともう最高だよっていう、そういう、ジャーナルリストに結構基づいてると思います。で、僕個人は、何か学べたかなって思えるかどうかで、一個一個の研究業績の質は判断してる気がします。」

〔中区分 7:会計学関連〕

研究の質の定義（事後評価）

「これも個人的にはジャーナルの質だと思うんですね。そのジャーナルの高い質のものに載せるということが質が高いということはある程度担保されてるということと表裏になるのかなというふうに思いますけど。これも国内分野だと、国内分野というか従来の国内の状況だと事後評価なんだと思うんですね、研究者同士の。査読がなかった、今も日本では査読ってそんなにないんですけど、それって決して質を評価されてないわけではなくて、パブリッシュするのは簡単なんだけど、パブリッシュした後でいろんな人がそれを読んで、あの研究者の質はとか、あの論文の質はというのを評価を受けてる。そういう意味では事後評価を受けてるような気はしますけど。」

〔中区分 7:会計学関連〕

質の評価の経路

「やっぱりスタンダードがなかなか、学術誌に投稿して査読を経たってということが一定の質担保にはなると思います。ただ、日本で学術書を出す時って、そこまで厳しくチェック入らないと思うので、編集者が目利きであることが期待されているんですけど、実際には編集者も人それぞれなので、きちんとした編集なり、ちゃんといい本になるようにチェックしてくれる編集者もいれば、もう投げたらそのまま組んで「はい、できました」っていうようなタイプの人もいたりするので。それだけではなかなか質保証はできないというふうに思います。でもやっぱりいい論文なり、いい本というのは、研究者同士のコミュニティーの中での評価が一番問題になるかなと。そういう意味では、好意的にというか、いい意味で引用されているっていうことは一つの目安になるかと思いますし、書評の、まずは書評本として取り上げられているっていうことで大体プラス、たまにけなすために書く書評とかありますけど、基本的には書評はいい本が取り上げられるっていうことになると、書評で取り上げられているっていうことが一つの質担保の理由にはなるかなという感じがすかね。」

〔中区分 1:宗教学関連〕

査読誌に対する異なる見方

「しょせん査読ビジネスですから、こんなのにつき合わなくてもやっていけるんなら付き合わなくていいんですよみたいなことは、ぼろっと折に触れておっしゃってたりしたので。何か結構、研究者の中でもそんな査読雑誌なんて究極的にはどっちでもいいというか、自分のキャリアが続けられるというか、進められるんなら別に載せなくてもいいっていう、本を出す、書ける人はばんばん本を出せばいいっていうふうに考えてらっしゃる方も少なからずはいらっしゃるんじゃないかな。」

〔中区分 1:美学および芸術論関連〕

査読誌の階層性

「2 種類のトップジャーナルがあって、一つはゼネラルイシューのトップジャーナル、もう一つは専門分野におけるトップジャーナル。で、僕は専門ではトップジャーナル論文はありますが、ゼネラルイシューのトップジャーナルはないんですよね。ゼネラルイシューのトップジャーナルでも 5 大誌っていわれるほんとに難しいものと、さらにその下にゼネラルイシューのがあるって、今そこに出してるんですけどね。5 大誌はとにかくリジェクションだらけなんですけど。」

〔中区分 7:理論経済学関連〕

若手の登竜門としての査読誌

「結構な。若手の登竜門っていうか、とにかく博士の学生にはそれを通させるのが大変みたい。」

〔中区分 1:美学および芸術論関連〕

査読誌への投稿

「国内は、なので、さっきも少し申し上げましたように、簡単に言ってしまうと査読付き論文が、博士課程終わる前ぐらいからもう必要とされて、ポストドックあたりまでやっぱり 5～6 本あると、ちょっと見栄えがいいみたいな感じです。北米ですと査読誌に載るのは結構至難の業で、簡単に言っちゃうとちょっと厳しくて、

査読も。レベルが高いと言うと語弊ありますけど。でも、そんな感じで。」

〔中区分 2: 英文学および英語圏文学関連〕

研究評価

「〇〇経済学の場合には、もう単純に英文査読付き論文が何本あり、その中にランクの高いものが何本あるかという感じの評価になります。その中で特に引用件数の多いのはどれかというのが業績の評価になっていると思います。地域研究のほうは、やっぱりもっとグレーというか、いろんな多様な形で見ています。」

〔中区分 7: 経済政策関連〕

国内学会誌の評価

「まだまだ法学の一分野ですので、日本の学会誌に掲載するっていうことが、やはり割と重視されているし、その日本の査読を通る、日本の学会誌の査読を通るっていうのが現状では一番重視されているのかなっていう感じがします。英語で私が本を出したりしても、たまに他の教員から、同じ分野の他の大学の先生から「お金出せば出版できる会社だよ」って言われたりするんで、実際そういう面もあるのかもしれないんですけど、あんまり英語の本っていうのがそれほど重視されていないかなっていうのがあります。もちろん出せばすごいっていうふうには評価はされるので、軽視っていうほどではないんですけど、学会誌と相対的に比べると、日本の学会誌のほうがなぜか高く評価されているっていうことはあります。」

〔中区分 5: 国際法学関連〕

学内評価

「そうですね。まず英語で書かれるとプラスされて、SCI 論文が一番高いですね。SCI になると、SCI で英語で、さっき言った 5 倍ぐらいになるのかなと思います。普通の、日本で出してる査読付きの論文の 5 倍とか 4 倍とか、そのぐらいになってたような記憶があります。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

査読論文をより高く評価する

「私の周辺の先生方だと、本を書くというよりは査読寄り、いわゆるジャーナルインパクトファクターなどの世界の有名雑誌に論文をどんどんたくさん出してる人が、やっぱり評価されるというようなイメージです。本を書くのは、大先生になって教科書を書くとか、単著で本、文系の先生のイメージで単著で本を書くという機会は、なかなかないです。何もないというか。」

〔中区分 8: 家政学および生活科学関連〕

業績評価の傾向

「うん。もっととどんどん海外業績、国際的な業績をどんどん上げていけとか、あるいはそういう論文以外、例えば査読付き論文以外は主たる業績とみなさないみたいな、そういう大学の部局とかもあるっていうのは聞いているので。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

業績の範囲

「日本国内と同じで学会報告と論文発表ってことなので、査読付きであれ、査読なしであれ、学会報告、論文、書籍は海外のものであっても評価されると思います。」

〔中区分 5: 国際法学関連〕

中国の場合

「海外だと一番詳しいのは中国の事例なので、中国だったらやっぱりすごく論文が上であって、ただちょっと微妙なことに、中国で査読、無査読みたいな差で論文を評価するわけじゃなくて、中国国内でリストがあるんですよ。その出版社とかその学会自体が、このリストの中に入っていれば、その雑誌に載せる論文がオッケーみたいな。そういう感じです。だから論文重視で。でも評価の基準はちょっと日本と違う。査読、無査読じゃなくてリストに入るかどうか。」

〔中区分 8: 社会学関連〕

論点 5：査読という制度の実態——時間・負担・作法

論点の整理

評価指標としての査読を論じる前に、その制度が実際にどう運用されているかを見ておく必要がある。

第一に時間である。理論経済学者の語りは、査読が早いことが投稿先選択の大きな魅力になり、三年かかる雑誌には特に若手は投稿しなくなると述べる。国際法学の研究者からは、四年近く待たされる間に論文の内容自体が古びたという経験が語られる。分野によって標準的な期間は半年から二年まで大きく異なり、政治学からは投稿数の増加に伴う長期化も指摘される。

第二に負担である。英文学者の語りは、無償の査読労働に数ページの詳細なコメントを書くという支え手の存在を示す。理論経済学からはデスクリジェクトを受けた際の心理的負担が率直に語られる。

第三に作法の習得機会である。会計学者の語りは、査読コミュニケーションのやり方を教えてくれる人が身近にいなかったという経験を述べ、宗教学の研究者からは引用の仕方さえ「人が書いてるのを見て学べ」という世界だったと語られる。日本語学の研究者からは、優れた共著者から査読対応を学んだ経験が語られる。すなわち査読への適応能力は個人の努力だけでなく、環境に強く依存する。分野間の違いは明確ではないものの、体系的な大学院生育成の欠如を示唆しているかもしれない。

第四に、査読の機能そのものへの評価である。国際法学者は査読が自身の自信と他者への教育の双方につながると述べ、経営学の語り手は「ほとんどがストレスフルな経験」としつつコミュニティにおける意義を認める。理論経済学者は、投稿すれば何らかの情報が返ってくること自体に価値があるとする。他方、編集体制がアメリカの学術誌に支配されているという指摘や、アメリカ人編集者の多い雑誌で「読者の興味を引かない」という理由で断られた経験も語られており、査読は中立的な品質判定ではなく、特定の読者共同体を前提とした選別でもあることが示される。

ここから導かれる論点は、査読を評価指標として用いるとき、その指標は研究の質だけでなく、投稿者が置かれた時間的・言語的・人的環境をも同時に測ってしまうということである。

語り

査読の効果

「自分の自信につながりますし、学生にも指導、自分が査読を受ける中でこのような点が重要なんだったという事に気付かされるので、教育にもいい影響があると思います。」

〔中区分 5:国際法学関連〕

査読を受けるメリット

「これは、メリット、やはり査読結果を受けるというのは、ほとんどがストレスフルな経験なんですけれども。このコミュニティで非常に高く評価されている人たちが、何を気にしているのかとか、何じゃなきゃ駄目だと思っているのかという、その明文化されてないような評価基準を体感していくことができ、血肉にしていけることができるというのは、投稿して初めて分かってくることだと思いますし、私自身、幾つかの査読、海外も含めてさせていただいていますが、それも非常に勉強になる。自分自身の研究、研究に直接というよりは、やっぱりこういうところを気を付けなきゃ駄目だとかということが、その感度が研ぎ澄まされていくということが非常に大きいかなと。」

〔中区分 7:経営学関連〕

査読誌を支える努力

「無料でさせられるので。でも、そこで適当に書きちゃわないで、結構詳細に査読を数ページとかで書いてあげるのは。さっき言ったように、その時は厳しいことを言ってるかなと思われても最終的にはその分野の健全な発展というか、変な研究がやっぱり世の中に出ず、それぞれが頑張るっていう意味では査読が大事なかなと思いますし。」

〔中区分 2:英文学および英語圏文学関連〕

査読の作法の習得機会の不在

「日本のデータ使ってたので。誰もそういうところの研究のやり方とか載せ方とか査読コミュニケーションを教えてくれる人が〇〇にはいなかったの。」

〔中区分 7: 会計学関連〕

査読の世界

「やっぱり、年限っていうか、査読っていうのは、満足するまで終わらない、向こうが。要するに、基本、エディターの力が強いので、エディターが満足したら終わりっていうところもあるんですけど。それでもやっぱり、日本の雑誌、私の分野だと結構、一応ここまで出版しないと出せないのってっていう期限で決まってるんですけど、そういう期限がないので。本当に向こうが納得するまではやめられないみたいなのが、やっぱり一番印象としてありました。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

査読・心理負担

「(査読結果を待つ)3 日間はあほうだなと、それはどうでもいい話だけど。でもたぶん僕だけじゃないでしょう。みんなデスクリジェクション食らうかどうか、ドキドキしながら。」

〔中区分 7: 理論経済学関連〕

査読誌への投稿の意義

「はい。レビュアーに回れば 3 カ月ぐらいかかるので、そしたら何かしら情報は来る。投稿したことが無駄にはならず、何かしら、どこが悪かったかって指摘はされるはずなので。まあ役に立たないものがほとんどですけど。ぐうの音も出ないけど、やっぱりそこでトップジャーナルはぐうの音も出ないほど、よくまあ弱点を見つけ出してたいてくるわって。それは勉強になります。」

〔中区分 7: 理論経済学関連〕

査読結果を得る期間の短さ (1)

「明らかにあります。査読が早いのがすごい魅力になります。」

〔中区分 7: 理論経済学関連〕

査読結果を得る期間の短さ (2)

「査読が長いっていうだけでもうほとんどは、特に若い人は投稿しなくなります。3 年かかるジャーナルには投稿したくないです、若い人は。僕だってそうですけど。」

〔中区分 7: 理論経済学関連〕

査読を支配する編集体制とその多様性

「もっと進歩してほしいですけどね。いまだにアメリカ、イギリスの、特にアメリカの学術誌が支配してる世界ではありますけど。でも、何せエディトリアルボードを見れば、大抵日本人が入ってるのは、セオリーなところが若干入ってますけどね。まだまだそこでは弱い。」

〔中区分 7: 理論経済学関連〕

査読期間 (1)

「他の学会誌はないかもしれないんですけど。それで、4 年、3 年ぐらい待たされたことがあって、その間にその論文の内容が変わっちゃう、世の中が変わっちゃって変わるみたいなことがあったので、待機期間みたいなのは参りました。ただ、査読で理不尽なことを言われたとか、そういうことはなかったです。」

〔中区分 5: 国際法学関連〕

査読期間 (2)

「日本の場合は平均 1 年ぐらいですかね。海外の場合はもうちょっとかかると思います、2 年とか。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

査読期間 (3)

「少なくとも半年ぐらいはかかりますよね。だから出版までは半年は多分最低かかりますし、半年か 1 年ぐらいじゃないですかね。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

査読期間の長期化

「長くなっていると思い……あ、どうだろう。雑誌によるかもですね。一時期長くなっていたと思います、投稿論文数がとても増えていますので。それではよろしくないということで、ある程度迅速化に努めてくださっている雑誌もあるような気がします。ただ、最終的な出版までということだと、かなり年単位で、査読通ってから2年とかじゃないでしょうか。」

〔中区分 6:政治学関連〕

査読の時間軸

「これは、Ph.D.取って帰ってきて、そのタイミングに始めた研究なんですよ。実際に投稿に至るまで、丸4年ぐらい、ああでもないこうでもないという形で。ちょっとかなり大事にしてたほうなんですけど、かかってます。」

〔中区分 7:経済統計関連〕

リジェクションへの考え方

「そうそう、のもありますね。だからそれをレディーにしとくわけですよ、何個か持ってて。完全にゼロからなんか、絶対今もう作れないので。だからリジェクションされたから完全にこれ駄目だって思わないで。3・ゼロだったら駄目ですよ。3・ゼロじゃなくて1・2の場合は、やっぱり1つというチャンスがあるんで、ここが巡ってくる組み合わせのタイミングが絶対あるんですよ。その時に合わせればいいだけだと思ってます。」

〔中区分 7:経営学関連〕

投稿先の選択 (1)

「そうですね、やはりできるだけメジャーな雑誌に出したいと思ってますが、それはやはりそんなにうまくいかないで、そこはもう仕方ないと。とにかく出せるとこに出すということでやってますけどね。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

投稿先の選択 (2)

「これまでですと、ただ査読付き論文を1つか2つ狙えばよかったんですけど、今は数がある程度重要になって、そのために出しやすいところ、出しにくいところと選んで両方で積んでおくっていうところと、それとあと、誰でもが、その人をどういう人かなと思った時に論文が見れるような形でオープンアクセスでどっかに出しておく。この3つを両方しなければいけないのが大変だと思いますけど、その3つは必要ですよっていうことは常々言っています。」

〔中区分 3:ヨーロッパ史およびアメリカ史関連〕

査読過程の評価眼

「査読対応プロセスとかもそうなのかもしれないですけど、いい研究を読んで育たないと君たちは進歩しないよっていうことに尽きるんだと思うんですよ。僕自身がそうだったと思うんですけど。なので、学生には非常に、言葉選びは難しいんですけど、ネットに落ちてる情報だとか、日本語の紀要とかで書かれてる論文は、どっちかっていうとジャンクフードだぞと。なので、ジャンクフードばっか食べても健全な身体は得られないじゃないですかというお話をしてますね。なので、一番いい最高級の食材で調理された料理っていうのはトップジャーナルにあるから、それを吟味、それを味わったことのある人間にならなさいっていう、そういう教育方針になってますかね。」

〔中区分 7:会計学関連〕

国内査読誌から海外査読誌へ

「私が査読を受けた時に、ものすごく鳥肌の立つような査読が受けられる雑誌がその2つなんです。鳥肌が立つような査読を受けられないのが日本の雑誌なので。ほんとに重箱の隅をつつくような。最初はもちろんそれもすごく勉強になりましたし、学生にはきちんと国内誌でちゃんと出せるようにならなさいってのは言ってるんですけど、今の私にとっては学ぶものがそこではないので。そういう形で、自分の中でのトップジャーナルっていうのはそこです、今のところ。」

〔中区分 9:教育社会学関連〕

普遍性の重視

「あります。例えばアメリカ人のエディターが多い雑誌には、リーダーの興味を引かないからっていうので断られたりということもありますし、そうするとインターナショナル系が中心になってしまうっていうのはありますね。ただ日本独自のものなただけけれども、それでも世界の人たちが読んで得るものがないと掲載には至らないと思ってますので、そこは普遍性というか一般化というのは考えながら作業してます。」

〔中区分 9:高等教育学〕

国内誌のローカルルールの一例

「私は日本の学会誌しか掲載されてないんですが、多くの人に掲載してもらうために、1 回掲載されると 4 年とか 3 年掲載できないっていう縛りがあって。」

〔中区分 5:国際法学関連〕

オープンアクセスの 2 面性

「一応オープンアクセスに出せとはいろいろ言ってきた、さらにこうすると出版社によってメリットがあるよみたいな感じのことは言ってますけれど。オープンアクセスのほうにするとランクが下がるジャーナルとか、インパクトファクターが下がるっていう、逆の今度側面があって。」

〔中区分 7:経営学関連〕

英語運用能力と査読

「もちろん海外雑誌に投稿する際にはかなり影響はあると思っていて、かつ R&R のところだと、相当書く力がないと対応できないので、そこは僕は課題だなとは自分では思ってます。」

〔中区分 7:経営学関連〕

査読偏重と社会発信の低下

「今、論文査読誌に論文出さない人のほうが少ない。圧倒的に研究してます、みんな。・・・他方で社会的なプレゼンスは、たぶん少なくなってる。みんな研究に専念して概説書を書かなくなってるんで。」

〔中区分 7:理論経済学関連〕

論点 6: 「論文・著書」の枠外にある仕事をどう扱うか

論点の整理

各分野には、論文でも著書でもないが、その分野の知的基盤を実際に支えている仕事の類型が存在する。このような仕事は、一見すると光が当たりにくい仕事であるものの、我々の研究活動の基盤となる仏教学・宗教学の訳注、日本語学の翻刻、考古学の遺跡調査報告書、文化人類学の展示とデータベース構築、美学のキュレーション、デジタルアーカイブ領域における実践などである。外国語教育ではコーパスのような言語データの整備が、美術史ではアーカイブの構築が、宗教学ではプラットフォームづくりが、同様の性格を持つ仕事として挙げられる。

これらに共通する性格は三つある。第一に、多くが共通財・研究インフラとしての性格を持ち、その受益者は制作者本人ではなく後続の研究者であること。第二に、評価の基準が明文化されないまま、しかし実質的には貢献度の高い仕事であること。第三に、成果がテキスト情報として公開されない限り業績として計上されにくく、美術史研究者の発言が示すように、報告の形式そのものが制度によって規定されていることである。

なお、翻刻については、専門家以外の参加によって大量のデータが処理されるオープンサイエンス的な取り組みへの肯定的評価も示されており、誰が担うべき仕事かという問題も派生する。

語り

訳注という仕事 (1)

「でも、もう単に、何々の訳注です。それはそれで、一つの仕事だと思います。だけど、もう私もちょうど、

ちょうどここでやってます。これもう、まさに訳注なんですけども。」

〔中区分 1: 中国哲学、印度哲学および仏教学関連〕

訳注という仕事 (2)

「文系学の場合は。禅は中国語で、漢文で書かれていますから、その漢文を正確に読み解いて、現代日本語に訳して、注を付けていくっていう作業が、最も堅実で、力量も求められるっていう意味では最も高い位置に置かれると思いますね。それが 1 冊にまとまったら、大変な業績であるというふうな考え方ですね。」

〔中区分 1: 宗教学関連〕

調査報告書の重要性

「やっぱり日本考古学ですと国内の査読付き雑誌っていうのは、一つ分かりやすい業績になるかと思いますが、あと考古学のこれ多分かなり特殊なことだと思うんですけども、遺跡の調査報告書っていうものが各遺跡調査の際に発表されてるんですけども、刊行されてるんですけども、それがあまり明文化された基準等ではなくて評価されるみたいなのは、往々にしてあるかと思います。そういったちゃんと調査ができるかという。ちゃんとした考古資料の取り扱い方であったりとか、遺跡に対する取り扱い方っていう、そういった方法の部分で判断する上で報告書がしっかりできているかとか、ちゃんとした遺跡調査報告ができてくるかみたいなのっていうのは、私の経験的に浅いんですけど、感覚的にはどうしてもついてきてしまうんじゃないかなと思っています。」

〔中区分 3: 考古学関連〕

翻刻という仕事

「そうすると、その紀要で出すしかないみたいな時に、それは評価されず、翻刻、何か地元の図書館の資料を適当に、適当って言うちゃいけないけど、ちょっと必要があつて翻刻しとくかって形で発表したものが、大学としては高く評価されるみたいなことがあつて。よく分からないなというところは、正直ありましたね。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

異なるタイプの研究業績 (展示・データベース)

「僕自身は満足ができる著書、編著書、論文が世に出せる。で、攻撃もされたり文句を言うこともあるんですけども、それはやっぱり僕の世代の研究者としては 1 つの目標であり、やらなくちゃいけないことだと思います。その一方で、今、僕は展示に関わったり、それからデータベース作りなんかに関わってます。その時にはユーザーの方とか当事者の方と交渉したり接触することがあります。だからその人たちと協働しながらいかに成果を上げていくか、そこに一番関心があります。」

〔中区分 4: 文化人類学および民俗学関連〕

研究業績の範囲 (キュレーション)

「キュレーションに関してはやっぱり、僕は内容だとは思ってるんですけども、それがメディア、ある種世界のメディアにちゃんと評価されて、それが研究されるか。例えばすごくうれしかったのは、僕の場合は自分がキュレーションした展覧会が、アメリカの博士の学生たちとか先生たちが学会誌に出してくれたりとか。〇〇とかいう人がいて、こういう展覧会を日本でやってたっていうことを評価して、それを評論で載せてくれたっていうことはすごく僕にとっては大きい、キュレーターとしての評価。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

研究業績の範囲 (実践に関する評価)

「そっちのほうは、例えばデジタル・ヒューマニティーズと関連が深いデジタルアーカイブ学会っていうのがあるんですけど、そこだと印象的なのは論文とか書籍とか評価するだけじゃなくて、実践に対する評価みたいなものもあるんです。例えば、沖縄の公文書館がこんなデータをデジタル化して公開しましたっていう賞を受賞したりとか。なので、実践も評価されるイメージではあります。」

〔中区分 2: 言語学関連〕

アーカイブスの考え方の台頭

「それは正しいです。アーカイブズはさまざまな領域が入ってきますし、その中にはもちろん図書館情報

「学みたい分野とか、法学とか、いろんな分野が入って関わってきます。」

〔中区分 3:博物館学関連〕

アーカイブの構築

「なかなか成果を報告する、例えば科研費なんかでもそうなんですけれども、基本的にテキスト情報での公開というか、それが業績として上がっていきますよね。なので、さまざま展覧会であったりとか、そういったものを提示するってすごく難しいです。あとはアーカイブとして構築しましたと言っても、それを書く欄がどこにあるのかって言うと、実際問題ないわけですよ。著書とか論文とかっていうようなところでの業績は上げられるんですけど、なかなかそういったものが上げにくいというところは実際にはございます。」

〔中区分 1:美術史関連〕

プラットフォーム作り

「なるほどと思ったんですけど。私自身はプラットフォームづくりっていうのはものすごく重要な研究活動で、同時に貢献という面でもあるんだけれども、もう少し評価をされてもいいんだろうなっていうことを、今思いました。」

〔中区分 1:宗教学関連〕

基礎的研究データの整備

「測定可能——測定するのは難しいと思うんですけど、ただ、やっぱりデータをオープンにしたりとか、それこそ僕らの分野だとコーパスって言って、言語データみたいなのを収集していろんな研究者の人に使ってもらいたいものがあるんですけど、そういう活動をしてるっていうのは社会的インパクトが確実に大きいので、そういうところには評価されてもいいのかなと思います。」

〔中区分 2:外国語教育関連〕

研究インフラ構築の評価

「(コーパスみたいなものというのはやっぱり研究のインフラストラクチャーの整備とか構築というのに関連するという意味で評価されるべきだって、そういう論点でしょうか。)はい。僕はそう思います。」

〔中区分 2:外国語教育関連〕

翻刻という作業

「だから、文学の分野なんかだと、うちなんか日本文学とおんなじ研究室ですけど、ものによっては翻刻というのが、作業がありますよね。で、文学で卒論書く学生の中には翻刻からやって、その上でテキストを読んで分析もするっていうようなことをやってる学生もいるはいるですよ。だから、その後がやっぱり翻刻自体も大変な作業、その資料を作ること自体大変ですし、それは研究業績としてあり得ると思うんですけど。まだ卒論として認められづらいというのは、やっぱり一段下に見られてるんじゃないかなという。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

翻刻の意味

「そうですね、あんまり厳密にそこを分けたこと、ないかもしれないんですけど。特に従来、僕はほとんど翻刻の仕事はしてないんですけど、その中でも、そうですね、そもそも従来、注目されてなかった資料を翻刻する、これを翻刻すること自体に意味を持たせるっていうんですか、そういうようなこともありました。だからある意味、研究者向けってところもあったのかなと。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

研究インフラとしての訳注

「訳注作りっていうのは、よくやります。それが意味、共通財産っていうか。(そういう個人のお仕事を、論文とか書籍にまとめられる仕事と、例えばこういうのをデジタル化して公開したりとか、訳注を付けて、他の研究者の何か研究に供するような公共財っていうか、プラットフォームみたいのをやるお仕事っていうのは、どれぐらい先生の領域ではあるんですか。あるいは、あまり存在しないんですか。)」

〔中区分 1:中国哲学、印度哲学および仏教学関連〕

論点 7：翻訳をどう評価するか

論点の整理

翻訳の扱いは、業績概念の揺らぎが最も鮮明に現れる領域である。同一の資料の中で、「翻訳は評価しない」(美学・芸術論)から「翻訳は研究でしょう」(科学社会学)まで、対照的な評価が並ぶ。人文地理学や地理学、芸術実践論では普通に業績になるとされ、刑事法学では近年むしろ評価される場合が増えているという観察もある。他方で、社会学では以前は業績だったものが現在は評価されなくなり、その結果として質の高い翻訳がボランティアによって担われる状態が生じている、ことが指摘される。宗教学の研究者からは「翻訳はもう一切、たぶん駄目」という悲観的な見通しが示され、商学の研究者からは対価に見合わないため二度とやらないという経験も語られる。

議論を整理する上で有効なのは、科学社会学が提示する翻訳の類型化である。すなわち、現代の研究書に移し替えるタイプの翻訳と、古典的資料を解説・注解するタイプの翻訳は、必要とされる知的作業がまったく異なる。アジア史研究者の語りも、誰も読めなかった〇〇文字を解説して訳出する仕事と、最近出た書物を日本語に置き換える仕事を明確に区別する。哲学分野の研究者からは、重要な概念に定訳を与える作業が学術的な決定であること、二十世紀の思想家の翻訳をどう位置づけるかという線引きの困難も指摘される。

さらに、翻訳文化そのものへの評価も分かれる。アジア史の研究者からは、欧米志向の翻訳文化が日本の学術に及ぼした弊害という視点が、ヨーロッパ史の研究者からは翻訳が次世代の育成と社会との架橋を担うという視点が示される。近年は日本語文献の英訳の質が急速に向上しているという観察もあり、翻訳の方向(外国語から日本語か、日本語から外国語か)によっても評価は変わりうる。

語り

重要性が低下する翻訳

「ええ。ですので、それはある意味すごくいいことである。小さくまとまった仕事ではなくて、大きな視点で非常に大きな展望を持った仕事をやるっていう点ではプラスですけども。ただもう日本語で社会学の場合、日本語で発表することになってしまって、国際的の通用性みたいなことについていうと、逆にどんどんそれをそいでしまうところがありますので、両面からっていうところがあります。翻訳なんかも業績としてはとても大事だと思うんですけども、今評価という点でいうと、だんだん評価の対象から外れてきたりしているかな。ですから、書評とか翻訳なんか若い人、研究者に頼むと、それは業績になんないからやりたくありませんっていうふうに言われちゃったりすることがあって、ちょっとショックを受ける。当時書評なんかは、業績じゃないけどもと思うんですけど、そういうことを言われるってことを感じていますんで、そういうことかなと思います。」

〔中区分 8:社会学関連〕

翻訳も評価される

「翻訳に関しても、ここだと翻訳っていつでも書籍になるので、かなり業績として認められているふうだなという。」

〔中区分 1:芸術実践論関連〕

翻訳という仕事

「やったら業績になると思います。」

〔中区分 4:地理学関連〕

翻訳の重要性の増大

「あと、翻訳は一昔前は研究業績としてあまり評価されていなかったと思いますけど、最近は評価されるケースが増えてきていると思います。これは何でなのか。恐らくプライバシーの問題はじめ、比較的国際的なやりとりが増えてきているところもあるので、そういったところはやっぱり翻訳があったほうが研究が進むっていう事情も大きくなってきている。いわゆる情報とかプライバシー系の分野ですね。そういうところもあります」

し。あと、法哲学とかのように、もともとインターナショナルな環境がある学問領域は、翻訳がある程度学問業績として評価されてきたので、それが定着してきたというところもあるのかなと思っています。」

〔中区分 5: 刑事法学関連〕

翻訳も業績になる

「そうですね、普通に翻訳も業績になります。まあ、確かに。」

〔中区分 4: 人文地理学関連〕

翻訳は業績にならない

「翻訳はもう一切、たぶん駄目ですね。これは人文系一般でもそうですし、私の業界の周りの隣接している人たちも言うことですが、これはもう一切、評価の対象にならないので、それが逆に問題にもなるというか。結構、翻訳は労力がかかる割には評価が、特にアカデミックな人事の査定であるとか、就職の時とかに全然プラスにならないというので、すごく、文句を言う人もいますし、よくないとは思いますが、基本的には評価の対象にならないですね。」

〔中区分 1: 宗教学関連〕

翻訳が意味ある分野もある

「世間的に言うと、原著論文のほうが高くなるのは仕方がないと思うんですけども、じゃあそちらのほうばかりになって、こういう地道な作業がなくなってしまっているのかというふうに言われたら、それはまた水準の低下ってことを招くことになってくるから、翻訳自身が一つの水準であるという領域もあると思うので、そこは古典の翻訳みたいなのと、それから一般の翻訳というのを分けて考えないといけないかなと。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

翻訳の線引き

「二次文献の翻訳もそうですし。ただ、そこの線引きは難しいですよ。20 世紀の思想家の翻訳ってというのは果たしてどこまで古典というふうに言っているのかという、そういう問題が出てくるので。ただ、基本的に翻訳はサービス業だと思う。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

翻訳のオリジナリティー

「一番思うのは、つまり多分翻訳って、単にいわゆる横のものを縦にするっていうふうな意味で、全く同じ内容に移し替えられるわけではないっていうところが、一番ありますよね。あとは翻訳が難しいのは、それが一番あるからだと思うんですけども。だから、恐らく翻訳が業績じゃないというふうに思われる分野の方っていうのは、多分訳しても、別に内容は何も変わってないと思ってるからだと思うんです。それは新しいこと別に付け加えてないからだと思うんですが。そうじゃなくて、でも実際翻訳する時、普通は何か足そうというだけではなくて、例えば何かいろいろ訳注付けるとか、この訳語どうすんのかみたいなことを考えると、いっぱいあって。そういうところは、かなり一種のオリジナリティーみたいなものがあると私は思うので、そういう意味では研究になると思います。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

翻訳は業績か

「というか、翻訳は研究でしょうっていうのが、どっちかっていうと。翻訳っていう活動自体は研究だと、私は思います。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

翻訳の意義（定訳の確立）

「今、言っていて思いましたが、例えば何か重要なキーワードみたいなものを日本語にどうやって訳すかとかっていうのは、結構定訳があるかないかみたいな話に結局なっていくところがありますし、そういう意味でも大事だと思いますけどね。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

翻訳は評価しない

「翻訳は評価しないですね。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

翻訳の対価

「もう僕は二度とやらないです(笑)。2冊ぐらいやりましたが、何ていうか、たぶん人文系はまだそこに価値を置いてますよね。それが主要な業績になるんでしょうけど、僕がっていうよりも2つあって、学会が評価そんなにしないと。翻訳してありがたいは、あと印税がめっちゃ安いんですよ。2%とか3%で、で、販売部数が増えてくと源泉徴収8%とかって言って、逆じゃんって思うんですけど。だから何ていうか経済的にも報いる仕組みにもなってないんで。あと、ほんとにその言語、日本語で必要だったら誰かが訳すだろうっていうふうに思いますし、機械翻訳もこんなに発達したんで。」

〔中区分 7: 商学関連〕

翻訳の理想と現実

「理想というか、やられてる方は、絶対この人のこれを訳したいっていう形でやってらっしゃいますよね、やっぱり。ただもちろん印税も全くほばない感じで、横で見ながら、・・・何度も校正かけてやってるので、とてもその労力をかけることはなかなか、だからほんとにその研究を大切にされてる方というのはやられてますけど、よっぽど情熱がないと、あと睡眠時間削らないとやれないのが実情ですし、その分帰ってくるリワード的な部分が、ほんと自分の中での価値というのに限定されることが多い気がしますよね。」

〔中区分 2: 文学一般〕

翻訳の価値の変化

「日本のものの英訳は今どんどん質が上がってますし、ものすごくいいのが出てますね。それで、逆に英語のものを日本語にするという作業は、今は基本的に今の特に人文系の研究者の中であまり評価がされなくなってきているので、そういう点ではあまり良くない傾向だと思います。いわば院生や若手の研究者がその分野の古典とされるものを日本語に訳することが一種のパスポートになっていたんですけども、それが今、最近の論文偏重のおかげでほとんど評価がされなくなってきているために、最新の研究成果がいわゆる一般のところにはほとんど届かない形で、でも専門家は非常に先鋭化しているという、ちょっとアンバランスな状態になっているっていうのは、私の知る限りでも人文系全般に言えるところで、非常に由々しき問題だと思っています。」

〔中区分 3: ヨーロッパ史およびアメリカ史関連〕

翻訳と研究評価

「今はあんまりカウントされなくてというのをよく聞くので、ちょっと余裕がなくてそっちも手出さないというのもありますし、ただ理想を言えば、やっぱり文学でもそうですし、学術書の翻訳でもそうなんですけど、もっと翻訳が業績の一つにしっかり重みをもってカウントされるのであれば、もうちょっと海外での今の研究状況というのがしっかり伝わる、実際のところのさまざまな分野のものが伝わるようになるんじゃないかなというふうに思いますよね。」

〔中区分 2: 文学一般〕

翻訳の質と多義性

「翻訳するものの質によるわけですね。例えば極端な例を挙げれば、〇〇文字でもって誰も読めなかったものを解説しても、翻訳は翻訳。あるいは、それについての決定版といえるような校訂本がないような状態で、世間に知られてるものを徹底的に写本研究して訳したのもある意味翻訳ですけど、これは非常に学問的な価値が高いわけですね。」

〔中区分 3: アジア史およびアフリカ史関連〕

翻訳の区別

「私はとても重要だと思っています。自分も学術書の翻訳——あの、すいません、翻訳、多分2種類区別したほうがいいと思うんですけど。いわゆる原典の翻訳ってやつと、それと研究書みたいなものの翻訳っていうのは、多分違うと思うんですが。それは結構質が違いますけども、どちらも大変だと思います。私は

学術書の翻訳は、多分論文とか書くよりもむしろ大変だと思っているので、そちらのほうがどっちかっていうと私はすごいなと思います。自分でも関わりまして、やっていますけど。」

〔中区分 1:科学社会学および科学技術史関連〕

翻訳の意義と問題

「そうですね。一般的な、最近出た書物を日本語に置き換えるタイプの翻訳は学術業績にはカウントしにくいだろうなと思いますね。むしろ、そういう翻訳業をする層があってほしいわけですよ。そうじゃないと本屋さんが学者に頼んじゃって、学者は本屋さんに誘われて喜んでそれを翻訳するのに自分の時間とエネルギーを費やして。で、それが専業になっていくっていうような流れっていうのは、少なくとも今まではあったと思いますし、問題だと思いますね。」

〔中区分 3:アジア史およびアフリカ史関連〕

社会との架橋としての翻訳の意義

「すごく大きいと思います。そういう点で、一般書に近い、もしくは専門書に近い一般書、つまり 5,000 円前後するような本というものを出す活力が今の出版社にどんどんなくなってきていますので。いわば準専門書に関するもの、専門書と一般書の間をつなぐようなものっていうのが今大きく欠落していますので。そこをつなぐ人々をある程度、理系でも今アウトリーチのところが非常に問題になって、いわばコミュニケーターが出てきていますように、人文系、社会学系もそうした間をつなぐ人たちというふうなものを、層の厚みがちょっと薄くなっているところがありますので。そこを何とかするためにも、翻訳というふうなものをしっかり評価するというのは重要かと思います。」

〔中区分 3:ヨーロッパ史およびアメリカ史関連〕

翻訳も業績である

「「翻訳なんか、あんなの何でもない」なんていうところもあるのかもしれないけど、われわれは結構翻訳書なんかもいい業績って思うし、当然、英語で書いた本なんか海外の出版社なんかから出された英語で書いた本とか、国内の論文にしろあれにしろ書籍にしろ、やっぱりあれじゃないですか、それなりにまとめればそれはいい業績なんだっていうふうに、業績としてカウントしようってふうに思うんじゃないっすかね。かなりその辺はリベラルで寛容じゃないですかね。これじゃないと駄目、これじゃないと駄目ってのはないと思います。」

〔中区分 6:政治学関連〕

古典資料の翻訳は研究

「歴史的な、いわゆる広い意味で古典みたいなものに属するものを翻訳するっていうやつで、これはもうどっちかっていうと、ほとんど研究に近いですよ、翻訳自体が。」

〔中区分 1:科学社会学および科学技術史関連〕

翻訳と研究活動

「個人的な、今率直な考えからすると、多分、組織か誰かがそれをどう思うかっていうよりは、どの場面でこれが業績として認められるかどうか。例えば履歴書出して〇〇に応募する時に、どこまでの研究業績が、どこまでのこの、この作業が業績として認められていて、あとは評価されて、評価してもらうのかがちょっと違うんじゃないかなと思うんですよ。」

〔中区分 8:社会学関連〕

翻訳文化の弊害

「日本って翻訳文化、人口はまあまあ多いですよ。1 億何千万いて、かつては子供も多かった。その中で欧米志向で、欧米事情っていうのを広く知りたいっていう大衆的な欲求っていうのもあって翻訳文化が異常に進んでいる。その中で出版業界も含めて、日本語でものを書くことをすごく求めたんじゃないでしょうか、研究者も。っていうのがあるんですけど、そうするとやや、やっぱり私にはちょっと、学問の質ってのは下がるんじゃないかと思うんですね。」

〔中区分 3:アジア史およびアフリカ史関連〕

翻訳と次世代育成

「これはやっぱり良くないことで、だからこれはいわゆる学生たちや子どもたちが今のグローバリゼーションといいますが、今のそういう査定システムを敏感に察知しているんだと思います。いわば翻訳というものが非常に地位が低くなっていて、あくまで世界に通用するとなると、日本のことをするのが一番の近道ですから。学生たちはそれを敏感に察してるんだと思います。やっぱ、苦勞して外国語を勉強してそれを日本語に訳する作業や、それをいわば日本に持ってくる作業というのにあまり魅力を感じなくなってきたっていうのは如実に感じますね。そのためにそうしたものがあんまり評価されないっていうのは良くないことなので、それだからこそ、その間を取り持つような形で、関心がある学生は比較的来てくれるので、人材は安定してきていると思います。」

〔中区分 3:ヨーロッパ史およびアメリカ史関連〕

論点 8：教科書・辞書・一般書・メディア——教育と普及の位置づけ

論点の整理

教科書の扱いは、分野間で正反対に振れる。法学では教科書の執筆は「名誉なこと」であり地位が高く、家政学・生活科学では検定教科書が教育貢献として高く評価される。一方、日本語学の分野では辞書や教科書はアカデミックな業績とみなされず、経済学でもテキストライターは評価されない。

一般書とマスメディアはさらに厳しい。宗教学者の語りでは、一般書は評価されないだけでなく「本業をおろそかにしているのではないか」という負の評価を招きうる。国際法学では新聞へのコメントは業績としてカウントされない。公共経済・労働経済の研究者からは、研究をせずにテレビ出演で社会的評判を保つ経路への批判が示される。

しかし、新書に代表される普及書には積極的な意義づけもある。言語学と日本語学は新書を研究成果の還元として重視し、社会学者は新書や選書が学術的成果を幅広い読者層に届ける日本固有の役割を担ってきたと述べる。アジア史の研究者からは、欧米の一般書を訳すことに学術的意味はなくとも日本の一般知識人の啓蒙という意味はある、という位置づけが示される。他方で日本史研究者からは、新書が多すぎるものが逆にその研究者の質への疑義を生むという観察もあり、量と質の関係が問われている。

ここでの論点は、教育・普及活動が業績体系のどこに位置するのかが定まっていないことにある。社会貢献という別枠に置くのか、研究業績として同じ軸で測るのか、あるいは低い係数を掛けて同じ表に載せるのかによって、研究者の時間配分は大きく変わる。

語り

研究業績の範囲（一般書）

「広めですね。で、もっとその外側にポピュラーブックみたいのが、一般書っていうのがあるっていう感じで。」

〔中区分 7:商学関連〕

研究業績の範囲（教科書）

「教科書が(研究業績の範囲)。」

〔中区分 7:商学関連〕

研究成果としての教科書

「もちろん。教科書の地位が高いのって、法学の特徴かもしれないですよ。」

〔中区分 5:新領域法学関連〕

教科書の位置づけ（社会貢献）

「あとは、論文であるっていうことは一つあるんですけど、それに加えますと、書籍も ISBN 付きの書籍っていうところが一つポイントになってきます。その他の刊行物も意外とあるはあるんですけど、そこまで評価は高くはないかなという印象です。評価の中で恐らく一番評価が高いのが、教育への貢献として、

例えば教科書の執筆なんかになると評価が上がると思います。」

〔中区分 8:家政学および生活科学関連〕

検定教科書

「おっしゃるとおり検定教科書の評価が高いと思います。というのは、教育への貢献っていうところも教育大学では結構見てくださいますので、検定教科書であるということですね。あとは、大学も設置基準で、10年に一度文科省に出さないといけない制度上の制約がありますので、そこでは、教科書っていう言葉の範囲の中には大学で使用しているテキストっていうところも含まれてきます。」

〔中区分 8:家政学および生活科学関連〕

辞書や教科書はアカデミックな業績ではない

「辞書や教科書などはアカデミックな業績とは捉えられない。教育学部であれば教科書も評価されると思うが、私の組織では業績としてはきちんと見てもらえない。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

評価文化の違い

「そうですね。経済学の先生と話していると、テキストライターはそんなに評価されないみたい。全然違うなって、やっぱり思ったりするんですけど。教科書、書かせてもらえるっていうのは、すごくわれわれにとっては名誉なこと。」

〔中区分 5:公法学関連〕

マスメディアの露出に対する評価

「一番うちの分野で評価されないのは、現状ではマスコミとか、マスメディアへの露出ですね。新聞にコメントしたりっていうのは、あんまり業績としてはカウントされていないかなって。ある意味古き良き日本の学会っていうか、そういう状態です。」

〔中区分 5:国際法学関連〕

研究業績か名声か

「研究業績として認められるというよりは、単純にその分野で有名になるみたいところで効果があるような気がしてます。なんで、例えば企業との共同研究が増えてくるとか、あるいはその企業、他の大学のとの、研究者との共同研究か、依頼が来るとかっていうところで、ネームバリューを高めるっていう役割はあるかなと思うんですけど、論文と同じように、こういう研究をしたっていう形で評価されるという形にはあんまりならない気がします。」

〔中区分 10:教育心理学〕

「軽い」書籍の大量出版

「これも非常に難しい問題だと思ってまして、本をたくさん出せば評価されるっていうのは、基本的にあると思います。でも一方で、先ほどのジャーナルの話とは矛盾しちゃうかもしれないですけども、軽い本を大量に出版するというようなケースが起きてきた場合に、それをどう見るかっていうのは、なかなか難しい問題だと思ってまして。」

〔中区分 3:日本史関連〕

新書執筆の多さ

「これも、今までの話が全部関わってくると思うんですけども、ほんとに感覚的な話になってしまいますけれども、新書とかの本があまりにも多いと、逆にその方の業績を見たりする時に、ちょっと気に留まってしまうっていうところはありますね。」

〔中区分 3:日本史関連〕

研究の質に関する疑義

「要するに、同じような内容の読み物を、学説として特に新しいわけでも、ほんとの意味でないのをいっぱい書いてるだけじゃないんじゃないかって。質としてはどうなのかっていう疑念が上がってくるっていうことは、あると思います。そういう場合だと、先ほども言った、お話ししたように、よく知られてる有名なジャーナ

ルに、やっぱり何本か載せているっていうのは、これは有力な根拠というか、ベンチマークになってくると
思います。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

研究成果の社会的還元としての新書

「そうですね、個人的に、今書いている途中なので、いいと。いいっていうか、やっぱり研究成果を還元する
という意味では非常に重要なのかなとは思ってます。」

〔中区分 2: 言語学関連〕

新書の評価

「そうですね、あり得ると思います。それは、やはり自分の研究成果がちゃんと反映されてるっていうところ
があるのかなと思いますけど。大学の授業もそうですけど、自分の専門じゃないところも含めて分かりやす
く伝えるっていう技能も当然、必要になってくるわけですけど。新書の中には、明らかにその分野に関し
ては専門家ではないのだけれども、新書をたくさん書いてるっていうのが、実はありまして。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

新書などの社会的役割

「日本の場合良しあしはありますけども、例えば新書とか選書とかっていうようにいわれるような学術的な
成果を、幅広い読者層に提供する出版機会っていうのがとても豊富ですので、それが広い意味の学問
の基盤をつくってる。そういうのを読んだ高校生や大学生が勉強したい意欲を持ってそれで入ってくるこ
とで、ある程度初めからもう専門的なことが分かっている子が全てではないですけど、一定の水準もう存
在している。なので、比較的短い期間に結構世界的なレベルの研究、英語ではしてないから通用はしな
いんだけど、そういうことやってる子は、いくらでも日本の場合、いろんな分野でいるように思うん
です。」

〔中区分 8: 社会学関連〕

本を書く・出版する目的

「あるいは一番多いのは本ですかね。本といってもそういうための、アウトリーチのための本を書くと、そう
いう形がやっぱ多いんじゃないでしょうかね。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

テレビ出演

「社会的な高い評判を保つ方法が、研究をせずに、なんかテレビに出て発言をする、みたいなふうにな
っちゃってるんで。それは、もう、明確に、その研究活動とトレードオフになってるわけじゃないですか。」

〔中区分 7: 公共経済および労働経済関連〕

論点 9：商業誌と依頼（招待）論文——日本に固有の評価装置

論点の整理

法学を中心に、商業誌への執筆依頼が事実上の評価装置として機能しているという指摘がある。編集は委
員会形式をとり、研究者が編集者を通じて依頼を出すため、依頼を受けること自体が「研究内容の評価した上
での依頼」と受け止められ、周囲も高評価の証と見る。日本文学でも、思想系雑誌からの依頼は断りづらく名
誉であり、優先順位が上がる。国際法学の研究者からは、キャリア形成とともに公募投稿より依頼仕事の比重
が増していく過程が語られる。

この日本固有の商業誌や依頼を通じた評価装置は、二重の意味で注目すべき論点を含む。第一に、審査
の実質を伴いながら手続きとしては査読外にあるため、査読の有無を基準とする評価枠組みからは原理的に
見えない、という論点である。第二に、商業誌は編集者を含めて質を制御する仕組みであるため、雑誌にラン
クを付けることが構造的に難しいという問題がある。依頼が回ってくるかどうかは既存の評判に依存するため、
評価と評判の循環という問題も伴う。

語り

業績発表の場としての商業誌

「日本はそれに対して、商業誌ベースで業績を発表するほうが比較的優先順位高く設定される。商業誌で編集者込みにして質をコントロールするっていう仕組みになっちゃってるので、商業誌で多分ランクを付けることはいろんな意味で難しくなるんじゃないかと思うんですけど。」

〔中区分 5: 刑事法学関連〕

商業誌に対する考え方

「このジレンマはちょっと人にもよるんでしょうね。法学って、そういう商業誌ベースで依頼を受けて仕事をこなすことを前向きに捉える人と、やっぱり自分でやりたい研究をこつこつとやりたいんだ、あくまでそれを仕上げたいんだっていう方いらして。私の場合には、比較的依頼を受けたらそれに合わせてとにかく仕事をやっていこうっていうスタンスだったので、それ自体がキャリアパスをある種つくっていく、キャリアパスにつながっていったところがあったと思うんですね。そういう道をもし選ばなかったら、全く普通のキャリアになったんだろうなとも思うところがある。」

〔中区分 5: 刑事法学関連〕

商業誌への執筆招待

「現在の法学の商業誌って、多くの場合は委員会形式を取っていて。研究者が編集者を通じて依頼を出す形になってるんですね。そのような形態を取ってるので、招待といっても実質、研究内容を評価した上で依頼されてるっていう実感が強いものですから、「高い評価がされたんだ、この人は」っていうふうに周りが見る傾向が強いんですね。だから、それがいいか悪いかは別にして、商業誌のプレゼンスを高めていくっていう構造になってるんじゃないかなとは。」

〔中区分 5: 刑事法学関連〕

国内文学研究に特徴的な傾向

「それが大変断りづらいし、結構名誉なことが多いので、文系思想雑誌とかから来るとやっぱり絶対載せたいというのがあるので、そうすると、そっちがどうしても優先順位が高くなるので、評価基準の中では恐らく、たぶんそうはなっていくと思うんですけど、招待論文とかそういったものもある程度、業界の中ではかなり重要視、依頼するからにはそれなりにこの人にとって思っただけ依頼してるものなので、ある程度、査読論文ほどではなくても、それなりの評価をしてもらえるとすごくうれいって思ってるのが今日この頃なんです。」

〔中区分 2: 文学一般〕

依頼（招待）論文の増加

「それが徐々にいろいろな形で皆さん、私のことを知るようになって、だんだん公募から依頼仕事が増えていって、日本の研究会、学会で顔が知れる中で、割と依頼仕事に比重が置かれていって、だんだん査読付きとか、公募のものに出すいとまがなくなってきたっていうのは、残念ではありますが、以前はこんな仕事頼まれなかっただろうなっていう重要な研究グループにも入れてもらったりもすることがあるので、やっぱりキャリア形成とともに公募よりも依頼仕事が増えていくっていうのは感じています。」

〔中区分 5: 国際法学関連〕

依頼論文とレピュテーション

「査読はないけど、〇〇(商業誌)の特集に、名前を表紙に載せてもらって論文を書けるというのは、われわれの研究者の業界においては「すごいね」ってやっぱり言われること。なので、どこの出版社から出るか、どの雑誌かっていうことが非常によく見られる。」

〔中区分 5: 公法学関連〕

論点 10：境界線をどこに引くか——「その他（MISC）」という受け皿

論点の整理

researchmap をはじめとして一般的な業績データベースに存在する「その他」項目に該当する仕事の存在が、何を業績として何を業績としないかの境界の画定を困難にしている。例えば、翻訳に解題を付けて紀要に載せたものは「やっтерることとしては論文くらい」だが、「形は論文じゃない」と理解されている。学術書か一般書かの境界も、研究業績と見なせるかどうかの境界も、明確な線を引けないまま一般的に運用されている。

ここでの論点は、境界の曖昧さそれ自体ではなく、曖昧なものを受け止めるカテゴリーが「その他」しかないことである。「その他」に分類された時点で、その仕事は集計上ほぼ不可視になるため、境界事例は評価の対象から静かに脱落することとなる。

語り

「その他」項目の意味

MISC 普通見ないと思うんですけど、要するに論文でもないような気もするけれど、でもやっぱり重要な仕事みたいなものっていうのは結構あるんですよね。それが、ただあまりうまく言語化できないとこがあって、「その他」。まあ、確かにその他なんだけどみたいなところがあります。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

「その他」項目の対処

「あとはやっぱり、論文なのか論文じゃないのかっていう境界が、結構曖昧なものとかっていうものの中にはあると思います。私自身も、さっきの挙げた例で言いますと、過去に昔の科学者の書いたものを、その一部ですけど、それを日本語翻訳して、ちょっと簡単な解題みたいなのを付けて、それを昔所属してた大学院の紀要に出したことがあります。これ多分 MISC なんですけど、やっтерることとしては論文くらいのことをやっтерてると思いますが、形は、でも論文じゃないみたいな感じですね。例えば、そういうのはやっぱりくえないカテゴリーです。だから、そういうような、これ一例なんですけど、そういうところはあるかなと。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

業績の境界線の引き方

「あとは、それよりもっと難しいのは、いわゆる一般向けって呼ばれる著述もそうだと思いますけれども、そういうのをどういうふうに評価するのかっていうことは、とても難しいです。学術書なのか一般書なのかっていう境界も、結構難しいところがありますよね。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

研究業績の境界線

「だから、いろんなところに書いたものをまとめて出している時にも、さすがに研究の世界では常識だけでも、社会的に広がっていないことっていうのだけ上げて、仮にそういうものがあつたとして、それを研究業績と見なすことはないと思います。」

〔中区分 8: 社会学関連〕

論点 11：速報性の高い業績評価（学会発表・国際会議・プレプリント）をどう扱うか

論点の整理

学会発表や国際会議は、業績としての比重は低いものの、キャリア初期には研究能力のシグナルとして考慮される、という限定的な位置づけが語られる。教育工学ではあくまでも査読付き論文が基本ではあるものの、国際会議も業績に数える。心理学ではプレプリントは数学や AI・機械学習分野ほどの市民権を得ていない。

他方、国際法学からは海外ではブログが投稿ジャーナルと同等かそれ以上の重要性を持ちはじめ、判決や紛争への即時のコメンタリーに価値が置かれているという指摘もある。日本の研究者が同じ問題について二年後に英語で書いても、もう読まれない。

ここから、査読を通す時間コストと、議論に参加する速報性のトレードオフを評価体系がどう扱うかという論点が導かれる。現行の業績概念は前者のみを計上し、後者を計上する枠組みを持たないという課題を指摘することができる。

語り

浅いキャリアにおけるシグナルとしての国際学会

「(学会発表数は業績として)見られないことはないと思います。特にキャリアが若い時は、例えば大学院生とかそれぐらいの時って、やっぱりパブリケーションとしてはそんなにたくさん出せなかったりするので、1つの指標として、例えば国際学会できちんと発表しているかとか、そういったところは考慮に入れられるんじゃないかなとは思いますが。」

〔中区分 10: 実験心理学関連〕

国際会議も業績と数える

「いえいえ、国際会議も数えますよ、もちろん。」

〔中区分 9: 教育工学〕

プレプリントの評価

「多分、まだあまり心理学の領域では、プレプリントは、だいぶ広まってきてはいるとは思いますが、例えば数学とか AI とかの、機械学習のとかの関連の、あっちのほうの分野だとプレプリントがちゃんとそのまま、結構ちゃんとしたものとして評価される側面もあるのと比べると、まだそこまで市民権を得てるわけではないように見えます。」

〔中区分 10: 教育心理学〕

スピード感の大切さ

「だから、ブログが今、投稿ジャーナルと同じか、それ以上の重要性をグローバルには持ってきているようになって、とにかくいかに早く判決のコメンタリー書くかとか、社会的問題、ガザの問題について国際人道法の評価をするとか。日本でも今、割と若い研究者が X を利用して市民に解説してますけど、それが学術レベルで海外ではブログでそれが展開されているので、スピード感がグローバルでは大事になってきているなっていう感じがしています。日本の研究者が英語で 2 年後に同じ問題について書いても、もう誰も見ないかなって気はしています。」

〔中区分 5: 国際法学関連〕

第 II 部：言語と国際化——何語で書かれた業績を評価するか

論点 12：日本語・国内業績が上位に立つことには理由がある

論点の整理

国際業績重視への違和感は、しばしば研究者の「内向き」志向性の表れとして否定的な文脈で処理されがちである。しかし研究者の「語り」をたどると、日本語・国内査読誌を上位に置くことには分野固有の合理性があることが分かる。

日本文学者の語りが最も明示的である。第一に、日本の古典を研究対象とする以上、海外の研究者も現代日本語を読める、あるいは読めることが期待されている。第二に、英語論文では引用する古典本文を英訳せざるをえず、英訳には解釈が入るため、引用が論拠として十分に機能しない。史学一般でも、外国語で書いても「読まれないです。ほぼほぼないのと一緒に」という現実が語られ、美術史でも英語のみで発信する日本人研究者は日本の美術史の中で意外に参照されないと指摘される。

さらに踏み込んだ論点として、言語と概念の関係を指摘することができる。史学一般の研究者は、あらゆる学問で使われる概念が近代日本に人工的に取り入れられ自明のものとなった経緯を指摘し、日本語で研究すること自体がその概念構成を問い直す作業と不可分だと述べている。哲学分野からも、われわれの社会やわれわれ自身を理解するという営みにおける言語の位置づけが語られる。社会学者は、母語で発表する機会が失われれば知の循環が途切れると警告し、人文地理学者は少数言語による業績それ自体の価値を主張する。

したがって、検討すべき論点は「内向きか外向きか」ではなく、その分野で議論が実際に成立している言語空間はどこか、そして研究対象と研究言語がどう結びついているかという経験的な問いに置き換えられるはずである。

語り

国内日本語業績の評価

「はい。それは、一番強調しておきたいのは、やっぱり国内の日本語の業績はちゃんと評価されなければいけないということだと思います。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

業績評価の特徴 (1)

「はい。われわれの業界で何が業績として評価されるかと言いますと、やっぱり第一は、国内の査読雑誌で、しかも日本語で書かれたものです。その理由は、日本の古典を研究するので、海外の研究者も、当然、現代の日本語が読めるわけですね。もう一つは、英語論文の場合は、引用する古典の本文を英訳することになるんですが、英訳には解釈が入らざるを得ないので、引用文が論拠として十分に機能しないという問題があります。それによって、英語論文でレベルの高い論文を書くのが難しいというところがあって、基本的日本語の国内査読雑誌が一番評価されます。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

業績評価の特徴 (2)

「社会学の、特に日本語圏の社会学の場合は、かなり特異なところがありまして、いろんなものが研究業績としてカウントされるという性格があります。過去起きた大きな変化としては、これも数十年単位なんですけど、翻訳は、以前はそれ自体が業績だったんですけども、現在ではあまり評価されない形になっています。だから、質の高い翻訳がボランティアによって担われているという状態になっているのが大きな部分だと思います。それ以外では、実は海外優先とか査読優先とかがないのが特異性だと思います。」

〔中区分 8: 社会学関連〕

日本語で書かないと評価しない文化

「研究評価に関しては、やっぱりまだまだ西洋関係の研究をしてたとしても、日本語で書かないと評価されないっていうのはあります。」

〔中区分 3: 史学一般関連〕

日本語で書かないと読めない慣行

「そうです。だから外国語で頑張って書いてたとしても、読まれないです。ほぼほぼないのと一緒に、読まれないっていう形です。」

〔中区分 3: 史学一般関連〕

日本では日本語で書かれていないと読めない

「外国での評判が日本にそのまま反映されるかっていうとそんなことはない。外国、つまり英語だけで発信してる日本人の研究者が日本の美術史の中でどれだけ参照されてるかっていうと、意外とそうでもない。やっぱり日本語で書かないと日本人、読まないかなっていうのは。これから多分、もちろん変わっていくとは思いますが、少なくとも今の先生たちのポジションを考えると、日本語で書いてないと反映されてないっていうか、結構あるかなと。」

〔中区分 1: 美術史関連〕

英文オンラインジャーナルの役割

「ちょっと難しいですね。あんまり同じ評価基準でくれないのかなという面もありまして。というのは、英文オンラインジャーナルは、海外の、まだ日本語論文をたくさん読めない方のために、日本で刊行されている研究の最前線を読みやすい形で普及させるっていう役割も負っていますので、ちょっと日本の学会誌とは目的も違うので比べられない面はあるんですけども。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

日本語で書く意義

「日本の学术界に物申すみたいなモチベーションがあるっていうことだと思います。日本も、文化人類学とか地域研究でいえば、そんなに世界的な水準から見て後進的とは言えないと思います。特に南アジアとかの研究だと、日本人が結構先駆的な役割を果たしてきたところがあるので、その点でいうと、日本の学术界に何か日本語で出すっていうのが、全く無意味とは思えないです。」

〔中区分 4: 人文地理学関連〕

研究における使用言語

「研究にも関わってきます。要するにやっぱり西洋の歴史みたいなものと近代的な概念、例えば大学もそうですし、研究とか、ほぼ全ての研究用語。社会であるとか、権利であるとか、そういうものの全てっていうのが、ヨーロッパの歴史の中で自然と出てきた。自然発生ではないですけども、歴史とすごく結び付いて確立されてきたものが、当たり前の概念としてある中で、それが前提として人文系とか研究が進んでいくけれども、全てを日本語で勉強できるっていうのは便利である反面、その日本語自体も人工的に日本語に導入された概念なわけで、そうなってくると過去のことを見た時に、かつてなかった概念を過去に求めるっていうことはあり得るわけで、日本語の抱える歴史とのギャップ、それを踏まえて、それを無自覚に受け入れている私たちと過去とのギャップみたいなものっていうのは、常に意識しなくちゃいけないし、ある意味それは日本語話者の持つハンディキャップであると同時に可能性でもあると思うので、その辺を含めた研究っていうのは、人文科学の研究者は、持ってないといけないんじゃないかなっていうのは思ってます。」

〔中区分 3: 史学一般関連〕

日本語を介した研究行為

「先ほども申し上げたように、あらゆる学問で使われる概念が、近代の日本に人工的に取り入れられて、それが自明のものとして移植されているけれども、それは表面上の西洋近代精神の移植に過ぎなくて、それと折り合いを付けている日本語っていうのが、あった上での現代日本語があるので、その辺っていうのと、それから今、平均化されている英語っていうものの価値観っていうのは必ず差異があるはずなので、その差異っていうのと、そのギャップっていうものは、逆に貴重なものに今なりつつあると思うんです。」

〔中区分 3: 史学一般関連〕

母語としての日本語

「これが国によって母語で発表する機会が研究者の中でなくなってしまうと、そういうある種の知の循環が途切れてしまいかねないところがあります。悪いことばかりではないなと思ってはいるんですけども。ただ、そこをうまくバランス取りながらもっとアピールしていきたいな、いけたはずだなんていうふうに思います。」

〔中区分 8:社会学関連〕

日本語の支配性

「日本語が非常に支配的です。」

〔中区分 3:ヨーロッパ史およびアメリカ史関連〕

日本語中心性

「海外に書いてもあまり受けないだろうな、みたいなのは日本語って感じです。」

〔中区分 10:教育心理学〕

言語的多様性の保存

「少数民族の方たちの言語っていう点でいうと、その言語自体が価値を持つものだと思うので、その言語による業績っていうか、著作とか、そういうのを残す意義は大きいとは思ってます。」

〔中区分 4:人文地理学関連〕

論点 13：英語というリンガフランカの支配とその濃淡

論点の整理

英語という言語の支配は、多くの分野で既成事実として語られる。哲学では第二次大戦後しばらくまで英独仏が拮抗していたものが急速に英語へ一元化し、現象学のような領域でも英語化が進んだことが指摘される。人文地理学では、かつて必須だったドイツ語・フランス語が後退した。宗教学、史学一般、観光学、経営学からも、読むのも書くのもほぼ英語という状況が報告される。

しかし、その濃淡は大きい。哲学の内部でも、科学哲学のように英語圏の影響が極めて強い領域と、そうでない領域がある。日本史では「英語で書くと、多分誰も読んでくれなくなる」とされ、法学でも、実定法の研究者にとって英語での公刊は当たり前ではない。

注目すべきは、圧力の出所が、学問内部ではなく各研究者が所属する組織にある、という語りが複数あることである。仏教学では「上からは言われます。英語で書け、英語で書けというのは」、基礎法学では業績カウンターの定型化として、日本文学ではテニユアトラック以外の教員にまで英語論文が求められはじめた状況として語られる。日本史の研究者からは「英語で書く必要がないので。それなのに英語で書けなんて」という反発と、「じゃあ何で皆さん、英語で論文書いてるんですか」という逆の質問が寄せられる。

それと同時に、英語で書くことの積極的意義も明確に語られている。アジア史では読んでほしい相手が海外にいたため、美術史では日本人が英語を読まないがゆえに逆に英語で書く意味があるとされ、哲学の研究者からは日本語では言えるが英語では言いにくいこと、その逆もあるという複数言語使用の利点が指摘される。日本文学の研究者からは、英語論文には新しいことを言っているものが少なく日本語論文の要約になりがちだという質の観察と、日本語で書いた論文こそを国際的な業績として評価すべきだ、という主張が同時に示される。

語り

英語圏の影響

「いや、やっぱり英語圏の影響が強い分野とそうでない分野っていうのがあります。一番例えば強い分野でいうと、科学哲学とか分析哲学ってのは全く英語圏が主流です。宗教哲学とか政治哲学になるとやはりまだまだ、今もうだいぶ変わりましたが、大陸哲学の影響が強いので、こういったシステムというか良くも悪くもですけども、通常科学化の影響が及ぶのが遅かったということです。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

英語による標準化 (1)

「ヨーロッパの言語で論文発表されてると思います。同じような研究をアメリカでやる人は、もちろん英語で発表していらっしゃるんですけども。あとヨーロッパでも、もちろん英語でも発表媒体もありますので、それはそういうところでも出される方もいますが。ドイツ語圏でドイツ語で発表される方もいるとか、そういう形になってますね。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

英語の支配性 (1)

「いや、それは、これまたこんなこと言っているのか分かんないけど、やっぱり英語の世界なんです。アメリカ、イギリスが中心ですから。フランス、ドイツも影響力ないわけじゃないんだけど、そういう人たちも英語で書いてますから。だからまずどこに留学するか、どこで発表するかを考えた時に、英語は無視できないというのが本音というか状況だと思います。」

〔中区分 4: 文化人類学および民俗学関連〕

英語の支配性 (2)

「若干、言ってみれば、ある種の英語帝国主義的な潮流に関しては、今後どうなるか分かんないですけど、多少変化の兆しあるような、今の技術によってという感じがしてますね。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

英語の支配性 (3)

「そうですね。今言いましたように、やっぱり英語がほんとに急速にリングフランカ化したわけです。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

英語の支配性 (4)

「地理学だと昔はドイツ語、フランス語が必須で、地理学ってそこで結構発達してきたところがあるので、大陸のほうで。だけど、今はもう、多分ドイツ語、フランス語を教えたのが、うちの教室が最後ぐらいじゃないかと思うぐらい、もう廃れて。廃れてって言ったら悪いんですけど。だから、ちょっと上の年代の先生方だと、結構フランス語で論文書いてたりとか、ドイツ語で発表されてたりとかっていうのはあったんですけど、今は専ら英語になっちゃってます。」

〔中区分 4: 人文地理学関連〕

英語の支配性 (5)

「はい。これ、欧米の中でもあって、ドイツに行ったりすると確かに英語で論文書くと多くの人に読んでもらえる。ただ、言いたいことが伝わるかっていうと、そこではやっぱりかゆいところに手が届かないような、そんな思いはあるという向こうの人たちもいるし、それをわれわれも同じような感じはあって、英語だけでほんとにいいのかどうかっていうのは、ちょっと考えてるところですけど、あと 10 年たつと英語が中心になってくんじゃないかなって気はしますけどね。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

英語の支配性 (6)

「今はもうほぼ英語になってますね。学際研究のほうはもう完全に英語。現象学、プロパーの研究にしても、ドイツ語で書くっていう機会はもうなくなりましたね、今は。10 年前ぐらいだったらまだ、10 年前はまだ少しはあったかなっていう気はしますが、今はないですね。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

英語出版の理由 (聴衆の広さ)

「やっぱり読んでほしいなと思う人たちが、海外の人が多からです、同じ分野の研究者で、読んでほしいなと思う人たち。」

〔中区分 3: アジア史およびアフリカ史関連〕

英語公刊が読者を狭める

「出せはするけど、われわれの分野は英語で書くと、多分誰も読んでくれなくなるので。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

日本語中心の国際的活動

「私たちはやっぱり日本語で、日本の学会できちっと認知される仕事を目指して普段はやっています。例えば英語圏の先生方は英語で日本文学の論文を書いておられるんですけども、必ずしも日本語に精通してるわけではないので。例えば論文は書けるかもしれないけれども、発表とか会話がままならないとか。あるいはその書いている論文も、ここが一番の僕は問題だと思ってるんですが、ありていに言うと研究方法が違うんですよ。われわれ日本人で母語になって日本でやってる研究者たちは、基本的に日本語の文献に基づいて実証的に研究をするんですね。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

英語標準化への反発

「だからやっぱり英語一辺倒じゃないんだっていうことを一番言いたいですよね。」

〔中区分 5: 新領域法学関連〕

英語公刊が当たり前ではない世界

「僕はまずちょっと普通にいうと、実定法っていいですかね、日本でいわゆる聞いたところの法律の法学をされてる方は、もうそんなのやる気ないと思うんですよ。もうそんなの出そうとはあんまり思ってないし、そんな要するに不格好な取って付けたような英語で日本の物事を無理やり書いてみて何の価値があるんだって思う人が多いのかなと。」

〔中区分 5: 基礎法学関連〕

英語公刊が当たり前の世界

「私の〇〇大学での指導教員が、日本語で発信していても誰も読まないっていうような方針だったこともあって、自分も早くから国際的に発信するってことを意識して、特に博士課程に進んですぐに海外に行くようになっていうふうに言われ、博士論文はできれば海外で、セーフティネットとして〇〇があるっていうような感じだったので、なるべく国際的発信の中でも英語での発信っていうことを考えていて。」

〔中区分 5: 国際法学関連〕

英語発表機会の不在

「いや、少なくとも文学部の先生方、大半の先生方は、それでは困るという。特に例えば日本史とか国学とか、国文学っていうか、やってる人たちは、海外、英語で発表するなんか、基本的にないわけです。われわれも中国語では発表しますが、英語で発表するなんてことも考えたこともないですし、ということ。」

〔中区分 1: 中国哲学、印度哲学および仏教学関連〕

英語公刊が当たり前ではない世代

「そもそも日本語学の、特に何か古典とかやってらっしゃる方はあまり英語を書こうとか読もうっていう、そういう方面の努力はしなくていいっていうふうに考えてらっしゃるのかなと思ってます。」

〔中区分 2: 言語学関連〕

世代によって異なる状況

「そうですね。やっぱり若い世代が国際誌に出す人が増えてきているので、そういう機運は高まっているのかなと思いつつ、でも、逆に言うと、上の世代の先生たちはなかなか国際誌に出すっていうことはないし、英語教育だと英語で論文書くって普通なんですけど、国内誌でも、でも、英語教育じゃない教育の分野だと、まあないことなので、結構大学からは英語論文を増やせっていう指令はあるんですけど、でも、若い人はみんな英語で書いてるけど上の人は書いてないみたいな感じなんで、英語論文を書いたら、例えばそんな妥当なあれじゃないんですけど、国内誌の 2 倍得点が付くとかそういうような仕組みは全然ないです。」

〔中区分 2: 外国語教育関連〕

何のための英語公刊か

「じゃあ何で皆さん、英語で論文書いてるんですかっていうところを、逆に聞いてみたくて。他の分野で英語で書くのが素晴らしい業績とされる理由を教えてくださいってというのがあって。それって皆さん、どういうふうに答えてられるのかなっていうのは、少し気になります。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

英語での発表・公刊の必要性

「研究分野では難しいですけども、個人的にはとなりますけど、日本語で出してるだけだとちょっとまずいかなというのは非常にあります。やっぱり英語になってきてると思います、世界的に。ドイツでも、ドイツ哲学研究でも、「やっぱり英語で書かないと駄目ってなってるらしいよ」とかって聞きますし、英語で。国際的業績の範囲。英語で単著か、ちゃんとした雑誌に論文載せるぐらいじゃないでしょうかね、やはり。」

〔中区分 2: 英文学および英語圏文学関連〕

英語業績圧力の弊害

「ただ、自分の分野、特に古い時代のやっている人間からする、英語で書く必要性がないので。それなのに英語で書けなんて言われちゃうと、余計な仕事が増えるだけだなんていうふうに思ってた。であれば、英語、日本語関係なく本、論文、発表ぐらいの感じで、シンプルな業績を評価をしてほしいなっていうふうに思ってます。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

英語出版圧力

「上からは言われます。英語で書け、英語で書けというのは。」

〔中区分 1: 中国哲学、印度哲学および仏教学関連〕

英語出版圧力

「昨今見ると、法学というよりは学内で、学内というか業績のカウントの仕方というのがかなりもう定型的になってきてるので。例えば紀要に論文出したってあんまり評価がないとか。それから、日本語論文だったら両方とも英語論文書けみたいな話になってますよね。それはこの業界でっていうよりは、何かまずうちの大学はそれが少し顕著なのかなっていう気もしますけどね。法学っていう領域って大体みんな日本語で論文書くので、その意味ではみんな非常に困ってますけど。それがあるかな。大体何をしても別にそう評価されるっていうわけではないかもしれないと思いますけどね。」

〔中区分 5: 基礎法学関連〕

言語選択の現状

「これは、全体的には抵抗するほうが強いのかなという感じはします。やっぱ、英語で論文書くのが難しいところがある。ただ、そういうのはちゃんとやって責任を取っていきなきゃいけないって考える方も一方でいるので、徐々に英語の論文も見かけるようにはなりましたが、しかし、やっぱり質が高いものってなると、日本語の論文のほうに投稿するという感じではまだあります。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

英語論文の劣位性

「新しいことを言ってる論文はあんまりないなっていう感じです。日本語で出した論文のまとめとか、そういったものにやっぱりならざるを得ないなという印象です。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

日本語論文の国際性訴求

「私はそちらのほうですね。日本語で書いた論文とか日本語の発表をもっと国際的な業績として評価して後押ししていくべきだと思っています。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

英語論文への傾斜（組織内部）

「はい。ただ、今、文学部の教員全体に、テニユアトラック以外の教員も全て英語論文を出すように言わ

れ始めているので、今後どうなっていくかは分かりません。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

英語化に向けた基礎的作業

「やっぱり日本の古い分野をやっていると、例えば言葉一つ取っても、なかなか英語にしにくいというか。例えば私が専門の神楽というものが、英語にした時に非常に訳し方が難しかったりしますが、そういうこと一つ取っても、実はまだはっきりしてなくて。実は、そういう専門的なターム一つ一つを定義付けていくってというか、そういうことがまだできてないんじゃないかなっていう。だから、なかなかみんな、どうしていいか分からないんじゃないかなっていう。ちょっと答えになってるか分かりませんけども。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

複数言語を用いる利点

「特に哲学だと、日本語では言えるけど英語だとうまく言えないねってようなこともたくさんあるわけですね。それはもちろん、私たちの自分の母語でもありますから、より繊細な感覚で表現できるっていうことももちろんあるんですけども、でもどうやったって訳せはしないよねというような言葉や表現、これはありますので、これをじゃあどうやって英語に移していくかっていうところで、またいろいろ工夫が必要になって思考が刺激されたりってこともあるし、あるいはその逆もあるし。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

英語で書く意義

「英語で書くっていうのも 2 通りあるっていうふうに私考えてまして、1 つは研究対象社会の人です。外国研究であればその国の人。もう一つは国際社会の研究者向けで。それで、その国の人向けには研究成果を紹介したいと思ってましたから、それは本を書くというよりは、論文をみたいところで、あるいは、学会発表でやってきたのでそれは一貫してるんですけど、そうでない国際学術社会に向けて英語で発信するっていうのは、私は元々ほとんど重きを置いてなかったです。ディシプリンの、理論的に、切って見るっていうのだと、現地で起こってることの意義が十分分からない上、どうもディシプリンの枠に当てはめると、自分がほんとに書きたいことが曲がってってしまうっていうのを、語学的な限界のせいもあるかもしれませんが、感じてたので。それで、英語でそういう国際的な学術会に発信してもあんまりしょうがないかなと思って、英語で書くんだったら現地の人向けに、現地の人だったらどういう書き方をすればいいかっていうのは自分で分かると思ってましたんで、これがずっとあったんですけども。そのことはそのことですけども、ディシプリンの枠にはめて理解されるような形で表現するっていうのをやっというでもいいかなっていうふうに最近思うようになったんで、そちらのほうもやるようになってきたっていうところあります。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

使用言語について

「ほんとにグローバル化を進めようとするならば、もう英語だけにしちゃうとかいうことしかないと思うんですが、僕たちのいわゆる言葉の学問、表現して記録していく。さっき言ったように多様な言葉でいいわけで、それからこれだけ AI も発達してきて翻訳力が出てきてなると、日本語で研究してちゃんとやってれば、10 年後 20 年後には日本の僕は文化人類学の研究は社会的に評価されると思います。要するに多くの研究者はほとんど日本語で書いてます。もしくは現地語で書いてます。だからいわゆる英語の世界の人たちが見る機会っていうのは少ないです。」

〔中区分 4: 文化人類学および民俗学関連〕

論点 14 : 国際業績が支配的な領域と世代・組織による分岐

論点の整理

同じ社会科学の中でも、理論経済学では「9 割方、国際査読誌」であり、知名度の高い査読誌で引用されることが学術的評価のほぼすべてとされる。会計学研究者の語りは、この分岐が世代によって異なることを示唆している。具体的には 50 歳前後が分かれ目で、それより下の世代は国際ジャーナルを主軸に置く者が増え

ている、と指摘している。経営学では、かつて教授昇進の条件が単著であった時代から、海外ジャーナル複数本公刊することを根拠にする時代へと基準が移り、その合意が形成されつつある。社会心理学、外国語教育、日本語学からも、若手ほど海外誌に投稿するという同じ方向の変化が報告される。哲学では、分析哲学のように英米中心の領域から先に変化が進んでいるという分野内の時差も語られる。

制度運用の面では、既に雇用されている教員には国際業績を求めず、新規採用者には求めるというダブルスタンダードも観察されている。法学では、法科大学院教育の負担ゆえに外国語での発信が難しい一方、大学執行部を説得する観点からは英語で発信できる人材を意識せざるをえない、という組織的な板挟みが語られる。教育社会学では研究業績を海外誌のみに絞るという個人の選択も現れる。

他方で、変化に加わらない意図的な研究者の選択も明確に語られる。日本文学の研究者からは海外発信の必要は「ないですね、今のところ。なくても済んでる」、美学・芸術論の研究者からは「僕には正直ないんですよね」、芸術実践論の研究者からは「ガラパゴス化して突き進むのもいいんじゃないか」という応答が示される。哲学の研究者からは、自分自身にとってではなく後進にとって必要だという世代を分けた整理と、プレッシャーによる海外発信の実態が語られる。

ここでの論点は、評価基準の移行が、分野・世代・雇用時期によってまだらに進行していることである。移行期には同一組織内に複数の基準が併存し、どの基準で評価されるかが個人にとって予測困難になる。これはこれからキャリアを積む若い世代にとって、特に深刻な問題となりうる。

語り

国際査読誌がほぼ全て

「まあ 9 割方、国際査読誌ですよ。あとは、評価っていう点ではそうですね。結局、評価は無論、あとは教え子が何人いるみたいなどでも、それは評価ではないですよ。レピュテーションっていう点では、何とか学会でいいプレゼンしたみたいなのはあるかもしれませんが、それも広い意味での評価にはなるかもしれませんが。結果的に、でもそれもいいプロジェクトでなければそれもないので。ですから学術的な評価っていう点では、英語の査読付き雑誌、特に知名度の高い査読付き雑誌でみんなに引用されるような、みんな読まれるようなものが一番評価されますよね。」

〔中区分 7:理論経済学関連〕

業績評価軸の世代間ギャップ

「国内の周りの研究者だと、これ、年代にまたよるんだと思うんですよ。ちょうどこれが、いろいろきのう考えてたんですけど、僕の年代が分かれ目なんだと思うんですね。50 前後、50 ちょいぐらいが分かれ目で、そこから下の人たちは比較的、今僕が持ってるのに近い感覚を持ってるんだと思うんですね。国際業績国際ジャーナルというところにメインを置いてる人が多い、増えてる気がします。」

〔中区分 7:会計学関連〕

業績評価に対する考え方

「変化はあると思う。やっぱり以前に比べれば、海外でのパブリケーションとかは海外で発表するとか、あるいは国際シンポジウム、こちらで開くとか、その価値っていうのは高まっているし、その比重も相対的に大きくなって思うんですけど、同時にそれだけじゃまずいっていうのをみんな共有してると思いますね。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

業績評価のダブルスタンダード

「そうですね。既に雇われた人については、当然国際業績を当初そこまで重視せずに、そこは関係なく昇進ということになり得ると思います。新しい方は、国際業績重視はそのとおりだと思います。時間がたった時に、国際業績がないと昇進が難しくなるかというのはちょっと見通せず、そういう狭間だと思いますけれども。」

〔中区分 6:政治学関連〕

外国語業績での発信

「他方で、大学執行部を説得するという観点からすると、曲がりなりにも英語で業績発信することができる人っていうことを意識せざるを得ない。そういうことができる方が少しずつ加わってくると、法学研究科教育に当たりながらも、海外の研究者とも、学内の研究会でも、学外の研究会でも接触する機会を持ってきて、少しずつその活動の範囲が広がっている面はある、できつつあるんじゃないかっていうことですね。まだあるとは言えないんですね。法科大学院教育の負担の重さから、なかなか外国語で業績発信するということではできてないんですけども、できる人がだんだん入ってきてるというような状況でしょうかね。」

〔中区分 5: 民事法学関連〕

昇任基準の変化

「これもやっぱり私たちの世代では、教授昇進の条件が本であったっていうのははっきりと大変なハードルではありましたが、ただ、それは随分最近変わってきて、ここ数年でも、教授になる人で本がない人は結構いるし、それからそれが逆に海外ジャーナルに何本か載ってるということ自体が根拠になっていきますので、それはそれでそういうことでだんだんそういう合意が取れてきているように思います。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

韓国とシンガポール

「科学論とかいうのは、いろんなパターンのパブリケーションでそれぞれ評価はするので、何かが不当に低く評価されるってことはないので、そういう意味ではそんな悪くはないと思っています。その上で、ただやっぱり海外の韓国とかのほうは、そういう意味では国際化しようみたいな意志が。あと、シンガポールとかは強いので、そこは正直うらやましく見える。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

海外学位取得者の増加

「海外で学位を取ってきている人とかも増えていると思いますし、日本語学っていうところではあるけどやっぱりその海外で Ph.D. 取って戻ってきているっていう人は結構見るようになってきていますよね。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

海外誌への傾斜

「それは、特に若い方々がもう英語で書いて、海外の雑誌に投稿するっていうようになってきているので、だんだん日本語の雑誌に投稿する人たちが減ってきているとかですね。」

〔中区分 10: 社会心理学関連〕

国際的な業績を出す研究者

「やっぱり結構変わってきていると思いますね。特に分野によって違うんですけども、分析哲学と呼ばれる英米中心の哲学の傾向、こちらでは結構国際的なパブリケーションをばんばんだしてる若手研究者が出てきてますね。やはり英米圏が中心の研究であり、かつ現在進行形の哲学であるというか、過去の大哲学者を研究するっていうスタイルじゃないので。現代の今、現在進行形で次々いろんな人がいろんな論文を出して、それを一緒に追い掛けながら自分もその中で貢献していくっていうような、そういうスタイルですので、そこにほんとに積極的に自分も関わってくっていう若手が結構出てきてますね。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

国際的な業績と留学経験

「まず留学を経験されている先生方は海外の研究者と交流が比較的多くお持ちなので海外で発表するケースが多いと思います。」

〔中区分 1: 宗教学関連〕

世代変化

「ここ面白い人がたくさんいる。でも、その人たちが実際外国の人が来て、丁々発止で英語でやりとりできるかといったらできないので、横に座ってもなんかお地藏さんの横にいるみたいになっちゃうので。ただ、その状況がちょうど私を境として、私の下世代っていうのはここでも海外の Ph.D. っていうのが圧倒的に今増えてますので。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

国内誌と海外誌の区別

「そうですね。共存というか、共存できればいいのかなとも思うんですけど、僕自身がやっぱりやりたい研究とやったほうがいい研究があるので、やりたい研究のほうを国際誌に出すテーマが多くて、やったほうがいい研究をやっぱり国内の学校現場教育に還元したほうがいいので、そういうのは国内誌に出してるっていう、共存というより2つベクトルがあるっていう感じです。」

〔中区分 2: 外国語教育関連〕

キャリアの進展に伴う国内誌に書く難しさ

「ただ、これはちょっと二面的な話なんですけど、他方では、これも分野的な特徴だと思うんですけど、いわゆる査読、その後、国内から査読付き論文っていうのあんまり、常勤になって、例えば学会の評議員、理事とかになるわけですね。そうなるを書かなくなる、あるいは制度上、非常に書きにくくなる。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

日本の学術のレベル

「日本の、割と哲学のクオリティーっていうのは、そんなに悪くなかったと私は思います。海外とのバイパスがないので全然評価はなかったっていうのは大いにあったんですけども、個々の学会の発表とか、もちろんいいのもあればそうでもないのもあったわけですけども、全体としてそんなに、例えばアメリカの学会と比べて非常に低いということはないと思います。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

国内外の研究評価基準

「近代以降だったら、要するにだんだんグローバル化していく。密に欧米と日本がつながっていったり、あるいは今だったらグローバルなことつながっていったりする。時代が下がるに従って、欧文化の可能性っていうのは自然と、必然と広がるわけで。それから遠い分野っていうのは、やっぱ誰かが間に入ってつないであげないと。そういう視野を広く持った研究者が日本や欧米に出てこない、つながらないっていうことだと思いますね。」

〔中区分 3: アジア史およびアフリカ史関連〕

海外発信の必要性(1)

「ないですね、今のところ。なくても済んでるという言い方かもしれません。その必要に、今のところ迫られていない。」

〔中区分 2: 日本文学関連〕

海外発信の必要性(2)

「僕には正直ないんですよ。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

海外発信と次世代

「これはどちらかというと、僕自身の個人的なっていうよりかは、後の世代というか、後進にとって必要だと思うので。あるいは学問の継承とか、あるいは生き残りっていうのであって、この分野自体を、国際的な関係の中でちゃんと必要なものというか、意義あるものというか、そういうものとして挿入させるためには、そうした働きかけとか運営が必要かなという感じでやってますね。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

海外発信の圧力と本音

「もちろんある種のプレッシャーはあって、プレッシャーがあって海外発信するってことはあると思うんですけど、それはやっぱり続かないし、面白くない。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

ガラパゴス化

「ガラパゴス化して突き進むのもいいんじゃないかなと思って。」

〔中区分 1:芸術実践論関連〕

海外誌のみへの投稿と刊行

「今私はもう研究業績は海外誌しか出さないようにしてます。」

〔中区分 9:教育社会学関連〕

主戦場の違い

「これも、私のどの友人を思い浮かべるかですよ、違うんですけど。やっぱり理論系の人たちは、「インターナショナルジャーナルじゃなきゃ駄目だ」みたいな感じが、雰囲気はあります、英語で書かないと駄目だって。一方で日本語学系の人たちは別に、英語がちょっと苦手だっていうこともあるんですけど、やっぱり国内のジャーナルを主戦場としてやるっていう感じですかね。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

査読誌への掲載経路

「学術振興会の研究員のレベルだと、海外の学術雑誌に外国語でもって査読を通るほどの論文はまだ書けないんですね。私の分野は〇〇文字みたいなものを習って、英語・ドイツ語・フランス語の文献をある程度読みこなしてということで、かなり自分で仕事ができるようになるまで時間がかかる分野なんですね。そのために習作としてまず日本語で、日本の学術雑誌もありますし、書いてみるという手はあると思うんです。その中で非常にレベルの高いものが、いいマテリアル、資料に巡り会って面白いものが書けた場合には、これを欧文化して外に出してくってという可能性が開けてくるという感じですね。」

〔中区分 3:アジア史およびアフリカ史関連〕

国内学会の閉鎖性

「脈々と続いているのかなと思うんですけども、非常にドメスティックなところ。もちろん海外の研究者との交流はありますし、それから国際比較みたいなこともやられたりはしているので全く日本で閉じてるわけじゃないんですけど、発表の場に関しては国内誌に閉じちゃうんですよ。それはすごく不思議で。でも高等教育学だけじゃなくて教育関連の領域、基本的には教育社会だろうと心理だろうと、かなり閉じているんですよ。教員もそうですし、その指導を受けた学生もそうであるということで。それで業績評価が行われるので、別に海外に目を向ける必要はないんだと思う。」

〔中区分 9:高等教育学〕

研究者の役割分担

「僕なんかは、今回お話頂いて、僕でいいのかなみたいなのを最初に申し上げた気がするんですけど、基本的にはほんとにドメスティック人材、ローカル人材なので、よく海外の査読誌、かなりインパクトファクターの高い査読誌に載せてる友人とかがいるので、自分はこんなでいいのかなみたいなことを言ったら、「いや、おまえはそれでいいんだ」って。そういうある種の役割分担というか。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

論点 15:「国際的な業績」とは何か——定義の揺れ

論点の整理

国際業績を評価に用いるならば、その定義が確定していなければならない。しかし、研究者の語りを集めると、定義は分野ごとにも個人ごとにも揺れている。例えば、狭い定義では、美学・芸術論の研究者が述べるように「英語で書かれた査読付きジャーナル論文、あるいは英語で書かれた研究書を多く出している出版社から刊行された書籍」となる。経済史の研究者も、国際的発信といえば英語の雑誌論文という理解が一般的だと認める。

しかし、これに対する反論も複数ある。アジア史の研究者は「欧文で発信しなければ国際業績にならないとは思っていない」と明言し、日本語学の同僚が日本語で書いたものが海外で読まれている例を挙げる。商学の研究者からは、英語で出しているから国際的業績と呼ぶのは「ちょっと安易」だという指摘が出る。社会学の研究者からは、地域研究を英語でやっても意味がない場合があるとし、日本文学の研究者は「国際性」の定

義そのものが分からないという意見が述べられる。他方で、日本語教育の研究者からは、日本語学の内容こそ英語で発信すべきだという正反対の主張も示される。

加えて、構造的な要因も語られる。民事法学と社会法学の研究者は、法学が研究対象として日本の法制度を扱う以上、研究がドメスティックになるのは制度に起因すると説明する。経営学の研究者からは、国内と国外の学会の境目が曖昧になり、オーディエンスがどこにいるかで選ぶようになったという別の見方が示される。哲学の学会では和文誌と英文誌の併存という運用が続いている。

ここでの論点は、国際業績という指標が、実際には「英語で書かれたか」という言語の代理指標として運用されており、読者の所在、議論の宛先、対象の性質といった実質的な国際性とは必ずしも一致していないことである。

語り

国際業績の必要性

「国際業績っていうけど、私は欧文で発信しなければ国際業績にならないとは思ってなくて。例えば私の同僚の日本史や日本民俗学の先生方が、英語でいつも発信する理由はないのかなと思っていて。要するにこれは日本の研究者主体でやっているものなので、質の高い日本人のオーディエンスがいっぱいいる分野ですよ。そこでコミュニケーションするためには日本語で書くことの効率っていうのが良くて、私は別にそんなに英語がめちゃくちゃできるわけじゃないんで、いちいち書くために英語の校閲に出したりとか面倒くさいわけですよ。そこに使ってるエネルギーというのはゼロではないわけで、英語のネイティブスピーカーは楽だななんて、うらやましく思ったりします。」

〔中区分 3: アジア史およびアフリカ史関連〕

国際的な業績の定義

「英語で書かれた査読付きのジャーナル論文、あるいは英語で書かれた研究書を多く出してるような出版社が出してる本で、全体またはチャプター、これが国際的な業績として認められるものというふうに思っています。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

国際的な業績の必要性

「国際的な研究業績を評価する傾向が強まっているので、それに合わせて日本語で出すよりは英語で論文書いたほうがよいということがあって、それは必要だと思います。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

国際的業績 (1)

「基本的にやっぱり国際的に発信といえば、英語で雑誌、論文という理解が一般的だと思いますけども、ただ、外国経済史の方の中には、ドイツならドイツ、中国なら中国で、母語を使って研究をしているコミュニティーがあるわけで、そこに入っていって、ドイツ経済史をドイツ語で書くとか、中国経済史を中国語で書くっていう活動をされてる方もいて、そういう活動はそういう活動で、リスペクトされてると思うんです。」

〔中区分 7: 経済史関連〕

国際的業績 (2)

「ただ、その学会というのは、あくまでも国内学会のことですので、例えばヨーロッパの日本史研究者の方に言われたのは、「日本語で書いた論文っていうのは、私たちにとっては存在しないのと一緒にある」と。つまり、「英語で書かれた論文しか私たちは相手にしていないので、日本史だから日本国内でももちろんやるんだけど、そこでどんだけあっても、それは関係ない」ということは、それははっきりと言われたことがあります。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

国際的業績 (3)

「国際的って付いた瞬間に英語が標準の言語になるわけですが、地域研究を英語でやっても多分しょう

がなくて。」

〔中区分 8:社会学関連〕

国際的業績 (4)

「私は、言語学っていか日本語学の内容は、基本的に英語で発信すべきだと思います。それは結局、日本語のことを知ってもらうには、日本語で読んでくれ、は厳しいので、やっぱりそれは英語で発信すべきだと思いますし、私も日本語学の教科書を書いて、それはかなり出ているんですけど、中国語訳もあるんですけど、本当は英語版を出したいと思っています。それはやっぱり、日本語のことをある程度全体像を知ってもらうっていうことに関しては、英語で書くことが必要ですし、実は日本語っていうのは、言語学的にはそれこそ英語に次いで、よく海外で知られている言語かもしれないんです。それは、結構有名な言語学者が何人かいて、その人たちが主にアメリカで、英語で日本語のことを発表してきたってことがあって。」

〔中区分 2:日本語教育関連〕

国際的業績 (5)

「やっぱりいろんな方に読んでもらえるようにしたほうが、私もいいとは思いますが。いろんなところで業績を読んでもらえるっていうのはいいことですし。私も、できれば単著を英語にはしたいなっていうふうに思ってます。」

〔中区分 4:人文地理学関連〕

国際的業績とは何か

「そうですね。だから、日本でも国際業績で、英語で出してるから国際的業績っていうふうに言うのは、ちょっと安直なんじゃないかなって私は思ってます。」

〔中区分 7:商学関連〕

国際性に関する定義

「それも含めて、よく分からないっていう感じですね。じゃ、逆に言うと、英語で書いたらいいのかと。じゃ、書きましたら国際的業績なのかと。あと、いわゆる国際学会っていうのがよく言われますけれども、結構実態を見たら、ただ外国の人が、外国の大学院生がしゃべってるだけとか。要するに外国人を呼んでれば、国際なのかと。それも逆に僕は、「それで国際って言っちゃっていいの？」っていう。要するに、国内学会で外国人がしゃべってるっていうことで国際っていうふうにならざるを得るようなものを見ると、逆に、国際的っていう言葉に非常に違和感というか、便利に使われてないかなっていう気はします。」

〔中区分 2:日本文学関連〕

国内と国際の境界線の曖昧化

「あんまり国内国外の学会の境目がだんだんなくなってきた、そのオーディエンスがどこにいるかによって、国内外問わず発表するようになってると思います。」

〔中区分 7:経営学関連〕

国内誌の多言語化

「はい。もともと、この〇〇学会が、ずっと和文誌と英文誌、両方でやってきたんですけど、特に最近、日本の国内の方で、その英文誌に投稿される方が少なくなってきた部分があって。英文誌の役割みたいなもの考えた時に、あと、先ほどもあった研究倫理の問題で、同じ内容で日本語と英語、投稿すると、二重投稿になったりするという問題も発生してきたので、そういう問題がちゃんとクリアできた状態のもので、英語で発表してほしいと。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

聴衆に応じた出口

「そうです、全くおっしゃるとおりです。だから日本の中の日本向けなものとしては、あくまで日本の文脈の中でのものは確かにあるんですけど、例えばさっきの『源氏物語』ですと、『源氏物語』のその細かな人物うんぬんというよりは、それが女性によってあの時書かれたものがどういう意味だったのかっていうの

は、英語で絶対言うべきです。あの当時女性であんなものを書いたのはほとんどいなかったわけで、そういう点で非常に先駆になるっていうのはこれはしっかり、いわゆる英語で共通の議論になるような形で見せる。プラットフォームになるような形で見せるという必要はありますよね。ただ、一方でその『源氏物語』の写本がいつどのようにして成立して、それがどういうふうにして今の形になったのかっていうことは、あんまり英語にしてもしょうがない。」

〔中区分 3:ヨーロッパ史およびアメリカ史関連〕

制度に起因した研究の国内性

「つまり日本の学会において、例えば法律学会において研究されるべき対象っていうのは、日本の法制度であり、日本の裁判例であり、あるいは日本の裁判実務であるというようなことになってくると。そうすると、外国で専ら実務を行っている、外国で専ら理論研究を行っている人が、日本法の知識のないまま入ってくるというようなことは通常予定されていないわけですね。もちろん、日本の法律学会にも外国人の研究者っていうのは、主としてアジア諸国の方を中心に、少数ながらも加わっているわけですけども、そういった人はもう既に日本で研究歴を持っていて、日本の法制度について明るいから日本の学会に入ってるっていうようなことになります。」

〔中区分 5:民事法学関連〕

ドメスティックな研究分野

「別にそれがおかしいとは思いませんけど、だから法律って分野がかなりドメスティックな分野なので、仮に私はドイツを一応比較対象国にしてるので、ドイツでこうなってるから日本もこうできるっていう議論がそんなに単純に通用するわけでもありませんから、そこはちょっと線っていうか溝っていいですか、国際性が悪いわけでも何でもないけども、じゃあ英語で論文で書けるでしょう、ドイツ語で論文書けるでしょうっていうふうに直結しないっていうところはあるかもしれません。」

〔中区分 5:社会法学関連〕

論点 16：国際化偏重の副作用

論点の整理

国際業績を重視することの副作用として、研究者の語りは複数の経路を挙げている。第一に、テーマ選択のバイアスである。日本の現象は海外ジャーナルでは新規性として認められにくいと、 「どのデータでもできる研究しか出てこなくなる」。会計学からも「何で日本のデータを使うのか」という査読者の反応が語られ、経営学からは、それが「つまらない仕事を大量生産する方向にロックインする」という強い表現で批判される。

第二に、表現の制約である。母語で考えていることを言葉にすくい出す作業を英語で行くと「手足を縛られたような状態」になり、研究活動そのものを阻害する。哲学からは、聴衆に応じて書くべき言語を選ぶべきであり、まず日本語で書くべきものもあるという整理が示される。

第三に、費用対効果の未検証である。国際認証取得に投じた事務・人的・財務的インプットに対するリターンが検証されていない、という批判がある。

第四に、動機の空洞化と諦めである。国際化するモチベーションがない領域では無理に国際化する必要もないという判断が働き、諦めが再生産される。思想史からは、国際学会で日本人が英語で発表し聞いているのは日本人だけという状況が「笑い話」として語られる。

第五に、評価される側の内的葛藤である。西洋中心主義に加担せずに国際的に評価されたいという両義的な感情、指導教員から評価されたいという動機が目標水準を頭打ちにする再生産メカニズム、そして哲学者が指摘する、英語が政治的・文化的・経済的に中立ではないという学術のヘゲモニーの問題が語られる。日本文学の研究者からは、共著概念を持たない分野に国際共著を求めることの制約も指摘される。

他方で、英語で書けば読者数の桁が変わるという実利も率直に語られており、副作用の指摘は国際発信の価値を否定するものではない。経営学の研究者からは、英語力によって研究テーマが決まることは全くない、という反論も示される。

語り

テーマ選択のバイアス可能性

「日本の研究で伝わりやすいものだけ国際業績になるっていうようなことになってしまうと思うんで、非常に研究を始める時の幅、選ぶ際の幅ですかね、テーマの幅がものすごく狭まるとはすごい思いますね。だから、アメリカだと何か新しい現象だったりとか、アメリカの現象で新しいからオッケーって話ですけど、日本で新しい現象、アメリカのジャーナルに投稿したところで、何それっていう感じになっちゃうんで。コンテキストが大事なエリアだと経営学は思ってる、僕は経営学、大事だと思ってるんで、あんまり振り過ぎると、どこのデータでもできる研究しかおそらく出てこなくなっちゃうんじゃないのかなっていうふうには思ってる。」

〔中区分 7:経営学関連〕

過度な国際的業績重視の弊害(1)

「例えば、今、言ったように、取りあえず、多分、国際的な業績であるために、最低限、英語であることが求められるかもしれないけれども、研究内容的には、英語でなかなか表現しがたいことを研究してる分野もたくさんあって。そうすると、母語である日本語で日本人が考えてることを何とか言葉にすくい出すっていう作業をしたい時に、英語では、すごい手足を縛られたような状態になってしまうわけですね。だから、そういうところにまで国際的業績みたいなものを求められてしまうことは、研究活動を逆に阻害することにもなるって思っていますね。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

過度な国際的業績重視の弊害(2)

「あんまり哲学的に意味があることでは多分ないと思うんですが。だから、大学評価なんかでは、国際共著論文の数とか、そういうのが評価の対象になったりするんで、それは、もちろん大学の評価を高める上では大事なものは間違いないですし、それを大学が奨励するのは、事情はよく分かるわけですけども、それが、例えば、学術のクオリティーみたいなものを高めるのかというと、分野によっては、むしろ逆に作用することも当然あって。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

国際認証のための国際誌強調の光と影

「メリットは唯一、研究者に、あんまり国際的なジャーナルに出そうと意識してない、わが道を行く先生方に、お尻をたたく意味では非常にいい効果があると思いますけど、でもそんなのは海外の先生だったら当たり前のことで。反対にそれを除いてしまうと、ほとんどデメリットのほうが大きいと思いますね。つまり、どれだけ事務作業にかかって、国際認証取ったことに対してのそんだけインプットを。人のマンパワーもそうだし、財務もそうですね。入れたにもかかわらず、じゃあ何がリターンなのかっていうところを検証してないと思うんですよね。検証したとしてもたぶん、それがなんに関わってくるかっていうと、あのマーク付けただけで学生数が10倍になりましたとか、外国人留学生が3倍増えましたって、あり得ないと思うんですよね。」

〔中区分 7:金融およびファイナンス関連〕

英語論文に関する必要性

「難しいところなのですが。難しいですよ。ちょっと難しいなと思うところが、それこそ先生も恐らく英語論文を重視されていると思うのですが、英語論文に対して親密度の高い領域とそうではない領域とがあるように私自身は感じておりまして、そういう部分はちょっと難しいかなと思っています。」

〔中区分 8:家政学および生活科学関連〕

英語ではなく共同研究

「個人的にも英語だけが上とか、英語だけが評価されるっていうのはどうかなって正直思っていて。他の言語でもいいし、しかも特に共同研究とかが大事じゃないかなとは思ってます。」

〔中区分 8:社会学関連〕

西洋中心主義史観

「ただヨーロッパでやったら、ヨーロッパのほうでは面白いって言われる。僕はどっちかっていうと、やっぱり自分がイギリスにいたのもあるんですけど、ただほんとにこれは気を付けなきゃいけないくて、西洋中心主義史観を持たないようにしなきゃいけないんですけども、その中でもあえて、白人たちがぎくっとなるような、ちゃんと西洋中心じゃない世界もあるってことを見せれるようなものを入れつつ評価されたいなっていうのもあるので、ちょっとアンビバレントな気持ちはあるんですけども、そこでやっぱり展覧会を、「面白いことやってるんだね」っていうのと言って、「ああ、これ知ってるよ」っていうのを聞いたりとか、コンタクトが来たりとか、僕に。それでも外に出る評価じゃないですもんね。すいません。自分の中での……」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

英語で書くことで広がる聴衆規模

「ただそれだけで評価する人はほぼ多分、私も含めていないので、基本やっぱり中身ですけども。ただやっぱり引用されないものは寂しいっていうのは、自分の中ではあります。で、英語で書いたほうがやっぱり読まれます、明らかに。引用もされるし、読まれる。桁が変わるというのはあります。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

どこかの時点での諦め

「(国際的な活動について) 初めはたぶんきつと関心があっても、もう諦めちゃってる先生が結構いっぱいいたりとかして。「いいや」みたいな、「どうせ別に生きてけるから」っていうのでやらない先生がほとんど。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

目標が低下する再生産メカニズム

「今までお世話になったやはり指導を受けた教員の、指導教員のみならずあらゆる先輩方からの教えというんですかね、それがやはり根底にはあって、それを守りたいっていう気持ちと、その先生方から評価されたいっていう気持ちですかね。もちろん国際的に評価される上でも、その教員たちのやっていたことが恐らく重要なんだろうっていうふうに分のどこかで信じてしまっている。ただ、それを超える何か自分の目標ができてるってわけじゃないので、そこで頭打ちになっている感じはあるんですけども。ただ、そういう先生方に褒められたいっていう気持ちなのかもしれないですね。」

〔中区分 5: 国際法学関連〕

研究テーマ選択への影響

「それが、私たちがつまらない仕事をどんどん大量生産する方向にロックインする状況にあり、それがますます、国内の学会とか査読誌ってものと国際学会ってものを接続しようとするほど、実はそういうプレッシャーが働き。ただ、サブスタンシャルにはアウト・オブ・ザ・ボックスっていうか、アウトライヤーのような、ちょっと反逆するような仕事、アイデア、それ日本で観察しないとそんなことなかったんだとか、日本とアジアの衝突の中でそういうことがあるのかとか、中国とアメリカの競り合いの中で、日本だとそういうことが起きて、そういうことはこういうインサイトがあるのかとか、時間かけないと掘り下げられないようなテーマってごろごろしてるじゃないですか。でも、それ取り組む、タックルするのってめちゃくちゃ時間かかりますよね。そういう仕事っていうのはどうしても後回しになりがちっていうことが多分、直面している構造的な課題なのかなと改めて思います。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

ローカルとグローバル

「結局、日本経済とか日本の研究者が、完全にアメリカに同化しちゃったら、日本自体に価値がなくなってしまうので、常に新しいローカルな血が生み出されているということが、日本で社会科学をやってる人間の生存の条件になると思うんです。そういう意味では、そこを大事にしたいと思いつつ、そこで培われた思考の結果の一部を、ほんの一部だけでも、英語で動いてるアカデミアに発信していくっていうことも、また日本の社会科学はあるよと訴える上で重要だと思ってます。なんですが、英語で書いたものは、日本の仲間には読んでもらえないっていう。」

〔中区分 7:経済史関連〕

英語化の影響

「それはだから企業活動と一緒にだと思います。他の会社が知らない何かを見つけてこそその存在意義だとすると、特にやっぱり以前、友人でドイツ法制史の研究をドイツ語でやってる人がいるんですけど、ドイツのアカデミアも本当に英語シフトがすごくて、ドイツ法制史をドイツ語でできる人っていうのが、ドイツの大学にはすごく少ないというか絶滅しかかっているらしい。」

〔中区分 7:経済史関連〕

研究文脈の一般性

「矛盾とか乖離(かいり)とかっていうことはないんですけど、今おっしゃったように何で日本のデータを使うの、何で日本のコンテキストでやるのというのをやっぱり説明しなくちゃいけないという日本人特有の課題なんだろうと思うんですね。アメリカ人はそれはあんまり言わなくても、あるいはヨーロッパもそうかもしれないけれども、あんまり考えなくても彼らは研究ができてるという意味で言うと、一つ敷居が高いなっているところだとは思いますがね」

〔中区分 7:会計学関連〕

日本の文脈を生かす

「いや、どちらかというと研究者として、だからまさに海外でパブリッシュして、しかも日本で面白いことやってるなと思わせるのは、日本の文脈をうまく生かさなくちゃいけないので、なんかそういう意味ではトレードオフというよりも、それをどう使うかが問題だなと思ってます。」

〔中区分 7:経営学関連〕

国際化の意味：英語

「経営史も企業家史も、どっちかっていうとテーマは日本のことが多いので、日本に関する研究は研究でやっぱり大事だとは思いますが、本来ならば外国の研究者が日本語で書くとか、もしくは外国の研究者が英語で書いたものが載るとか、そういう場に本来はなるべきで、日本の研究者が日本のことをやるだけの経営史学のジャーナルでは、本来はよくないとは思ってますけどね。」

〔中区分 7:経営学関連〕

海外発表の皮肉な状況

「ほんと笑い話ですけど、国際学会に行って日本人が英語で発表して、聞いているのは日本人だけみたいなことも起こるくらいなんですよね。だから、国際学会なんですけど、ある意味世界的に国際学会で発表したという実績が必要なのでみんなが来るという、そういうところがあって。ちょっとよくない傾向かなとは思いますが、それでも大勢の研究者が一堂に会するので、研究発表会場以外の場で交流が起きるので、そういう意味で重要な場ではあります。」

〔中区分 1:思想史関連〕

日本の研究者が英語の文献を読まない理由

「やはり日本人同士の読み書き、コミュニケーションの媒体としては、日本語で書かれたもののほうが当然効率がいいので、わざわざ英語で書かれたものを読むというふうになってくれないのも、しょうがないのかなと。理想的には日本語でも英語でも両方、精力的に書ければそれが一番いいのかなと思ってますが、私の知ってる先生だと〇〇先生は、美しい英語と美しい日本語の両方を書ける先生で、〇〇先生のような方が理想的な経済史家だと思うんですけど。ちょっと私はそこまで及んでない。」

〔中区分 7:経済史関連〕

聴衆に応じて書くべき言語を選択

「それに関しては、私は英語で発表しないほうがいいものもあるという。まずは日本語で書くべきものもあるし、まずは英語で書いたほうがよいものもあるし、それは内容とかオーディエンスとか、そういうものに応じて使い分けが必要だなと思っています。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

国際共著という「制約」

「一番はその共著的な概念がわれわれにはないっていうこととか、だから、英語でアウトプットしてるかどうか、必ず国際共著とか国際著書とか問われますけど、だって日本やって日本が中心だから、最先端のものは別に日本語で書かれてますので、国際的なもん、それは何年か前の評価のもっと上の委員会でも言ったんですけど、理解してもらえないんですけどね。理解してもらえるように説明できないこちらの力量不足はもちろん知ってるんですけど、だけど日本研究やってるところは、やっぱりちょっとそういうふうに理解していただきたいなって、文学だけじゃなくて思います。」

〔中区分 2:日本文学関連〕

日本国内の問題点

「やっぱりその学問の進化というのに貢献しない学問は、学問じゃない。私も大学じゃ西洋史に属してますけど、少なくとも少し前の西洋史っていうのは紹介学問といいますか、国のために西洋の歴史と文化を研究して日本人で共有する、そういう学問だった傾向があつて。…他の西洋史の先生たちで自分の業績がほとんど日本語しかないって人は結構いますよね。あとはギリシャ、ローマなんかでもほとんど日本語しか業績ない方はいます。これは日本の学会がそれを許しているわけですけども、これは僕は問題だと思ってる。」

〔中区分 3:アジア史およびアフリカ史関連〕

学術のヘゲモニー

「そうすると、今英語が国際語なんですけれども、英語は政治、文化的に、経済的に中立でも何でもなくて、やっぱりアメリカが一番ヘゲモニーを握り、イギリスもヘゲモニーを握るという、そういったある意味じゃハイアラーキーというものがいろんなとこの側面でやっぱり入ってきてしまって、非常にマイルドな仕方での英語による植民地化ということが実際。先ほどドイツ、フランスが陥落したって言い方をしましたけれども、それは逆に植民地化されているというふうなことも言えると思いますし、それはこの日本の哲学、っていうってもやっぱり 150 年の哲学、そういった状況がずっと続いてきた。だから、そういった社会的な、経済的な力関係、ヘゲモニーっていうのは、結局ほんとの思想の現場にまで入ってきてしまっているのは最初っからなので、それはどちらかというと非常にネガティブな現象だと思うんです。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

英語力で研究テーマは決まらない

「いや、それは全くないです。英語力で研究テーマとか領域が決まるということは全くなくて、研究領域ありき、テーマありきで、それに対応するための英語を何とかしないといけないという感覚です。」

〔中区分 7:経営学関連〕

日本語の国際性

「要約は英語で書くことはある。英語で講演をしたことは一度もなく、日本語で講演をする。どの国でも日本語研究者や大学院生なので日本語を理解している。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

論点 17：国際化を支える実務的条件

論点の整理

国際化を評価基準として掲げることと、それを可能にする条件が整っていることは別である。語りは条件面の制約を具体的に挙げている。その一つが研究者の語学運用能力である。例えば、研究者自身の語学力については、実験心理学、経営学、会計学、公共経済からそれぞれ異なる見立てが示される。致命的な影響があるとする立場と、クリティカルな問題ではないとする立場が共存している。日本史からは、史料が国外にある分野とそうでない分野で語学力の意味が異なるという整理が示される。宗教学からは、投稿規定や引用作法といった基礎トレーニングの欠如が指摘される。

技術的条件は近年急速に変化している。経営学の研究者は、AI の進化によって英語で発信する障壁が下

がったと述べ、子ども学・保育学の研究者からは「英語なんていうのは簡単で、逆に」むしろ日本語でしっかり発表することが重要だという主張もなされている。他方で、宗教学の研究者からは機械翻訳の限界も指摘される。

人的・経済的条件としては、校閲費補助の制度、留学経験の有無、海外での学位取得者の存在が挙げられる。哲学の研究者は、実際に会って話し食事を共にすることで得られる情報が大きいとして交流の重要性を強調し、とりわけ大学院生やポスドクの海外交流機会の拡充を求めている。国際法学からの研究者は、成功体験に触れなければ学生は外に出ないと指摘している。考古学と刑事法学の研究者からは、隣接領域との協働が国際化の経路になる、という実践的な示唆も示される。

ここでの論点は、国際業績を評価基準に据えるならば、それは同時に語学教育・留学機会・校閲支援・交流予算といった条件整備の問題であり、条件を整えずに基準だけを課せば、既に条件を持つ者とそうでない者の差を測る指標になってしまう可能性がある、という問題である。

語り

英語運用能力

「重要だとは思っています。もちろん自分がすごくできるというつもりはないんですけど、ある程度、国際的な研究者コミュニティで発言していける力は要と思っています。」

〔中区分 10: 実験心理学関連〕

英語で書く力

「結構、致命的な影響だと僕は捉えています。直近、ちょっと今、国内の研究者と一緒にやってて、海外で発表してるものがあるんですけど、サブミットした時にやっぱり英語力の問題で通じないんです。しかも英語力も、根幹を言ってしまうと、アカデミックライティングができないっていうのは、やっぱりロジックがちょっと弱いんです。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

英語運用能力が問題か

「少なからずあるとは思っています。あるとは思いますが、それが一番クリティカルな問題かと言われたら、そうではないと考えてはいます。」

〔中区分 7: 会計学関連〕

英語運用能力がもたらす影響

「僕は、イギリスでも 10 年働いてたんで、そんなに英語で困るってことはないんですけど、でも、ネイティブではないので、ネイティブの人たちと比べると、ライティングスタイルとかは、修正が必要なものが多いです。議論とかで、なんかできないってことはないのですが、そんなには困ってはいないんですけど。」

〔中区分 7: 公共経済および労働経済関連〕

英語運用能力の制約

「史料がそういう、例えばアメリカとの外交史をやっていて、史料の大半がアメリカの公文書館にあるとかであれば、語学能力っていうのが研究の中身に直結してくると思いますけれども、私の場合は、あんまりそういうことを実感することはないですね。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

英語運用能力がもたらす影響

「及ぼしています。私はずっと英語圏で育ったので、リスニングとかスピーキングはそんなに問題がないです。リスニングで言えば、多分日本語と同じぐらいです。」

〔中区分 9: 教育社会学関連〕

英語運用能力の進歩

「昔は自信ありましたが、今もうほとんど使い物になんないです。日本語で考えて片言英語になったやつ。その一方で若い人、今 30 代 40 代の人はずいぶんと思って。プレゼン見ても対応見ても。そういう意味で

「はこの3世代の間にもものすごく日本人の外国力は向上したなと思いました。」

〔中区分4:文化人類学および民俗学関連〕

基礎トレーニングの欠如

「今、投稿規定とか多少はありますけど、ほんとに引用の仕方から何から、人が書いてるのを見て学べっていう世界だったので。論文の書き方自体、ちゃんとメソドロジーとして確立しているわけではないので。日本語で論文書くと、日本語の論文の再精査みたいな感じになると思うんですけど。あれをいきなり、同じ文章を、例えば40枚書いたとして、それを英語に頭から訳していても、たぶんアカデミックなジャーナルには載せられないので。それは英語で論文書くためのトレーニングっていうのを、恐らく別にやる必要があると思います。」

〔中区分1:宗教学関連〕

デジタル技術と英語

「DeepL 信用できないというか、結構分かんない所を訳し飛ばしたりするので、これは駄目だなというふう思うので。何ていうか、英語に関する仕事に関しては、必ず自分でチェックはしますけれども、少なくともスピードはすごく速くなったと思います。」

〔中区分1:宗教学関連〕

英語で発信する障壁の低下（技術進歩）

「ここ数年で非常にAIの進化もあって、レスポンスにおいてそこまで大きな影響を及ぼすこともなくなってきているかなという感じは持っています。そこまで私もフルーセントじゃないんですけども。読んで理解はすることはできますし、適切に答えられているかどうかは、AIのサポートも受けながら、場合によっては英文校正業者を高いお金を出して雇って、そここのやりとりで英語として適切かどうかというのを十分にチェックして対応していく、それでも駄目だったりするわけですけども。なので、最近はその外部のもの、AIを含めて、そこまで大きな問題にはなっていないかなというふうには思います。」

〔中区分7:経営学関連〕

多面的な英語観

「英語なんていうのは簡単で、逆に。AIトランスレーションの進歩はありますが、むしろ日本語でしっかり発表して、そのうちの海外に向けてアピールするようなものだけ、少しそこから磨いていって英語で出せばいいぐらいに。英語ファーストっていう考えではないですね、私は。ただ学生は別です。学生のソリッドなやつはやっぱりイングリッシュファーストっていうのはあります。」

〔中区分9:子ども学および保育学関連〕

翻訳の必要性

「基本的に僕の研究は日本語です。日本語で、これは英語にしてみんなに読んでもらったらいいなっていうのを書き直して英語で出してます。だから別に英語を出すことを目標にはしてないです。」

〔中区分4:文化人類学および民俗学関連〕

国際誌への投稿の障壁

「ブラッシュアップの校閲費ですかね、を補助するような制度はあります。」

〔中区分4:文化人類学および民俗学関連〕

語学力が鍵

「読める人でも、読めるけど話せない人が山ほどいて、法学の先生ってあんま留学行かないんですよね。いろいろ言い訳をして、…あれ要するに話せないんだなっていうね。」

〔中区分5:新領域法学関連〕

海外博士号取得者の効果

「あととはなるべく成功体験に学生が触れないとやっぱり学生も怖がって出ていけないので、そういうキャリアっていうか、そういう海外で私みたいに博士号を取った人を積極的に雇用する、そういう大学が増えていくといいんじゃないかなと思います。」

海外コミュニティに入る意味

「日本にいて、やっぱり学会に行く頻度っていうのは、どうしてもやっぱ落ちる、例えばアメリカが一番中心なので、アメリカ国内で小さな学会であるとか、小さなセミナーとかで相互に呼び合うっていうようなプロセスに入っていないっていうことによって、事前にどんな人が査読に付いて、事前に査読になり得る人に対してアピールする機会っていうのはちょっと乏しいので、そうすると、結局査読者が何を求めているのかっていうことに対して、何をしたら納得してくれるのかっていうことに対してあまり情報がないことが多いので、そのコミュニケーションがうまくいかずに、うまくいかないっていうことが一番難しいかなと思ってます。」

〔中区分 7:経済統計関連〕

国際交流(1)

「だけど実際にはそこで欠落してる情報がものすごくあって。やっぱり実際に会ってみて、話してみ、食事を共にするみたいな、そういう経験から得られることもすごく多いと思うので、そういうこともあるんだよっていうこと、自分の学生には言えますけど、他の大学の大学院生一般に関してはどうなんだろうね。そういう関心が薄まってるんじゃないのかなっていう印象ですね。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

国際交流(2)

「とりわけ若い方々、大学院生であるとか、大学院を出たポストドクレベルの方々、こういう人たちにもっと海外交流の経験を積ませる機会を与える。それがすごく重要なんじゃないかなと思ひまして。もうすでに確立した研究者を今から引っ張り出すっていうのはなかなか難しいかもしれないので、やっぱり若い頃にそういう経験をちょっとでも積んでるかどうかっていうのは大きく違ってくるかなというふうに思ひます。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

国際的な流動性

「あとは、できたらちょっと海外で 1 学期教えて帰ってくるよ、その分どこからビジティングで来る人がこっちでもちょっと教えるよとか、そういうのがビザとかいろんなそういうものが、融通が利くようになれば、もっといい意味での流動性が高まって、日本がどうか国外がどうか言わずとも、いろいろ混ぜられて薄まってくるような気はするのですが、なかなかそういう援助とか使いやすい枠組みというのは、やはりトップダウンで来ないと変わらないところは多いので、ちょっとないかなと。どちらかというと、訳分かんないことやって、小説だの読んで何かぜいたくなことやって、「要らないよね」みたいなのが風潮かなとは思ひますけれど。」

〔中区分 2:英文学および英語圏文学関連〕

隣接領域との協働を通じた国際化

「私の〇〇(所属組織)の特色でもあるんですけど、私の身の回りでは、理系の分析化学の方と付き合う機会がありますので、そういった方たちとの議論の中で、やはりそういう海外誌の意義っていうのが強く話されているので、そういった別分野の学際的研究であったりとか、コラボレーションが進むことでそこにくみしている、関与してる考古学者の方っていうのは、意識が多少は変わっていくのかなとは思ひます。」

〔中区分 3:考古学関連〕

研究活動の国際化の方向性と国内でのインセンティブ

「... まず国際業績を増やすって観点からしたら、隣接分野とのコラボレーションをするっていうのは、おっしゃるとおり一番いいと思ひます。そのコラボレーション相手は、分野の関係で海外展開していくっていうのが現実的だと思ひます。ただ、多分ミッションのプライオリティーとしては、国内の法曹実務家にどういふ影響を与えるかっていう観点が強いところ、学際的な研究って、実務家が結構まだ今のところは取り入れない傾向があつて、これから取り入れてくれたらいいなっていう状態だと思うんですね。そうすると、まず国内向けの雑誌できちんと実務家に伝わるものを書くっていうインセンティブのほうが強いのも事実か

「なという気がします。」

〔中区分 5:刑事法学関連〕

第 III 部：測定をめぐる対立——測れるのか、測るべきか

論点 18：測定への懷疑

論点の整理

測定に対する懷疑は、感情的な抵抗としてではなく、いくつかの明確な論証として提示されている。第一に、数値の一人歩きである。何かを数値化すると、そこから抜け落ちるものが必ず生じ、数字だけが独立して機能しはじめる。言語学の研究者からは「測定してはいけない気がします」という端的な否定と、数値化することで何か失われるという指摘が示される。

第二に、価値の予測不可能性である。有用性が明確でない研究が将来思いもよらない知見の基盤となったり、社会課題の解決につながる可能性がありうる以上、「役に立つかどうか」を測ること自体が適切でない。役に立つかどうかを問い始めると、評価軸がそれだけになってしまうという副作用も指摘される。

第三に、対象の多様性である。文化人類学のように研究対象が人間の活動全般に及び、方法も発表媒体も多様化する領域では、個人の研究を一律に評価することが原理的に難しい。子ども学・保育学の研究者からは、すべてがユニークであるならばそれは測定できないという原理的な主張が示される。

第四に、目標と評価の不一致である。目先の利益を追求せずに研究する者が評価されにくいという構造的な問題がある。

第五に、指標化そのものの副作用である。科学社会学者は「まず測りすぎて、ろくなことにはならない」と述べ、食料農業経済学者も定量化の副作用への注意を促す。

そして第六に、政策的文脈への懸念がある。「稼げる大学」「集中と選択」といった方向で社会的有用性による選別が進めば、有用性に直結しない基礎分野が軽視され、結果として上部構造を支えるメカニズムが失われるのではないかと、という危惧である。

語り

数値の一人歩き

「だから、何かの市場で測定しようとしたら、そこに抜け落ちるものが必ず出てくるといいですか。逆に、何かの形で数値化すると、その数字が独り歩きするみたいなことが起こりそうなので、むやみに測定しようしないほうがいいと私は思います。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

研究成果の測定可能性

「不可能とまでは言わないですけども、かなり難しいんじゃないんですか。」

〔中区分 1: 中国哲学、印度哲学および仏教学関連〕

研究価値の予測不能性

「測定はやはり難しいかなと思いますし、直接社会に貢献しないような研究が、何か重大な犯罪を止めたり、社会的な災いを防止したりっていうこともあり得るので、役に立たないことも大事だと思うので、あんまり役に立つかどうかを測るべきではないかな。あと、あまりそれを言い出すと役に立つかどうかだけになってしまうので、あんまり測るっていうのは、私も賛成しないですね。」

〔中区分 5: 国際法学関連〕

一律評価の難しさ

「そうです。まず研究対象自体が人間の活動ですから。それがしかもかつてから今までで、過去から今までですから、もう何でもありの世界です、はっきり言うと。そこにテーマを決めて方法論を決めてアプローチしますから、当然やり方も、それから発表の媒体も多様化しちゃいますよね。研究内容は当然のことながら。だから単純に一律で個人の研究を評価することは難しいと思います。」

〔中区分 4: 文化人類学および民俗学関連〕

研究目標と評価の不一致

「やはり特に人文系の研究者で、目先の利益を追求せずに研究されてる方がとても多いと思うんですけ

れども、そこに対しての評価というのがされにくいという。」

〔中区分 1: 芸術実践論関連〕

研究の質評価の難しさ

「だから、中身をどういうふうに評価すればいいのかというのがなかなか。シンポジウム開くのも、本を出すでも構わないし、それから市民とのそういうディスカッション場とかいろいろつくったりだとか、オンラインだったらいろんな形のができてきますから、それ自身は評価の項目として入れてもいいと思うんですけど、クオリティーとしてどういうふうに評価すればいいのかということが、ちょっと今すぐには出てこないのと、人文系とそれから医学系とか工学系と同じ基準でしてもいいのかなっていうのが、ちょっと今のところには思い浮かばないところですよ。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

評価の難しさと指標化

「測定を要らないよというふうに言うと、また学生たちの行き場を少なくしちゃうんですけども。そうですね、測定っていうのをどういうふうに測定すればいいのかというのがすごく難しい領域だと思うんです。理科系のことにしてみても、どれだけの形の特許が出ましたとか、どういう形での商品開発が出ましたとか、そういう形の指標化はすぐできるだろうと思うんです。そうじゃない広がりがあるのが研究なわけですよ。だから、それは学術的には論文にするとかそういうところで一応測定はできるんでしょうけど、社会的なものっていうのはそこで測れない。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

社会的有用性による研究評価への懸念

「個人的に直接どうこうっていう事象にはあまり出会ってないとは思いますが、ただ、やっぱり昨今の政治的なものであるとか、稼げる大学になってほしいとか、そういうことだとか、研究分野の集中と選択みたいな話とかはどうなるかなってやっぱり思うところがあります。結局、あれはお金になるかとか社会に役立つとか、そういうところで評価されて、例えば「じゃあ、ここにたくさんお金付けましよう」とか、「ここは、まあ」みたいな感じで取捨選択されるようなものだとは私は理解していて。そうすると、直接的に社会的有用性みたいなのにひも付きにくい基礎分野の研究っていうのは、遅かれ早かれ軽視されていってしまうんじゃないかっていう、そうすると結局、上に立ってるものを支えてるもののメカニズムがどんどん分からなくなって、上に立つものも結局崩れるんじゃないかっていう、個人的な感情、あります。」

〔中区分 10: 実験心理学関連〕

測定の不適切性

「はい。測定してはいけない気がします。」

〔中区分 2: 言語学関連〕

数値化の限界

「やっぱり測定するっていうことは数値化するっていうことなんで、数値化するっていうことはそれによって何かがそぎ落とされますよね。そのそぎ落としていい場合と駄目な場合があるんじゃないでしょうか。これは社会的貢献はそぎ落とさないほうがいいんじゃないですかね、細部を。」

〔中区分 2: 言語学関連〕

測定がもたらす副作用

「まず測りすぎて、ろくなことにはならないので、指標化は基本的にはあんまりいい方向にいかないだろうっていうのが 1 点目。一方、何もしないっていうのは、これまた論外なので、基本的には、いかにしてより良い定性的な評価を、ただし負荷なくやるかっていうところを考えたほうがましっていう意見ですね。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

定量化の副作用に注意

「何かしらの形で定量化はできるかもしれないと思うんですが、定量化したいこと、またインパクトファクターみたいに、ちょっとある意味で活動を縛るみたいな側面が出てくるのかもと思いますし、定量化は必要

「なそこはあるかなとは思います。」

〔中区分 41:食料農業経済〕

評価不可能性

「要するに、全てがユニークであって、ユニークなものはメジャーできない。オンリーワン、オンリーワン、オンリーワン、オンリーワンですから。比べられないし、測定もできないというふうになりますけれども。」

〔中区分 9:子ども学および保育学関連〕

論点 19：可視化・計量化の擁護

論点の整理

測定懐疑論に対する反論も、同じ資料の中に明確に存在する。哲学分野の研究者は「貢献がある以上、必ず可視化は可能」とし、言語化しがたい部分はピアレビューで拾えばよいとする。社会学分野の研究者からは、計量的な方法でも評価できる研究者を着実に育てることは絶対に必要であり、それを批判・否定するだけになるのが一番まずい、という指摘がなされる。同じく社会学の研究者から、研究者のレベルや水準は何らかの指標で測定可能だという見解も示される。認知科学の研究者からは、税金を原資とする以上「役に立たない」と自称すべきではなく、文学研究の意義もきちんと主張すべきであり、努力すれば測定可能かもしれない、という主張が出る。

会計学と経営学の研究者からは引用回数の有用性に対する擁護がある。モデルが固有名詞化するほど使われる研究や、よく引用されるレビュー論文は、アカデミアの内部で意義が高いと判断された結果として引用されているのだから、引用回数は指標として有用だという論理である。会計学の研究者からは、測定されるべきかと言われれば、その試みは捨てるべきではないという中間的な擁護も示される。教育社会学者の率直な語りは、この立場をさらに押し進める。インパクトファクターしか見てくれないという不満は言い訳の面もあり、一定のルールに沿った上でその中でさらに面白くしていくのが研究者ではないか、という意見もある。もっとも、擁護派の内部にも留保はある。それは、研究者コミュニティ内部での評価と、一般社会にとっての価値が一致するとは限らない、という指摘である。

語り

可視化は可能

「僕はあんまり賛成できないですね。貢献がある以上、必ず可視化は可能だと思っていて。それはいわゆる言い難いねっていうことはあると思うんですが、いわゆる言い難い部分はピアレビューで拾っていけばいいので、相互評価で何らかの形で拾えると思います、おそらく。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

計量的な評価の重要性

「大事なことは、一つはそういう今議論されてる今のおっしゃられたようなそういう計量的な方法でも評価できる研究者を着実につくっていくっていうことは絶対大事で、それを批判したり否定的だけになってしまうのは一番まずいんだと思うんです。だけど、そういう形で評価される研究者っていうのは、どこの国でも研究者全体の中でいうと一定程度限られた数だと思いますし。」

〔中区分 8:社会学関連〕

研究者もきちんと主張すべき

「測定可能なものもあれば、測定できないこともあるとは思いますが、測定方法次第かなと思います。一見役に立たないとか本人も言っているようなことあるんですけど、あんなことを言うべきではなくて。役に立つかどうかは研究の価値じゃないみたいなことを言う人いるんですが、いや、そこはやっぱり税金を原資としてやってんなら、夢を見せるだけでもいいので、ちゃんと役に立つと言ってくださいよとは思っていて。文学の研究が役に立たないはずがなくて、人類がどのように物事を考えてきて、どのように現代の社会なり文化なりを理解するのかということが端的に表れているわけですから、単なるエンターテインメントだとし

でも、それによって幸せになる人はいるだろうし、それによって現代の工学的にちょっと解決が難しい、あるいは複雑な問題に関して、1つの解決になるかどうか分かんないけど、理解の方針みたいなのを示していただけるようなこともあるので、そういうことはちゃんと主張すべきだし、頑張ればそういうことも測定可能かもしれないなと思います。その頑張りをどうやってつくるかということはあるかもしれないですけど。」

〔中区分 10: 認知科学関連〕

引用回数での評価の意義

「例えば、1つ有用なモデルを開発して、その後の研究者がみんなそのモデル使ってるってなると、もう固有名詞がモデルになってるケースがあると思うので、これはもうほんとにプロボクしてるんだと思うんですよね。一方で、モデルとかは作ってないけども、例えばレビュー論文なんか特にそうですけど、非常に引用されてたりとかするっていう。ただ、これは少なくともアカデミアの世界では極めて意義が高いと思ってみんな引用してると思うので、なので、引用回数とかっていうのはいいんじゃないかなと思います。」

〔中区分 7: 会計学関連〕

研究者の本音（一つの見方）

「研究業績がこのインパクトファクターしか見てくれないとブーブー言いますが、それも言い訳な気がして。やっぱ一定のルールには沿ったほうがいいと思うので、それはやっぱ。じゃあ、研究者何で評価するかっていったら、研究論文でしょってすごく思ってる。ただ、そこの中でやればいいんでしょじゃなくて、そこの中でもさらに面白くしてくぐらいのものなんだろうなと思ってる。私はあんまり、日本の研究者ってほんとに英語論文うんぬんとか何か言いますが、結局研究が好きじゃないんでしょって。」

〔中区分 9: 教育社会学関連〕

社会の構成要素と境界

「おそらく研究者の間では、その引用文献数があつた研究ってすごく先ほどの質って話じゃないですけど、質が高い研究だったには違いないと思うんですけども、それがじゃあどういうふうに社会に還元されていくのかって。社会っていうのが、どの程度の研究者を取り巻くコミュニティーなのか、あるいはこの一般社会なのかっていうところで、一般社会のファクターを探るっていうのと、研究者間での評価っていうのは一致するかどうかはちょっと。」

〔中区分 1: 芸術実践論関連〕

社会的有用性の測定可能性

「研究者は測定は可能かと思います。何かしらの指標で、この研究者のレベルだったり水準だったりみたいなところはある程度数値化して測定は可能だと思うんですけど、研究自体は特に意義だったり有用性は測定は逆にしないほうが、つまり単純に量的な幾つかの中の指標を作って、測定はしないほうがいいかなとは思っている。なぜかという、社会的意義も有用性も必ずしもこの、例えば論文が出た後にすぐ起こるわけじゃないですよ。」

〔中区分 8: 社会学関連〕

研究インパクトは引用で

「やっぱりサイテーションでしょうね。正直言って。どれだけの人にそれをフォローしてもらおう。今ほんとにみんな正直にはなってきたんで、昔みたいに日本の研究者が書いたからっていうよりも、その領域だったらこれ落とせないっていうふうに、自分の文献の一部もそうやって挙げられてるの見たらびっくりしましたけど。そういうのは非常に中立的にはなってきたんで。サイテーションとかどういうふうに扱われるか。議論の中心にどれだけ扱ってもらえるのかみたいなのかなっていう感じはしてますけどね。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

社会的意義の測定可能性について

「ただ、やっぱり測定されるべきかと言われると、その試みはやっぱり捨てるべきではないんだと思うんですよね。何らかの形で測定しようとしなければ優劣もつかないっていうわけですから、何か試みるというか、取り組むこと自体が重要なんだろうなというふうな思うんです。」

論点 20：測定インフラの欠落という前提問題

論点の整理

測定の是非を論じる前に、そもそも測定するための基盤が存在していない、という指摘は本資料の中で最も具体性の高い論点である。第一に、書籍への引用が捕捉されていない。人文系の書籍に引用されたものは引用数として現れないため、「人文系は引用数が少ない」という観察の一部は、実際には捕捉率の問題である。これに対して、出版社が国立国会図書館に納本する際に文献表の電子データも提出すれば把握可能になる、という具体的な制度提案が示されている。

第二に、横断的な引用データベースの不在である。法学では電子化されたジャーナルを統合したデータベースが存在せず、閉じたサービスはあっても横串でデータを提供する仕組みがない。その結果、研究者の評価は「あの人はいい研究してますよね」という程度の相互認識にとどまる。刑事法学の研究者からも、アメリカの判例と異なり日本では実務への影響を明示的に追跡できないという、別種のエビデンス不足が語られる。

第三に、評価の場そのものの不在である。人文地理学者は、測定可能にするには書評のような場をつくるしかないと述べる。捕捉の仕組みがなければ、評価は根拠や検証可能性の低い評判に置き換わる。社会学の研究者からも、日本の評価は一般的な社会的評判に依存する部分が大きく、海外に比べて地道で堅実な研究が相対的に評価されにくいという観察が示され、言語学からは所属や師弟関係で判断されているのではないかという疑いが語られる。

第四に、入力側の統合である。researchmap への一本化は入力負担をむしろ軽減し、賞与査定にも使われるようになっている。ただし記述形式の統一は researchmap 内でも達成されていない。

第五に、共著の寄与分割である。執筆分担が明示されていれば評価できるが、不明確な場合は点数の付けようがない。

これらを踏まえると、測定懷疑論の一部は「測定は不適切だ」ではなく「現在の測定は不正確だ」という主張として読み直すことができ、両者は異なる対処を要求する。

語り

人文系の社会貢献の可視化は難しい

「人文社会系、特に人文系ですかね、人文系の社会貢献の可視化っていうのは、他の会議でもちょっと議論をしたりするんですけど、やはり数値として出すのは非常に難しい。もちろん工夫の仕様はあると思うんですよ。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

書籍の引用問題とその対処

「例えば人文系の書籍に引用されてるものって全く拾われてないので、引用数として出てこないんですよ。人文系は引用数少ないとかって言うんだけど、そもそも拾われてるものが少ない。そういうものを拾ってくっていうのが一つのやり方で、例えば私が前から提案してるのは、出版社が必ず 1 冊国立国会図書館に入れますよね。その時に同時に文献表の電子データを提出すればいいと思うんですよ。最近はず文献表が付いてると思うんですね、学術的な書籍であれば。その文献表データを電子データとして納入すれば、それでもう把握可能になると思うんですよ。そのような形である程度数値化していくことは重要だと思う。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

引用に尽きる

「これは、やっぱどれだけ引用されてるかっていうことに尽きると思うんですね。ただ問題は、引用を測るための数値的な基準の設定ができないですね。要するにこれは、私は日本の法律学の大きな現在抱えている問題だと思うんですけども、電子化されたジャーナルを統合した 1 個のデータベースというようなも

のが存在しないんですね。結局、電子化されたものがあれば、ある人の書いた論文が誰によってどれだけの数引用されてるかっていうようなことが当然分かるわけですけども、本学が出してる紀要にしても、どこが出してる雑誌にしても、閉じられたデータベースサービスというのはあるのかもしれないんですけども、横串的にデータを提供してくれるようなサービスというのはないから、そうすると感覚的に、あの人の論文ここでも引用されてるなっていうことは目にするんだけど、それが客観的な数値として上がってこないってというのはずっと続いてきてる話なんですね。そうすると学者同士の認識として、あの人はいい研究してますよねっていうような程度の理解でしか、学者の評価が行われていないっていうところは出てきてしまってます。」

〔中区分 5: 民事法学関連〕

日本の評価の特徴

「ただ、さっきも言ったように、やはりレピュテーションによる部分がちょっと多いかなというふうに思っているんで、海外に比べて地道な、堅実な研究というのが相対的に評価されにくいかなというふうに思っています。」

〔中区分 8: 社会学関連〕

外形的評価の実質

「はい。所属で判断したりとか、あるいは何々さんの弟子の気に入られてる誰かだから偉いみたいな、そんな感じなんじゃないかなと最近気付きました。もちろん英語で論文出して海外のジャーナルとか載ったら、たぶん偉いんだと思いますが、偉い割には誰もその論文は読まないような気がします。」

〔中区分 2: 言語学関連〕

評価の場の形成

「うーん、どのように測定可能か。これはなんかつくるしかないと思います。そういう書評みたいな場をつくらないと、ちゃんとした測定っていうのはできないんじゃないかなと思います。」

〔中区分 4: 人文地理学関連〕

エビデンス提示の難しさ

「これ、難しいですね。アメリカの判例の場合は、先ほど申し上げたように、論文をきちんと明示的に引用してくれるんです、下級審も含めて。最高裁だけじゃなくて、あらゆる裁判所が。そうすると、この論文は社会的に実務に高インパクトを与えたっていうのを、脚注を見てその引用頻度を見れば測定可能なんですね。でも、日本の裁判所は一切それを引用しないし。あと、実務家も意見書とか私たちに求めて、意見書書いてそれを後で論文にするってこともあるんですけども。それも、出した痕跡は公には残らないので、裁判所は記録として残さないわけですね。そうすると、実際の実務に働きかけをして影響を与えたっていうのが数字にしにくいのがちょっと良くないところですね。これ正直、裁判所変わってくれないと困るなっていう話。」

〔中区分 5: 刑事法学関連〕

リサーチマップの利用事例

「幾つかありますけれども、一つは、今は researchmap をベースにする形で、そこに書き込むものと、それから書き込んだものを年度のものについて書き足して、それで毎年提出して、これは教員の賞与の査定なんかにも使われています。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

リサーチマップへの統合

「前は大学独自のデータベース使ってたんですけど、やはり二重三重になっているっていうことが一つと、それから書き方がやっぱり統一されないんですね。researchmap もよく見てみると書き方は統一されてないんですけども、それでも大学のとすると違ったカテゴリーでやったりするよりよっぽどましだということがありますので、大体 researchmap をベースにするように今は変わってきていると思います。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

リサーチマップ入力の一般化

「ええ。2005 年の時に比べると増えてると思います。ただ、researchmap に一本化されたので、前に比べると楽になってるかもしれないです。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

分業の体制の明確化

「共著の場合は、執筆分担がはっきりしてると評価に値する。でもそれがよく分からない状態だと、あなたが業績を出したことは分かるけど、例えばポイントを付けるってことになったらどれほどなのか、ちょっと付けようがないっていう感じになります。」

〔中区分 5: 社会法学関連〕

論点 21：質的評価とピアレビューは代替になるか

論点の整理

量的指標への不満の受け皿として、質的評価・ナラティブ評価が期待される。哲学者の語りは最も踏み込んでおり、研究評価に使えないものを無理やり使っている現状を批判し、全く異なる内容的・質的なやり方で行うべきだと主張する。人事においては主要業績の中身を読んで質的に評価せざるをえず、量的要素はその中に寄与する部分として位置づけられる。

ピアレビューについても評価は割れる。イギリスの大学のピアレビューは「ほとんど機能してなかった」という経験が語られる一方、ピアレビューが絶対でないとしても、出したものが何でも学術成果だとするのは問題であり、やはりピアによる評価は一つのポイントだという擁護もある。政治学の研究者からは、測定を目安として行うこと自体は否定しないが、それをどこまで使うべきかは注意深くあるべきだ、という中間的な立場が示される。会計学の研究者からは、上中下程度の定性評価であれば可能かもしれないという現実的な提案も出る。

ここでの論点は、質的評価は量的評価の代替として設計されているのか、それとも補完として設計されているのかが定まっていないことである。代替として期待すると実務的な負荷と再現性の問題に突き当たり、補完として設計すると結局は量的指標が主導することになる。

語り

質的評価は簡単ではない

「最近、ヨーロッパだとナラティブとかって言葉がよく使われるんですけど、あとは質的とか、こういう評価群を、項目があってそれで点数を付けるんじゃないくて、全体的にどれぐらいって中を読んで評価するみたいな感じで、私自身もこれだってピンポイントには言えないです。幾つかあえて言おうとしてできなくはないんですけど、論文を読めば、いい論文と、「えっ」という論文、あると思うんです。一応ジャーナル出てるけど、「え、これで？」みたいなのかはああると思うので。」

〔中区分 63: 環境動態解析関連〕

質的評価の導入

「そういう意味では、研究の評価に使えないものを無理やり使っているところが多々あると思いますので、研究評価は全く違うやり方でやらざるを得ないし、全く違う内容的、質的なやり方ですべきであると考えております。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

質的評価の難しさ

「質的な研究評価というのは、具体的に量的に行われているような、業績、点数とかで行われている研究評価と同じような形で並べられるものが簡単に出てくるのかというと、そうはなかなかならないので、難しいと思います。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

質的評価の必要性

「研究の人事とか、そういうところでやるのは、ある程度、中身を見た上で、主要な業績を見て、その主要な業績の中身を見て、それがどのぐらい重要なのかというのを質的に評価する。もちろん、その質的な評価の中に量的な主要要素がコントリビュートする部分も当然あっていいわけですけど、でも、全体的な評価は質的に評価せざるを得ないというところですね。だから、割とそういう形の評価になります。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

ピアレビューの効果

「同じピアレビューは、確かにイギリスの大学ではありましたよ。だけどほとんど機能してなかったですね。」

〔中区分 7: 金融およびファイナンス関連〕

ピアレビューの限界

「ピアレビューが絶対とは思わないんです。いろいろと問題もありますし、匿名性というところでの課題もあるとは思いますが、そうかと言って自分の何でもかんでも出したものがそれが学術ですっていうと、それはそれで問題があるかなというふうには。昨今いろんなジャーナルもありますし、と感じているので、やっぱり同僚性っていうのは一つのポイントかなと思います。」

〔中区分 9: 高等教育学〕

成果測定の意義

「なので、測定しないことは選択肢としてあるのかっていうところが、特に対文科省でありますけれども、ある程度目安として測ってもいいけれども、それをどこまで使うべきかということはかなり注意深くやるべきじゃないかというふうに思います。」

〔中区分 6: 政治学関連〕

論点 22 : 何を「質が高い」とみなすか

論点の整理

評価の手続きを論じる前に、質の内実についてどこまで合意があるのかを確認しておく必要がある。語りから抽出される質の要件は、分野を超えてある程度共通している。すなわち、先行研究を広く深く踏まえていること、意味のある問いと自分自身の仮説を持つこと、そして手続きの正確さである。政治学者は理論的新奇性・論理的整合性・方法の妥当性を挙げ、認知科学学者は論理・データの信頼性・計測の妥当性を挙げ、宗教学者は方法論が問いに対して適切かどうかという手続きの正当性を重視する。科学社会学の研究者からは根拠の裏付けと新規性の両立、考古学の研究者からは一次資料の扱いの客観性、そして実験心理学の研究者からはパラダイムの転換可能性が挙げられる。経済学では因果推論の厳密性と外的妥当性の重視が近年強まり、日本の事例研究は「単なるケーススタディー」と位置づけられるようになったという変化が語られる。経済統計からは、経済学がサプライズを好むという性向が指摘される。

しかし、質の判断が実際には掲載誌によって代理されているという自覚も繰り返し現れる。国際関係論は「Tier1 のジャーナルに載っているか」をまず挙げつつ、そのみならず人がやっていない研究か、当局者のマインドセットや政策に影響を与えているかを見とす。教育工学の研究者は、ジャーナルや国際会議のランクは見るが、最近ではリサーチクエスションの面白さで見よう指導されていると述べる。経営学者は「大局観」、経営学の別の語り手は「フレーミング」と表現し、日本語学者は新しい事実の発見と確定を挙げる。

それと同時に、質を損なう要因も指摘されている。認知科学の研究者は、海外研究の物まね的な仮説設定の貧弱さを指摘し、史学の研究者は研究のサイロ化を指摘している。また、実験心理学の研究者は、研究不正と再現性の問題を挙げている。経済史の研究者は、「20 年後、30 年後に読んでも説得的か」という時間軸の基準を、実験心理学の研究者は追試研究の意義を指摘している。

さらに、質の判定以前の問題もある。日本語学では、日本語についての随想的な言説と実証的な研究が外部から区別されにくく、隣接する日本文学研究と混同されることで非学術的な議論に巻き込まれる危惧を指摘している。質を評価する前に、何が学術的言説かの境界が外部に見えていないという問題である。公法学の研究者からの「先生方の評判とか」という短い応答は、結局のところ質の判定が共同体の判断に還元さ

れている現実を示している。

語り

因果推論の重視

「経済学という言い方でいいですかね。比較的、経済学は社会科学の中でも評価基準はかなり確立されてきてるような気がしています。やはり基本的にはどの分野も同じだと思いますけど、きちんとした主題が立てられていて専攻研究の中で位置付けられて、意味のある仮説を立てて、それをきちんと因果推論をもってきちんと示せてるかどうかというのが重要な基準だと思っていて、特にここ最近はやっぱ因果推論においても外的妥当性のところがかなり重視されてきてるような気がするんです。少し前であれば実証分析で、日本の事例とかっていうのも十分論文として認められてたものが、もう単なるケーススタディーっていう位置付けになってきてる感じがして、ここ最近やっぱり内的妥当性はもちろんですけど外的妥当性を保った上で、それを普遍的なものとして示せてるかどうかというのがかなり重視され始めてるなっていう、そういう印象は持ちます。」

〔中区分 7: 金融およびファイナンス関連〕

理論と実証

「仮説っていうのが理論としてかなりもっと重視すべきじゃないかなと。だから、実証は大事なんだけど、実証の前にその研究者がちゃんと先行研究を把握した上で、自分なりの仮説を理論として持つっていうところが弱いんじゃないかと。要するに理論の概念の言葉にしても、海外の研究論文のまね事みたいなものが多いじゃないですか。大体自分なりの言葉を持たない形で研究発表してる人も多いもんだから、説得力ないんですよ、そういう意味ではね。」

〔中区分 10: 認知科学関連〕

研究の通用性の手法

「これも社会学の特徴だと思うんですけど、やはり理論体系が明確でないが故に、逆に人文科学的なところがちょっとあって、古典みたいなことが重視される。主に言及される主要な研究者っていうのがあります。例えば、私自身で言えば、マックス・ヴェーバーとニクラス・ルーマンという人がいるし、もう少し前だとタルコット・パーソンズとか、そういう、いわば国際的に知られているビッグネームの仕事に関連させると、通用性が上がるというふうな感じで考えています。」

〔中区分 8: 社会学関連〕

業績評価における質の基準

「そうですね、ほんとに質をっていうところは、かなり難しいと思うんですけど。今、私〇〇学会の委員を務めているところで、学会の研究報告なんかを査読しないといけないので、それは複数名でやるものなんですけれども、やってる時なんかには私たちが共通理解として1つ持ってるところが、今お話しすることで、まず1つは、これが〇〇学としての、個別事例の分析ではなくって、〇〇学に関わる、学会に来てる人たちが現場に落とし込めるようなことを意識した内容なのかっていうことは、やはり評価として持ってます。」

〔中区分 3: 博物館学関連〕

質の高い研究の要件

「ちょっと漠然とした言い方になってしまうんですけど、20年後に読んでも、あるいは30年後に読んでも、説得的だと思えるだろうなという評価を持てるかどうかというのが、自分の中では重要な軸で。」

〔中区分 7: 経済史関連〕

研究の質の担保

「正確性。文献の場合は、基本的に、新しくできたものだとまたちょっと違うんですけど、過去の注釈が、非常に蓄積があるので、それを丹念に追っていくというのが、です。」

〔中区分 1: 中国哲学、印度哲学および仏教学関連〕

良い研究とは

「例えば業績一覧で拝見するとすれば、ジャーナルのインパクトファクターとか、インパクトファクターはそこまで、例えばネイチャーとかサイエンスほど高くないにしても、基礎系の心理学とか発達系の心理学で、例えば歴史が長くてっていう評価されてるジャーナルかどうかとか、そういったところじゃないかなと思います。」

〔中区分 10: 実験心理学関連〕

エッセイと実証研究の相違に関する理解

「日本語系の人って、本当にこう。日本語論っていうのをいろんな人が説いてしまうんですよね、日本語については、いろんな人が思うところがあると思いますので。エッセイとしては面白いし、もちろん作家の方が書いてるものなんかも含めていろいろあると思いますけど。それと、いわゆる実証的に研究してくっていうのが、全然違うんですけど。その辺を区別ついてない方が、結構、もちろんいて。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

誤解されがちな隣接領域

「もう少し、なおかつ悪いことに、日本語学と日本文学の研究は、だいぶ違うんですけど。日本語学っていうのも何となく文学研究の一つみたいな形で、自分の日本語に関する思いを述べていくみたいな、そういうふうに思われがちなので。そういう中で、いろいろと非学術的な話をされることが多いんですけど。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

高い品質の要件

「高い品質ですよ。今言ったことと全く同じなんですけど、さらに高い品質というふうに考えると、正確に読むっていうのはある意味最低限のルールだと思うんですね。その中でやはり専攻研究っていうのを非常に広く深く理解していて、その上で自分の問題意識に基づいた設定の仕方というのが、今まで蓄積された学問的な蓄積の上に立って新しいものを開拓しようっていう意志を持っていて、それを新しい資料を出版したり、あるいは新しい資料の集め方をすることで乗り越えてみせるっていうのは間違いなく高い。めったに自分でもできているかどうか怪しいですけど、そういうふうに評価できるかもしれない。」

〔中区分 3: アジア史およびアフリカ史関連〕

研究の質 (サプライズ)

「まず、どうしてもやっぱり、どのジャーナルに載ってるのかっていうのがまず目を引いてしまうのはあると思うんですけど、例えば、このジャーナル、これがこのジャーナルに載るのみたいなことはやっぱりあるので、それはどういうふうに判断してるかっていうと、経済学全般的にそうだと思うんですけど、サプライズを好むところがあって、こんなにすごいことができたっていうのは、やっぱりみんなうれしいポイントなのかなっていうのはあるんですね。」

〔中区分 7: 経済統計関連〕

研究の質 (Tier 1 ジャーナル)

「難しいですね。研究の質。もちろん、Tier1 のピアレビュードジャーナルに載ってるかどうかっていうことは一つですよ。なんですけど、それのみならず、人が研究していないことをきちんと研究できているのかということ、それからあと自分の研究がある程度やはり関係者、当局者のマインドセットや政策に影響を与えているかということを見ているというのはありますよね。」

〔中区分 6: 国際関係論関連〕

研究の質 (引用数)

「一般的にはあれですよ。1 つ目は、無難なところでは、査読っていうか、引用どれだけされたか。引用数がまずあるのと同時に、もう 1 つは、これまでの定説みたくのを覆すようなのがっていうのが、高い品質の業績になるって考えてます。」

〔中区分 7: 金融およびファイナンス関連〕

研究の質 (オリジナリティとインパクト)

「大前提としては、やっぱり、ちょっとこれ、難しいんですが、まずオリジナリティがあるかどうかっていうところ。あとは学術的にインパクトがあるかどうかで、自分なりにやっぱりまずはインパクトがあるなと感じられる研究。もっと言うと本当はやっぱり何か社会的に役立つものであったりとか、そういう何かに影響を与えられるような研究っていうのが、一番価値基準としておきたいと思ってます。やっぱそこが非常に難しいところだと思ってます。そういう意味では、まず一番最初の最低限のところとして、そうやってパスするような内容っていうとちょっと身もふたもない感じがするんですが、一応そこからあと、他のことに関してやっぱりその後についてくれば、いいとかなるというか、そういう気持ちでやっています。」

〔中区分 41:食料農業経済〕

研究の質（示唆）

「すごく難しいんですけども、論文を読んで今までの概念を変えとか、知識もいろんな種類の知識があって元に戻れないっていうような知識もあると思うんで、それを知ってしまったら。そういった示唆を与えるような研究業績。ちょっとふわっとしてて申し訳ないんですけども、がやっぱり質が高いのかなと思います。」

〔中区分 9:高等教育学〕

研究の質（大局観）

「ちょっと本当、抽象的な言い方で申し訳ないんですけど、大局観じゃないかなと僕は思っています。要はさっき言った本質的に経営の現象として起こっているものの中では、本質的な課題って何なんだろうかっていうのをいかに捉えていくかで、そこに対して学術的なディシプリンを、視座をピチッと当てはめて、問題を分解して理解していくことっていうのは大事なんだろうけど、ただそうすると、証明の厳密さをどうやって両立させるかっていうのが難しくなるので、そこはすごく難しいかなと思います。」

〔中区分 7:経営学関連〕

研究の質（信頼性・妥当性・再現性）

「研究の質っていう場合に、いろんなものがあると思うんですが、論文の質という点では、当然論文のロジックなり、データの信頼性、計測の妥当性等が、論文の質っていうのは当然決めていると、それから再現性があるかどうかというようなことも重要なかなと思います。研究の質となると、それはいろんな研究スタイルがあってもよさうというふうに思っているのが難しいと。研究の質って何ですかね。よく分かりません。本人が楽しくやっているっていうのが重要なかなとは思っています。」

〔中区分 10:認知科学関連〕

研究の質（再現性の高さ）

「ほんとにそのデータをきちんと残すとか、実験であつたら再現性の高い実験を行うとか、そういったところですよ。」

〔中区分 1:芸術実践論関連〕

研究の質（事実のクオリティ）

「考古学は、そこが未熟で。欧米では、その発見した事実のクオリティー、考古学っていうのはどういう理論に基づいてこうやるものだっていうのは非常に進んでいて、プロセス考古学とかポストプロセス考古学っていう、それだけで教科書が何本も出るような。もちろん、日本もそれを取り入れてやるんですけども、どうしても、それと、かつての邪馬台国論争みたいな、そういう、ちょっととんでもないものが混ざっちゃってるところが。」

〔中区分 3:考古学関連〕

研究の質（新規性）

「そうですね。根拠の裏付けがありながらもやっぱり新規性がある研究で、裏付けがあるっていうのももちろんですけども、新規性があるって、あとはまあ今まであまり顧みられていない分野であったり内容であったりっていうことは、発信する時には重視はするようにはしていますけれど。切り売りじゃない感。個人の研究で質が高いものを目指そうと思った時に心がけているのは、これまで蓄積してきたものを積み重ねて研

究をするのはいいと思うんですが、これまでの研究を切り売りして何か書くことって結構できると思うんですけど、多分。なんですけど、そうではない気がしています。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

研究の質（一次資料の扱いと歴史像）

「私の場合は、発掘調査などで出土した一次資料というような資料を対象とした調査研究が、客観性のある方法で成されているかどうかというところが基礎となる重要な部分で、それによって新しい歴史像が描けているということが高い研究だと思います。なので、考古学の特徴にも関わってくるところなんですけども、実際に自分で分析できる一次資料、遺跡や遺物っていうのをちゃんと自身で扱っているか、分析してるかっていうところが、結構品質を高めることにつながると思います。」

〔中区分 3: 考古学関連〕

研究の質（パラダイムシフト）

「やった実験とか研究を論文化するっていうところはベースとしてやっぱりあるので、それにプラスアルファで質の高さとかっていう話になってくると、例えばこれまで基礎心理学とか発達心理学の中で、これが正しいとされてたような、いわゆる一般的な理論とされてたものを、パラダイムシフトするよなとか新しい知見を与えるような研究は、やっぱり個人的には質が高いものになるのかなと思いますし、そういうことをいつかできたらいいなというふうに思ってます。」

〔中区分 10: 実験心理学関連〕

研究の質（新規性・整合性・方法論）

「一般的なことしか言えないような気がするんですけども、理論的な新奇性であるとか、論理的整合性、研究方法がきちんとしている。あとは、場合によってはデータ収集、量的であれ、質的であれ、それをしっかりしている、特に他の人が集めづらいデータを収集しているというのはプラスかなと考えています。」

〔中区分 6: 政治学関連〕

研究の質（フレーミング）

「フレーミングですね。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

研究の質（理論や方法論）

「あとは、もちろん、理論や方法がきっちりしてるっていうのも、評価してもいいポイントだなって思ったりしますし。自分の中でいろんな評価のポイントがあるんです。自分が一番、やっぱり評価したいなっていつも思って、最初に言ったこととも絡むんですけども。やっぱり、どれだけ知的なフロンティアっていうんですか、そういうのがこじ開けられたかとか、前に進められたかっていうところで、やっぱり、アイデアの面ですごく新しいアイデアを出された研究は、自分の中ではすごく高く評価したいなと思ってますし、自分もそういう研究やりたいなと思ってやっています、ずっと。」

〔中区分 9: 教育社会学関連〕

研究の質の定義（調査と記述）

「査読する時よく見てるのは、やっぱり基本的には論理展開ですね。論旨が明確であるかということと、あと基礎研究しっかり見てるかという、もちろん他の分野でも当然のことだと思うんですけど、文学翻訳の中で、その関連領域でどういった形の研究がなされてるのかというのをしっかり把握した上で、自分の研究の特徴というのをしっかり続けられてるかどうかということと、あとは徹底的な調査と、説得力のある記述かどうかというのか。なぜかという、文学って結構、一見主観的な分野だと勘違いされやすいところなんですけど、実際はしっかり資料で裏付けたりとかすることによって、ものすごくやっぱり深い知見が得られることっていうのがあるので、その論の運び方であったり、しっかり調査をしてるかどうか、しっかりテキストを読めるかということなので、ほんと基本的なところだと思います。」

〔中区分 2: 文学一般〕

研究の質の定義（同僚の評判）

「先生方の評判とか。」

〔中区分 5:公法学関連〕

研究の質の定義（指標別の際立ちの程度）

「表面的にはあんまり見ないような気がします。表面的にっていうのは、難しいな。一個簡単なのは、ジャーナルのランクみたいなのとか、国際会議のランクみたいなのは見ますけど。それよりは内容が面白いものが書けているかどうか。よく僕らも、新規性、信頼性、有用性とかって、キーワードを言われる。どこでもそうなのか分かんないですけど、言われていて。それぞれが際立っているかどうかを見ているとは思いますが。」

〔中区分 9:教育学〕

研究の質の定義（RQ の面白さ）

「そうですね。一番、最近、どこでも言われてると思いますけど、リサーチクエスションの面白さで、一応見るように指導はされてきていると思います。」

〔中区分 9:教育学〕

研究の質の定義（参考文献と史料）

「ただ分かりやすく、何か一つ指標として言えって言われた時に考えてみると、例えば外形的な意味で分かりやすいのは、その中で、例えば論文 1 本とかの中で、どのくらいの参考文献というか史料を使ってるかっていうのは、結構重要なポイントではないかなというふうに個人的には思っています。」

〔中区分 1:科学社会学および科学技術史関連〕

研究の質の定義（バランス）

「なかなかね、難しいことなんですけれどね。例えば研究手法の洗練だとか、あるいはそのオリジナリティだとか結果の美しさだとか、結果がもたらす理論的なインパクト、またあるいは社会的なインパクトと、それぞれ、その辺りのバランスですかね。」

〔中区分 10:実験心理学関連〕

研究の質（研究手続きの正当性）

「全部見ることが大事というふうにおっしゃっていたこともあって、なので、先に研究の手続きが正しいかどうか。その方法論が、その対象問題、問いに対して適切かどうかというところがあって、それを基にどぶさらいができて一から十まで見ましたっていう担保が論文に示されていると、そこまで見た上でこの結果なのねっていうふうになるので、ある程度そういう質が担保されてるのかなと。インタビュー調査などでも、何でもこの対象を選んだのかというところがすごく大事になると思うので、それが確実に明記されてるかどうかという調査法には、私は気にしているかなと思います。」

〔中区分 1:宗教学関連〕

研究の質を何で測るか

「コンビネーションっていうことで、今から言う指標で、コンビネーションでっていうのだと、まずは査読があって、出た後のサイテーションの数でセルフサイテーションをのけるというか、仲間同士でサイテーションするので、インデックスが上がってるのもあるので。」

〔中区分 7:商学関連〕

研究の質を考える機会

「ほんとに問い直すことだと思いますけど、これ本当に面白いかなって定期的に考えるみたいなことはしていると思います。あとは、他の研究との位置づけみたいなことは、よく考え直す。特に何があるわけじゃなくても、考え直すことがあって。他の論文を読んでたりすると、これとの関係なんだろうかなみたいな話は、当たり前っちゃ当たり前なんですけど、考えてはいますかね。新しいの考える……。」

〔中区分 9:教育学〕

研究の質の構成要素

「私自身が重視している、まあ自分の研究としても、他者の研究の評価でも共通していることとしては、新

しい事実の発見。発見だけではなくて、事実があることを確定させるというか、きちんと示すという研究が、私はかなりこの分野にとっては重要ななと思っていて。理論的な研究でも、理論的な目を通さないと分からない事実っていうのがたくさんあるので。もちろんコンクルージョンとかディスカッションとか、そこでは非常に複雑なメカニズムを使った分析なんかはするんだけど、この研究をしたことでこういう事実が今回分かりましたっていう。事実というのは、日本語には不思議な現象があるとか。そういうことが分かるっていうのが重要だなっていうのが、私が重視しているところですかね。他の人の研究を読む時も、そういうのがあるとすごくいい研究だなと思います。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

研究の質と研究文脈

「それはどうしてかっていうと、特に仮説の理論がまず貧弱だっっていうのが感じて。特に海外の研究の物まね的なもの。例えば心理的安全性みたいな話を研究で取り上げてるのはいいんだけど、企業の実態の中身が分からないところで、数字だけがぼろぼろ調査しましたって出てくるんだけど、結果企業の中身のコミュニケーションのスタイルや、組織の構造がどうなってるかが分からないと、僕らなんかからすると心理の働根拠やベースになってる文化や、そういうものが一切見えないわけですよ。だから、全部定量化しちゃうとその辺がすっぽり抜けてしまうので、根拠付けの理由が、自分のロジックの中に組み立てられないっていうか。」

〔中区分 10: 認知科学関連〕

研究の質の評価

「オリジナリティという点では、そんなにオリジナリティが必要な活動ではないけれども、ただ、気を付けるべき点っていうのはいろいろありまして。科学哲学という分野のイメージが間違っって伝わるような伝え方っていうのはあんまり好ましくないです。あと、科学哲学の成果がちゃんと生かされていないと。例えば、非常に安易な相対主義的な科学哲学を広めてしまうとかですね。もちろん、そういう立場もなくはないわけけれども、それを単純に広めてしまっているのかというと、そうではないだろう。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

研究の質の重要性の伝授

「僭越ながら、結構伝えます、私は。それはやっぱり、社会の中で研究者がどう位置付けられていくのかということは、結構重要なことだと思っていて。それを忘れると、自分たちの正当性がなくなっていくし、なのでそれは若手、同僚もそうですけど、学生と話す機会があれば、そういったこと、社会に対してという意識というのは持ったほうがいいんじゃないかなということは、積極的に伝えるように私はしています。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

再現的研究（追試研究）の意義

「そういう意味で例えば、また研究のインパクトあるいは一つ一つの研究の価値に戻るかもしれないんですが、新しいことを研究して新しいことを、皆さんインパクトのあることを発表するっていうのはすごく目立ちますし、評価されますが、誰かがやったことをきっちり確かめて、やっぱり確かだったみたいな研究は評価されないわけですよ。でも、そういうの、案外個人的には満足度が高かったりするんですが、たぶん「それ、言ってること一緒でしょ」で終わっちゃうので、その辺をどう評価に取り入れていくかっていうのが業界全体の課題。再現実験っていうのが最近では多少価値を認められつつはあるんですけどね。」

〔中区分 10: 実験心理学関連〕

研究不正への指摘

「結構多いんですよ。特に教科書に載ってきて非常にインパクトのあったような研究が実は不正だったとか、実は捏造（ねつぞう）だったりとか、やたらに多いんでね。あんまりそういうところにこだわるよりは地道に自分ができることをコツコツやっていけば、そん中で評価されたり残ったりするのが出てきたらいいなと。」

〔中区分 10: 実験心理学関連〕

第 IV 部：制度としての運用——誰が、いつ、何を評価するか

論点 23：事前評価への偏りと事後評価の不在

論点の整理

本資料で最も反復的に現れる制度批判が、事前評価と事後評価の非対称である。申請書の段階では研究計画も予算の使途も細かく問われるが、使った結果何が生まれたかはほとんど誰も問わない。会計学者の語りは、むしろ資金は渡し切りでよく、その代わり結果を厳しく評価し、それが次につながるのが順当だと主張する。しかもその事後評価は「論文を何本書きましたか」ではなく、「どんな研究をして、どんな新しい知を生み出したか」を見るものでなければならない、とされる。一般的な運用との対比として例示的に挙げられるのが、公刊から 2～3 年経った後にベストペーパーを選ぶ〇〇学会の運用である。その期間に引用され次の研究を触発したかを見た上で評価される。これに対して、日本の学会では受賞者自身も自身の研究の事後的な効果や「意味が分からないうちに(事前に)表彰される」。

資源配分の設計としては、配分側の戦略に応じた区別も提案されている。確実に成果を求めるなら過去 5 年の実績が高い者に配分すれば良い。しかし、ブレークスルーを期待するなら着眼点の面白さをピアが定性的に評価すればよく、「おかしな提案ではない」ことが担保されれば足りる、という考え方もありうる。

なお、事前評価が完全に無効というわけではない。文化人類学者の語りでは、論文や著書を多く出している者は科研費に通りやすく、努力と成果と資金獲得はある程度相関しているとされる。ただし審査員が誰かによって結果は大きく変わるという留保が付く。公共経済の研究者からは、ハイインパクトジャーナルに載せて大学の評判を保ち研究資金を得るというサイクルの存在が語られ、業績・評判・資金が連動する構造が示される。人文科学を擁護するために有用性を分かりやすく宣伝する必要があるとしても、有用性を測る共通基準を立てられるのかという根本的な疑問も提起されている。

語り

事後評価の重要性

「さっきもお話ししたんですけど、研究支援とかの在り方をちゃんと後で評価すべきなんだと思うんですね。事後評価って重要で、お金を仮に資源配分しても出す申請書の段階ではいろいろさく言うんだけど、お金の使い方もうるさく言うんだけど、結局使った結果、何が出てきたかなんて、ほとんど誰も言わないっていう仕組みの在り方って、やっぱりまずいと思ってて、むしろあんなのお金を渡し切りでもよくて、どう使ってもいいよというお金を渡しといて後はそのかわり結果はちゃんと求めますっていう、その評価を厳しくしていく、それがまた次へつながっていくというのが順当だろうなというふうに思うんですね。その評価、なかなか難しいんですけど、リソースもかかるし、現実的ではないかもしれないんですけど、ちゃんとその研究の中身を評価するというんですかね、論文を何本書きましたかとか、そういう話じゃないんじゃないかなという気がして。どんな研究をしたんですか、何を新しい知を生み出したんですかというところをちゃんと評価するというのが重要なという気がしますけど。」

〔中区分 7: 会計学関連〕

事前評価と資源配分(1)

「資源配分のところというと、それは配分側の戦略もあって、確実に成果を出してほしいのか、それとも多少、不確実性があったとしても、何らかのブレークスルーを期待するのかによっても違ってくるわけです。確実性を求めると、さっき言ったように 5 年以内のパフォーマンスが高い人についていうのは当然、なってしまうのは仕方ないとこだと思うんですけども、そうじゃなければ、着眼点の面白さとかいうのを、ピアによって定性的に評価してもらっていいんじゃないかなと思います。つまり、おかしな提案じゃないってことさえ担保されればいいんだと思います。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

事後評価と資源配分(2)

「資源配分っていう意味で言うと、もちろん研究費とかそういう話になってくるかもしれませんが、そこにももちろん反映されることが望ましいとは僕は思うんですけど、結局今はそうになっていないというのは、例えば科研費だって申請書は出しますけど、結果は求められてないわけで、結果で評価されないですよ。いろんな日本の大学の研究支援もそうで、申請書ベースでお金配分しちゃうので結果は問われないんですよ。だから、もうちょっと事後的に本当は評価されて、それが次の資源配分とか、あるいは本当は報酬とかっていうのに反映されるのがいいような気はするんですけど、そうはなってないんだと思うんですよ。資源配分ということを離れれば、さっき研究の動機というところでプライドだという話はしましたが、何ていうんでしょう、研究者として一番うれしいっていうか、重要なものってレピュテーションでもあると思うんですよ。」

〔中区分 7:会計学関連〕

事後評価の有用性

「特に僕はアメリカ会計学会の表彰の仕方が結構好きなんですけど、パブリッシュされてから2〜3年たってベストペーパーとかって選ばれたりするんですよ。その2〜3年は一回マーケットのメカニズムに任せて、どれぐらいこれが引用されたり、次の研究をプロボクしてるものなのかっていうところを見た上で、いいペーパーだったねとかってことをやってると思うんですよ。日本は、書いてすぐ、2〜3カ月後に応募してくださいみたいな感じが多いと思うんで、もう意味とか分かんないうちに表彰されるよねっていう雰囲気かなという気はします。」

〔中区分 7:会計学関連〕

研究成果と資金獲得

「通常僕たちの分野では、いっぱい本書いてたりされてる、論文書いてる方は比較的科研は通りやすいはずなんです。だからそういう意味では研究の努力と成果は、それから資金の入手はある程度関連してきます。ただしこれははっきり言うと、科研もそうですが、誰が審査員やるかによって大きく変わってきます。だから僕は、科研は通れば当たったといって喜びますし、万が一とか、かつては落ちたこともありますから、落ちた時は困ったなというのが本心です。」

〔中区分 4:文化人類学および民俗学関連〕

研究評価と資源配分

「その中で限られた財源と社会的な余力というのを学問にどう振り向けるといった時の優先順位というふうになっていくと、パイの取り合いみたいないろんな分野になるんで。その中で人文科学を擁護するためには、何か分かりやすい形でそれを宣伝することがたぶん必要になってきてっていうふうには思って、それはある程度必要なんだろうとは思いますが。有用性はどう測っていいのか、測るためには同じ基準が必要なんで。同じ基準って立てられるんですかって。人間の幸福度にどう貢献するかっていうのを論証してみろっていうふうには、各分野に突き付けて語らせるぐらいのことしかないのかなという気がします。」

〔中区分 3:アジア史およびアフリカ史関連〕

規律と資源配分のための研究評価

「昔、大学の先生というか、大学を見てた時に、これはある意味で変な話人に点数を付けられないような仕事だからいい仕事だと思ってたところがあったので、評価されるということ自体が非常に大学としては残念な状態だと思うんです。ただそんなことを言っても、確かに何の仕事もしない先生とか、訳の分からないことしか言っていない先生っていうのもいるのかもしれないし、ある程度のポストを得たらもう仕事しなくなったっていう先生もいるっていう話もありますから、評価基準みたいなものがちょっとあったほうがいいだろうなとは思いますが。」

〔中区分 5:基礎法学関連〕

ジャーナル掲載と研究資金獲得

「業績に関しては、やっぱり、ハイインパクトジャーナルに載せてって、大学の評判を保って研究資金を取るってサイクルを続けなきゃいけないっていう強いプレッシャーがあるので。イギリスのほうが。だから、

そのミッションに従ってそれが最適化して、学部の組織ができていくっていう感じではあるんですけど、日本、〇〇大学しか知らないんで、日本の大学は。〇〇大学だと、そこまでの研究プレッシャーみたいなないので、なんか、自分が研究者だと思ってる人が研究してるけど、そのレベル感っていうのは、必ずしも、何か指標があるっていうわけじゃなくて、別に、なんでもいいわけですよ、っていうのは感じます。」

〔中区分 7: 公共経済および労働経済関連〕

論点 24 : 評価の時間軸

論点の整理

評価の時間単位は、研究行動を直接に規定する。研究プロジェクトが 5 年単位で成果を求められる状況では、短期的な研究ばかりになり「学術的体力」が低下する、という指摘も存在する。例えば、経営学の研究者からは「大きいものが出るまでちゃんと待ってあげることが大事」という指摘があり、同時に、大きいか小さいかを事前に判断する材料は何かという難問がそこに付随する。

短期化の帰結として、二つの副作用が語られる。第一に、とにかく出せばよいという行動様式の下で質が犠牲になること。第二に、革新的な論文ほど既存の評価軸に重きを置く学術誌には掲載されにくいと、予算を維持するためにやむをえず「そこそこのところで妥協する」という制度的な圧力が生じることである。

ここでの論点は、評価の周期と研究の懐妊期間が構造的にずれていることにあり、周期を延ばすか、周期内で測る対象を変えるかの選択が問われている。なお、社会的有用性の時間軸については論点 32 で改めて扱う。

語り

評価の時間軸

「やっぱりその点で、大きいものが出るまでちゃんと待ってあげることが大事というのと、そうすると、じゃあ大きいか小さいかは何が判断の材料になるかという問題にもなりますけれど。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

研究評価の時間単位

「今やっぱ 5 年間単位でお金も、研究プロジェクトがあった時 5 年間で成果出すってなることが多いわけですけど。短期的なやつばかりやってると、いったら学術的体力も減ってしまうから、本来的にはもうちょっと長期的に取り組めるようにすべきだと思います。今すぐ役に立たないって、何が役に立つかわからないわけだから、そんなに社会的な課題とかにあんまり意識し過ぎずに、研究者としてはやったらいいんじゃないかなとは思いますがね。」大学人”という言葉を使って説明することが結構あるんですけど、”大学人”っていうのは研究者であり、教育者でもあるわけですね。その立場としては一定さまざまな業務をやるべきだとは思いますが、全員がやらないといけなかつといわれると微妙だなとは思いますがね。純粋に研究者としてやる人がいてもいいのかな、と。」

〔中区分 9: 教育工学〕

過度な短期的評価の副作用

「ただ、あんまり、はやり廃り、研究のとにかく出せばいいみたいな形になってしまうのも、ちょっとまずいかなっていう感じはしますよね。そういう意味では、ほんとにやりたい研究をやるのがこの業界のいいところだから。だからあんまり業績。だからそういう意味でいうと、認証っていうのは良くないわけですよ。つまり、認証を通るために自分のほんとにやりたい、あるいは、こっちのほうが面白そうとかいうところを二の次にして、とにかく出さなきゃいけない、載んきゃいけない、業績上げなきゃいけないところで、質を犠牲にする可能性が出てきてしまうっていうところが、悪いようなところだと思いますね。」

〔中区分 7: 金融およびファイナンス関連〕

研究の質と妥協

「例えば、ほんとに革新的な研究論文とかってなかなか載りにくいじゃないですか。そうすると、そういうの

がなかなかジャーナルに載らなくて、予算も削られることになってしまうから、やむを得ずそこそこのところで妥協して予算を維持するからみたいなどころでは、ほんとにどれだけ質の高いのができるかどうかという、制度的には問題がありますよね。」

〔中区分 7:金融およびファイナンス関連〕

論点 25：自己点検の形骸化

論点の整理

自己点検については、否定的な評価がほぼ一致している。「これで何が分かるのかがよく分からない」「ほとんどないに等しい」「結局、形式ですよ、あれって。何本書きましたかとか」。

注目すべきは、必要性まで否定されているわけではない点である。科学社会学者の語りは、ああいうものは必要だと思うと述べた上で、回答した時に「じゃあ、自分はこうしようかな」という気づきが得られない点を問題にする。すなわち批判の焦点はフィードバック機能の欠如にあり、点検票の設計次第で改善しうる問題として提起されている。

一方で、自己点検を審査する側に回った者からは、業績数の多さから同僚の多忙が見えるという副次的な情報価値も語られている。また、自分の中で筋が通ったと思っても、それが評価として理解される形になっているかは本人には分からない、という自己評価と外部評価の原理的なずれも指摘される。

語り

自己点検の意味

「自己点検もばかばかしいというか、これで何が分かるのかがよく分からないところもありますけど。ただ自己点検の評価って、もう自己点検をチェックするほうの一応人間になっちゃったんで、自己点検を見て評価していると、確かにものすごい業績数というか、こんなに仕事してんのかとか、審査会がこれ 2 桁あるんじゃないのみたいな先生がいたりするので、これは忙しいだろうと思わされますよね。」

〔中区分 5:基礎法学関連〕

自己点検の意義

「ほとんどないに等しいというか、あんまり意味はないと思いますけど。」

〔中区分 7:会計学関連〕

自己点検の改善点 (1)

「結局、形式ですよ、あれって。何本書きましたかとか。そういう問題じゃないんだと思うんですよ。ここで言う、例えばやっぱり社会的とか重要なことだと思うんですけど、何かそこに全然踏み込んでない感じがします。」

〔中区分 7:会計学関連〕

自己点検の改善点 (2)

「私は、ああいうのは必要だと思うんですけど、自己点検が、何ていうんですかね、現状、あれを回答した時に、じゃあ、自分はこうしようかなって思う気付きみたいのが、あんまりない感じがして。」

〔中区分 1:科学社会学および科学技術史関連〕

フィードバックのない自己点検の意義

「(自身のフィードバックには)なってないじゃないですか。今そういう感じはします。」

〔中区分 1:科学社会学および科学技術史関連〕

自己評価と外部評価

「賭けであって、これで通ったっていっても、それが果たして通るかどうかというの、自分の中では話が通っても、それが評価という形でちゃんと理解されるようなものになってるかどうかというの、これは本人には分かんないですよ。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

論点 26：人事（採用・昇任）という避けられない評価

論点の整理

評価の是非を論じる際に見落とされがちなのは、人事という場面では評価が不可避だという事実である。応募者に点数を付けて客観的に評価しなければ人事が回らない、という現実が率直に語られる。

その上で、運用上の論点がいくつも派生する。法科大学院人事では「即戦力」、すなわち司法試験受験者を育てる教育歴と国内での確固たる研究業績が重視される。哲学者の語りは、多様性を重視する帰結として昇進が年功序列的になり、業績を多く出している者が「割りを食う」構造を認めた上で、それでよいと述べる。多様性の確保と業績の反映は、ここでトレードオフとして現れる。英文学の研究者からは、理系寄りのテンプレートが持ち込まれ論文を列挙する様式になっているという評価様式への違和感が示される。

評価が個人に及ぼす圧力についても語られている。点数化された評価システムを「半ば脅されてるような感覚」と表現する声があり、同じ語り手から、決めること自体は構わないがプロセスをオープンにして納得感のあるものにしてほしいという要求が出る。金銭的インセンティブはないが教員評価上のインセンティブがある、という中途半端な接続も指摘される。

さらに、評価が組織の協働そのものを蝕むという指摘がある。個々の目標を足し算で積み上げると達成できず、疲弊とメンタル不調を招き、その結果として互いに助け合わなくなり、大学組織が回らなくなる、という因果である。

語り

何処に注目して評価するか（法科大学院）

「例えば法科大学院人事ということになってくると、司法試験受験者を育てていく上でどれだけの教育歴があるか、そして主たる専門領域に関して、日本国内においてどれだけ確固たる研究業績を築いているかっていうようなことのほうが、結構、重視される。分かりやすい言葉として言えば、法科大学院教員としての即戦力があるかどうかというところが重視される面があるんですね。」

〔中区分 5: 民事法学関連〕

業績評価と昇進

「例えば、〇〇大学の文学部に関して言うと、多様性を重視するっていうことのある種のものである帰結なんですけど、突出して誰かがすごい若い時に教授になるってことはないです。ある種、こう言って良ければ年功序列的になって。だから、すごい頑張ってバンバン業績出して、例えば海外とかでも業績を出している人もわりと時間かかるわけですね。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

業績評価と昇進・多様性

「これはやっぱり、ある種トレードオフっていうか、どっち取るかって感じもして。例えば、僕も業績として結構出してるほうっちゃ出してるほうなんで、だから、そういう意味では、ある意味では割りを食ってる。でも、僕はそれでいいと思ってるんですよね。要は多様性を確保するために、それはそれできちっと決めてくと、分野的にはそういう業績出しやすい分野もあるんです。例えば〇〇学とかはすごいある意味では出しやすい。それは悪いってわけじゃなくて、個別の研究しやすいっていう。媒体も多い。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

点数化と競争

「(評価のシステムは) むちゃくちゃでかいと思います。半ばそういったところ、脅されてるような感覚です。で……」

〔中区分 3: 日本史関連〕

制度の納得性

「やっぱり評価っていうのは、自分たちの人生に大きく関わってくるので、決めるのは別にいいんですけど」

ど、その決められたプロセスをオープンにして、納得感のあるものにしてほしいというのがあります。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

評価とインセンティブの分断

「金銭的なインセンティブはないんですけど、教員評価の部分のインセンティブが……」

〔中区分 3: 日本史関連〕

評価の変化可能性

「理系寄りのテンプレートが来てて、やっぱ論文を列挙するようになってるので、北米の人文社会が単著主体だから変えようみたいなのは、誰かが知っててそれに合わせようって上の人が思わない限り、変わらないような気はします。」

〔中区分 2: 英文学および英語圏文学関連〕

採用では評価は避けられない

「具体的に大学で人事をするとか、人を採るっていう時には、応募者に点数を付けていって客観的な評価をしていかなくちやいけないので、今言ったような意味で、本質的には相当難しいところがあるんだけど、現実にはそれをせざるを得ないということですね。それをしないと、やっぱり人事も回りませんので。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

論点 27：個人評価と機関評価の乖離

論点の整理

文化人類学の研究者の語りが提起するのは、評価単位そのものの再設計である。かつて人文系は個人プレーが中心であったため、個人評価が機関評価に等しかった。しかし大規模なデータベース構築、大型展示、大規模シンポジウムなど、研究者間および相手方との協働が増えた結果、機関評価と個人評価が同等ではなくなった。

哲学分野の研究者からは、これに対応する管理側の要件が示される。何が業績として重要で、どこにどういう意義があるのかは学術分野の文脈によって変わるため、それを理解できることが大学のマネジメント層にとって本来重要なはずだ、という指摘である。

ここでの論点は、評価単位(個人／機関)と成果の生成単位が一致していない領域が増えていること、そして単位のずれを吸収する役割が管理層の分野理解に委ねられていることである。

語り

個人評価と機関評価の区別

「それからあと僕、今でも一番気になっているのは、個人評価と機関評価なんです。個人評価は論文の数とか本の数とか、その内容で評価できるかもしれないけど、機関の場合は機関で何やったかなんですが、理系と違って昔僕たちは個人プレーが今まで多かったので、個人評価イコール機関の時があったんですが、今そうじゃなくて、大きなデータベース作ってみたり、大きな展示会をしてみたり、大きなシンポジウムして、そいつをまとめてみたりといって協働し始めたんです。研究者間それから相手の方々と。そうすると機関評価と個人評価が直結しなくなったんです。その辺も工夫して。だから僕たち今、文科省に出す時は個人評価よりもむしろ機関としてこれやりましたから、こんな成果上げましたからということを中心にしています。」

〔中区分 4: 文化人類学および民俗学関連〕

大学マネジメントとしての業績評価

「だから、業績として何が重要とか、どこにどういう意義があるのかっていうのは、それはかなり各学問、学術分野の文脈によって変わってくるので、それをちゃんと理解できるっていうのが大学のマネジメント層にとってもほんとには重要なはずなので。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

第Ⅴ部：評価が研究を変える——誘因としての評価

論点 28：ジャーナル至上主義と標準化の両義性

論点の整理

評価は研究行動を測るだけでなく、変えてしまう。会計学者は、トップジャーナルにも「重箱の隅をつつくような論文」が多くあり、テクニカルな精緻化の方向に学問が進むことが本当に進展なのか分からないとした上で、外部組織による評価が組織全体をその方向に方向づける役割を持ってしまっている、と述べる。同じ語り手は、ジャーナル論文では書けないこと、本でなければ書けないことがあるにもかかわらずモノグラフが評価されにくくなっている点を「大きな問題」と表現する。

トップジャーナルへの掲載が研究の質を高めるかについては、見解が分かれる。経済史のある研究者は、一定のフォーマットに結果を収める制約が自分の研究を鍛えると述べ、経営学の研究者は査読対応と読解の訓練が研究者を育てると説く。他方で、外国語教育の研究者は、「出すこと自体は本当に個人の自己満足に近い」とし、アジア史の研究者は「そこに出すこと自体が高めるとは思いませんね。どこに出してもいいものはいいい」と述べている。文化人類学者は、掲載が質を高めるとは思わないが、その人のポジションと地位は確実に上がると整理している。公共経済分野の研究者は、査読公刊が世間が思うほど重要ではないという見方も示している。認知科学の研究者はインパクトファクターと商業主義への不快感を表明しつつも、同時に一度は載せたいという両義的な感情を語っている。

行動への影響を最も鮮明に示すのが、理論経済学分野の研究者が語るアジアの事例である。トップジャーナル掲載に給与を連動させ競争に加わらない者を解雇する政策によって論文数は急増したが、香港やシンガポールの研究者が自地域の研究をしなくなるという帰結を招いた。極端な政策は実行可能だが、それが質の高い研究につながるかは疑問だ、という。史学一般の研究者が指摘する研究のサイロ化も、同じ誘因構造の帰結として読める。

哲学の研究者からは、研究発表の標準化が進行しているという指摘がなされている。標準化は必ずしも悪いことではなく、ある種のプロフェッショナル化である。しかし「哲学ってほんとに完全プロフェッショナル化していいんだろうか」という留保が付く。経営学の研究者は、トップジャーナルに多く載せる人がビジネススクールで良い教師かというそうではない、と述べ、査読誌への投稿が教育に与える影響については逆に非常に大きいという語りもある。日本語学者は、評価システムが大学の目指す方向を指し示す機能を持つがゆえに、所属先によって研究者に求められるものも自己像も変わってくると述べる。イギリスでは教授になっても4年ごとに評価があり「絶えずバッテリーボックスに立つ」という比較も示される。

ここでの論点は、評価は測定装置であると同時に研究者の日々の活動の動機と努力投入の方向を規定する装置であるという二重性を有しており、制度設計には両者の二重性を意識することが大切である、ということである。

語り

外部評価と研究評価

「ジャーナル一辺倒になることの、あるいはジャーナル至上主義になることの弊害って多分たくさんあるんだと思うんですよ、学問の進展ということにとってみると。本当に今はトップジャーナルでも重箱の隅をつつくような論文っていっぱいあると思うんですよ。テクニカルに詰めました、みたいな、えらい細かい話をやってるような研究ってあるんだと思うんですけど、そういう方向へ進展していくことが本当に進展なのかどうかとか、正しい学問の発展なのかどうかというのは分かんないんですけど、ただ、そういった方向に組織全体として方向づけるのを役割というか、影響を外部組織による評価は持ちちゃってるとは思いますがね。」

〔中区分 7: 会計学関連〕

アウトレットに応じた研究がある

「例えば研究者として見てても、やっぱりジャーナルペーパーじゃ書けないこと、本じゃないと書けないこ

ととかってあると思うんですよね、言語関係なく。でも、それを本とかモノグラフとかっていうものをあんまり評価しないようになってるというのは、やっぱり大きな問題なんだと思うんですけど、それがどう両立するかという時に今自分が所属している組織の在り方から考えると、そんなにまだ、何ていうんでしょう、偏り過ぎてるとも思ってなくて、まあ、いいバランスを取ろうとはしてるんじゃないかなという気はしてて。」

〔中区分 7: 会計学関連〕

研究発表の標準化

「だから、今悩んでるっていうか、どんどんまさに標準化されてってしまってるっていう。しかも、それは必ずしも悪いことではない。ある種のプロフェッショナル化なんで。でも、哲学ってほんとに完全プロフェッショナル化していいんだろかっていう。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

所属先による方向性の違い

「そうですね。評価システムもそうだし、評価があるってことは、恐らく大学が目指してる方向もこっちっていう、導いてくれることがあるんですけど、やっぱり普通のっていうか〇〇とかにいて、大学の目指してる方向性って、そっちではない部分もあるので、自分の将来像とか研究者として求められてるもの、それから目指してるものっていうのが配属先に、所属先によって結構変わってくるのかなっていうのは感じてて。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

研究者評価の諸外国比較

「教授になれば一応、大学の職種の中では一上がりなわけですけど。それでもイギリスの場合は、それでも毎回評価が4年ごとにありますから。どんなに教授になろうが、絶えずバッターボックス立って、バット振らなきゃいけないんですね。」

〔中区分 7: 金融およびファイナンス関連〕

トップジャーナル公刊と研究の質への効果 (1)

「いや、出すこと自体は本当に個人の自己満足に近いものがあるので、それ自体はあんまり影響しないかなと思いますね。」

〔中区分 2: 外国語教育関連〕

トップジャーナル公刊と研究の質への効果 (2)

「やはり一定のフォーマットの中に、結果を報告しなければいけないというたがをはめられることによって、自分自身の研究を、自分自身でよりよく理解できるようになってっていう面は、ありそうな気がします。」

〔中区分 7: 経済史関連〕

トップジャーナル公刊と研究の質への効果 (3)

「僕自身は思ってないです。ただ、出たらその方のポジション、地位はすごく上がると思います。」

〔中区分 4: 文化人類学および民俗学関連〕

トップジャーナルへの取り組み

「あんまりインパクトファクター的なこと、あとは商業主義的なところに関しては、腹に据えかねるところはあるんですけど、1回載せとかなないと説得力ないなっていう気持ちもあって。だから、やっぱり1回は3誌の、姉妹紙でもいいかもしれないですけども、載せた経験があったほうが、自分にとっても、ものを考える上で重要なと思って、今はなんとかぎゅぎゅとして、一つどっかいこに出したいなっていうことは進めています。常にそれを狙いたいというような気持ちはあんまりないですけど。」

〔中区分 10: 認知科学関連〕

査読誌掲載の意味

「トップジャーナルに論文をたくさん載せられる人は、ビジネススクールでいいティーチャーかっていうとそうじゃないっていうことは十分あることで、ただ、両方できる人もいますけどね、もちろん。それもそうだと思うけれども、やっぱりさまざまな得意分野が、特化した生物に変わっていくから、どっかやってるうちに。それで、企業の人に話を聞かなきゃ企業のことはやっぱ分かんないし、それこそ経営学だとか言いな

がら全然会話の話じゃない論文もいっぱい増えてるし、最近。」

〔中区分 7:経営学関連〕

査読誌掲載の効果

「そこに出すこと自体が高めるとは思いませんね。どこに出してもいいものはいんだと思います。ただ、多くの人に読んでもらえるという意味では出しますし。」

〔中区分 3:アジア史およびアフリカ史関連〕

査読公刊の意味

「たぶん、世間の人が思ってるほどは、大事じゃないと思います。どうしてかっていうと、僕は、自分の入ってる学派っていうか、そういうスクールにいて、ある程度、リピューテーションがあるので。もちろん、インパクトジャーナルに載せてくってというのは、例えば、自分のこと知らない人であるとか、自分のクラブっていうか、研究コミュニティの外にいる人たちに対して重要なシグナルにはなるので、新しい共同研究者を見つけるっていう上では重要だと思うんですけど。」

〔中区分 7:公共経済および労働経済関連〕

一流誌への掲載の意義

「学術研究、そうですね。一定の指標にはなるので、自分がやってる研究が、主流の、自分のいるフィールドでメインストリームかどうかっていうのは、大事だと思うんです。メインストリームじゃなければ、トップジャーナルには載らないので、どんどん、端のほうへ追いやられていくわけです。だから、トップジャーナルを目指していくっていうのは、自分の競争力であるとか、自分の立ち位置であるとかいうのを保つても、評判を保つためには必要かなっていうふうに思いますけど、教育には、あまり関係ないんじゃないですかね、って思います。」

〔中区分 7:公共経済および労働経済関連〕

査読誌への投稿が授業・教育に与える影響

「これは私は非常に大きいと思います。私自身のそういうものを剥ぎ取った時に、私自身が言えることなんてたかが知れていて。ただ、それも私自身なんですけれど、査読を経て得たコメントであるとか、自分が査読して分かったこととかということがなければ、やっぱり大学院において、とりわけこの〇〇大学で研究者を養成していくとかという教育において、僭越ながら、学生指導する上で非常に難しいんじゃないかなというふうに思います。そういう経験がなくて、学生に対して理論的な貢献とかということについて、自分自身よく分かってないのにアドバイスするというのは難しいと思いますし、理論的貢献もそうですし、経営史であつたら経営史の世界にどう貢献するのかということとは、やっぱり自分が経験して痛い目見たり、たまに成功したりしてようやく分かってくることだと思うので。そこはやっぱりよりどころになっていると思いますし、学生にコメントする上でも非常に大事な材料を提供してくれている場だと思います。」

〔中区分 7:経営学関連〕

研究の質（査読付き論文の台頭の帰結）

「例えば中国が、査読付き雑誌に論文が出る、特にいわゆるトップジャーナルに論文が出たら給料どんどん上げるっていうシステムを導入して、そういう競争に入らない人をどんどん首切るっていう極端な政策を採って、一気に質は、論文の数は増えたんですね。何が起きたかっていうと、じゃあ香港とかシンガポールの研究者が誰も香港やシンガポールのファイナンスの研究をしないみたいな。でも結局、結果的にそれが極端な例としては、そうすれば評価基準を、5 大誌とかいわゆるトップジャーナルに論文出た人だけを評価するみたいな極端な政策を採ることもできます。結果的にそれは誰が幸せになるか、質の高い研究につながるかっていったら、みんなそれは疑問で。」

〔中区分 7:理論経済学関連〕

研究の質（中国のキャッチアップ）

「でも、そういう意味ではかなり研究の質は上がってると思うんですよ。ただ、相対的には中国がすごい上がってきてるので、もっと強い、何千万も給料払って優秀な研究者を採用してて、そこにはたぶん勝てな

い。だから僕は、昔に比べればはるかにまともな学術の話ができるので、いろんな人に。中堅私大とかに行くと、操作変数って言葉出した瞬間に「何ですかそれ」みたいだったのが、そういう時代ではもうなくなってるので。経済学の学術分野の質そのものは、絶対水準は上がってる。」

〔中区分 7:理論経済学関連〕

研究のサイロ化

「それで結論の分かったことだけば一つて羅列してて、これについては分かんなかったの、次の課題にしますみたいな。それはタコつぼ的なすごく小さい研究セミナーの仲介で通じるようなそういう業績なんです。」

〔中区分 3:史学一般関連〕

論点 29：「評価軸の多様性」は解になるか

論点の整理

前節までの困難に対して、語りの中で最も広く共有されている処方箋が「評価軸の多様性」である。哲学者の語りは、単著至上主義も査読論文のみを業績とする立場も、とりわけ海外査読誌の一定以上のインパクトファクターを持つ論文だけを重視する立場も等しく視野が狭いとし、評価自体の多様性が確保されることが重要だと述べる。商学の研究者は、数値が一人歩きしないことと軸を複数持つことが大事だという簡潔な定式化を示している。

しかし同時に、この処方箋の弱点も自覚されている。科学社会学者の語りは、複数の評価基準が併存する自分の領域について「よく言えば併存、悪く言えばなあなあ」と評する。経営学の研究者からは、有用性をテクニカルに測定することはできるしやるべきだが、問題はそれをどう評価するか、どう点数化するかだという指摘がある。

すなわち多様性は基準の不在と区別がつきにくい。多様な軸を掲げることと、軸ごとの重みづけを明示することは別の作業であり、後者を欠いたまま多様性を掲げると、実際の判断は不透明な裁量に委ねられることとなる。

語り

多様性と大学のマネジメント

「それはやっぱり総合大学としては良くない。逆に単著偏重みたいのも良くないと思うんですけど。あくまで、ある種の評価自体の多様性が確保されてるっていうのが多分大事で。だから、両方ですね。単著至上主義とかってのももちろん良くないし、他方で査読付き論文だけが業績なんだみたいなのも、とりわけ海外の査読誌のインパクトファクターが一定程度ある論文だけが大事だっていうのも、非常に視野が狭いんで。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

評価の多様性

「そうですね。はい。一人歩きをしないっていうのと軸をいろいろ持つっていうのが大事かなと思います。」

〔中区分 7:商学関連〕

業績評価の多様性を担保する

「評価の多様性っていう意味では、ある意味いろんな評価基準が併存して。よく言えば併存、悪く言えばなあなあになってるっていう意味では、うちの今いる領域はそんなに悪くはないとは思いつつ。」

〔中区分 1:科学社会学および科学技術史関連〕

点数化とその評価

「やっぱり私たちの世界でもそういうところはあって、なので、有用性をテクニカルに測定することはできるし、むしろそれはちゃんとやるべきことはやるべきことなんだけど、それをどう評価するかなんだよね、その点数をね。」

〔中区分 7:経営学関連〕

第 VI 部：社会との関係——社会的インパクトをどう扱うか

論点 30：社会的意義は測れるか

論点の整理

論点 18 から 21 までは研究そのものの評価を扱ったが、社会的意義の測定はそれとは別の困難を抱える。なぜなら、研究の質は同業者が判定できるが、社会的意義の判定者は誰かが自明でないからである。

日本史研究者の語りは「厳密にいうと測定できない」としつつ、悪しき相対主義に陥ることへの警戒も同時に示し、結局は論文数や雑誌の点数へと数値化が進むだろうと予測する。哲学の研究者は、財政圧力の中で説明を求められる状況の難しさを述べる。地理学の研究者からは「ある意味では『はい』ですが、ある意味では『いいえ』」という留保付きの回答が示される。文学一般の研究者からは、人の心にどの程度影響を及ぼしているかは計れないという意見があり、経営学者は測定の精度が「ないかあり得るか」という粗さでしか成立しないと指摘する。科学社会学分野の研究者からの「科研申請する時に、インパクトでいつも行き詰まる」という一言は、この困難が抽象論ではなく日常の実務であることを示している。

他方で、具体的な方法の提案もある。経営学者は、社会的有用性についてはオルトメトリクス、すなわち SNS 上での言及の追跡に意味があるという実務的な示唆を与える。アジア史の研究者は、数値化はできないとしても多面的に捉えることは可能だとし、国際法学の研究者は、社会的意義を伝える鍵は分かりやすさだという整理を示す。

注目すべきは、態度が時間とともに変化するという証言である。美学・芸術論の語り手は、若い頃は測定されるべきでないと考えていたが、税金を原資とする以上、納税者である国民に対して研究成果を説明することは妥当だと考えるようになったと述べる。ただしその上で、説明の相手と方法については留保している。

なお、測定一般への懐疑と擁護は論点 18・19 で、測定インフラの不在は論点 20 で、定性評価の可能性は論点 21 ですでに扱った。本論点はそれらを社会的意義という対象に限定して再度問い直したものである。

語り

研究の社会的意義とその測定

「これなかなか難しいと思います。ただ、この研究とかさっきの大学のいわば業界、行政もいろんなこういう財政圧力を受けてるわけです。お金、例えば国が出すにしても、それは無限ではないので、結局有限の中でやりくりをせざるを得ないっていう。その規模が、先ほど中国とは全く逆に日本はもうずっと縮小過程にあるので、そういった中でやっぱりある種の教育とか研究に対する予算を、どっちかというところと守っていかないといけないというような政治力学っていうのはあって。私自身はそれはどこまでコミットしていくかっていうのはちょっと自分でもよく分かんないんですけど、立場上はやらざるを得ない立場にもあるので、そうするとそういう予算の圧力に対抗する一つの手段としては、何らかのやっぱり指標は出さざるを得ない。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

社会的意義の測定の難しさ (2)

「難しいご質問ですね。厳密にいうと測定できないと思います。正しい、だからといって、あしき相対主義で、それは見解の違いだとか、好きなものをお互いがやればいいっていうふうに全てが言えるかっていうと、そうでもなくて、やっぱり誰が見てもこれはすごい質、高水準の研究だとか、誰が見てもこれはちょっとずさんでレベルが低いんじゃないかっていうのは、あると思います。あると思うということは、やっぱりどこかにその基準を据えているんだと思うんですね。ただ、その基準が、例えば 5 つの指標で一言で言い表せるようなものかっていうと、なかなかそういうこと、単純な言葉で拾い上げられるものでもなくて。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

社会的意義の測定の難しさ (3)

「結局、論文の数とか、この雑誌は何点とかっていうことで、数値化していくようなことが起こってくると思うんですけど、それはやっぱり、なかなか悩みながらやっているというか、何かじくじたる思いで、でもやらないと回らないって思いながら、でも本質がこれで、この人は 75 点で、この人は 68 点っていうことが何

「と言えるのかっていうことは、なかなか割り切れないというか、その悩みっていうのは、ずっと抱えているという状況ですね。」

〔中区分 3: 日本史関連〕

社会的インパクトとは何か

「いや、いつも科研申請する時に、インパクトでいつも行き詰まるんですけど。」

〔中区分 1: 科学社会学および科学技術史関連〕

社会的有用性と SNS

「思います。非常に意味があると思います。だからオルトメトリクスで Twitter なんかは追跡されてますけれども、さらにその意味で行政に役立つっていうのも補足されると、特に僕らのような領域はありがたいなと思います。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

文学の社会的意義

「人の心にどの程度影響を及ぼしてるかは計れないからですかね。文学って私の分野はまだ見えるほうだと思うんですけど、翻訳に関するものなので、翻訳って面白いよねっていう、異文化接触の営みに関わるものなので説明しやすいですけど、文学って本来は結構、書かれた文脈であったり、どういった時代がそういった作品を作ったのかということから、ただ一番根本的な理由としては、なぜ人の心をここまで動かされるのかとか、そういうところだと思うんですよね、根源的な。それって見えないじゃないですか。それを知ったところで、どうっていうわけじゃなくて、ただいろんなことをより知って、作品を楽しむという素晴らしさもあるので、そういった意味で研究ってとても重要だと思うんですけど、あと、評価して継承していくために。」

〔中区分 2: 文学一般〕

社会的有用性の多面性

「これも難しいことですけど、よく最近いわれますよね、確かに。社会的意義というのを測定、数値化はできないと思います、まず。例えば今よく使われるビジュアル化っていうか、見えるようにするっていうか、見えるかどうかっていう問題ですけども、社会的意義っていうものは当然あるのであって、最初に申しましたように、忘れ去られてしまうかもしれないような文化とか、人間の、人類の知的遺産というものを、これからも伝えていくっていう、そういう意義はあると思ってますし、有用性っていうのも、すぐに何かに役に立っていることではないんですけども、ただ、そういう知的な人間の財産っていうのを蓄積していくということは、必ずどこかで役に立つものだと思いますし、そういう即効性はないですけども、それがやっぱり人にとってのある意味での宝というか人類の宝になるんじゃないかなと思いますし。」

〔中区分 3: アジア史およびアフリカ史関連〕

社会的意義を測る精度

「測定が結局、ないかあり得るかっていうぐらいでしか評価できないんじゃないですかね。測定の言葉の意味がどういったものを指してるかがいまいち分かんないんですけども、研究者が自分で思う、この研究の社会的意義はっていう場合に、それはありませんっていうふうに考えるか、こうあり得ますっていうふうに書くかっていう意味での、ないか、あり得るっていう、ゼロイチに近いところでは測定はできると思うんですが、0 か 100 とかって言われると、それは無理なんじゃないかとは思いますが。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

社会的意義と評価

「ある意味それは適切、妥当だと思います。納税者って国民に開かれた研究の成果を説明はするべきであると。ただ、それと研究の評価って、またちょっと違ってくると思ってまして。なので、その社会的な意義、直接的には分かりにくいけども、研究上の意義はあるっていうのがあるわけですから。なので、…二段構えが良いのかなと思ってまして、研究上の成果はこれまでどおり研究者のピアレビューのような形でちゃんと評価する。それに加えて、社会的な意義の評価っていうのをやる時に、全ての研究について社会的

評価がプラスかマイナスかっていうの全部出すのではなくて、社会的意義があるプラスのものだけ、これはプラスっていうふうに載付けてく。で、マイナスあるいはゼロの場合は、あえて言及しないっていいんでしょうか、積み上げ式って言いましょうか、そういうふうにすると社会的評価のことだけを考えて研究の内容が変わってくってということなく、社会的意義も評価できるのかもしれない。ちょっと思い付きですけど考えました。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

評価に関する考え方の変化

「これも若い頃でしたら、そんな測定するのは難しいっていうか、測定されるべきでない、測定されないのが研究、特に人文社会学の研究だっていうふうに思ってたところがありますが、そういうわけでもなくて、やっぱり分野が違う研究者、あるいはその研究者じゃない業界に対して伝えるっていうか、みんなに理解してもらうためには、何らかの形で測定されることも必要だろうというふうに思うようになりました。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

社会への還元の対象

「税金等で研究してるから国民に対して返す意義がある、必要があるっていうのは、そうだと思うんですけど、それは直接のお金でいえばそうですけども、返すべき先は、それでいうと国民だけじゃなくて人類社会全体っていうふうな考え方もあると思うんですね。国民はノーとは言わないけど、国民はもちろん返すべきですけど、国民限定ではないかなっていうのは私を感じてます。」

〔中区分 1: 美学および芸術論関連〕

複合的視点の重要性

「測定されるべきか。ある意味では「はい」ですが、ある意味では「いいえ」で。測定をした結果、意味ないですねということはたぶんなくて。あるいは、社会的な意味の強弱によって研究の強弱をつけるというのはちょっと違うかなっていう感じはする。社会的に今すぐ役に立たない技術をやるのは社会的にどうなのっていうのと一緒に、基礎的な研究を積み重ねていった上に効用があるわけで、われわれのやってる、ある意味基礎的な〇〇を知るということが直接どの程度社会に評価されるかということが研究の中身を左右するというのは、ちょっと違うかなっていう感じがします。」

〔中区分 4: 地理学関連〕

社会的意義をどのように伝えるか

「最近では社会的意義とか、貢献というのが要請されるんですけども、私が考えるのは分かりやすさですかね。なるべく専門家以外の方が読んだ時に、その専門分野のことを理解しやすく伝えられる、それが社会貢献の 1 つかなというふうに思っています。なので、そういう依頼があった時はお受けして、自分の専門分野をかみ砕いて説明するようにはしています。」

〔中区分 5: 国際法学関連〕

論点 31：社会的有用性による評価をめぐる賛否

論点の整理

社会的インパクトを評価に組み込むことについては、明確な賛否がある。積極的な立場では、環境動態解析学の研究者が、社会とのエンゲージメントで何をすべきかを最初に決め、そこでの自分の役割が明らかになった時点で、それを仕事としてきちんとやっていけばそこを評価すべきだと述べる。同じ語り手は、社会的インパクトは研究の最後に考えるものではなく、常に社会とつながっている必要があるとも指摘する。新領域法学では、自説が判例になるといった実務への影響が社会的インパクトの最たるものとされ、法制度への影響や審議会への参画が尺度になりうるとしつつ、「一つ間違えるとただの御用学者になってしまう」という危うさも同時に語られる。国際法学者は、法典化への貢献という形で積極的な関与を選ぶ。金融・ファイナンスからは、学者という職務だけにとどまらないことの利点が語られる。

慎重な立場からは、考古学者が役割の限界を提起する。研究者は新しい知識を取り出し発信することに重

点があり、衰退した地域を経済的に立て直すところまでは力が及ばない。後押しや寄り添いにとどめるべきか、当事者として中に入るべきかは「まだ揺れている」。美学・芸術論の研究者は、社会還元を「絶対嫌だ」とする層の存在を指摘し、宗教学の研究者は「研究のための研究をやっている人が多い」という自己認識が示される。社会学の研究者は、社会還元を目的化することで逆に蓄積が難しくなるという根本的な疑義が提起される。

日本史と日本語学の研究者からは、説明責任の内容自体が難問だという指摘がある。社会貢献とは何かが定まらず求められる軸もぶれる中で、どう説明すればよいのか。日本語学者は、研究者が社会還元というとき自分の研究を押し出しがちだが、社会のニーズから考える視点が必要だと述べる。公法学者の「研究者は多分、みんな自分勝手に自分の研究は有用だと思っている」という一言は、この論点の出発点を的確に示している。

方法論的な提案としては、一般向けの著作を研究と同じ評価軸で測ると必然的に低くなるため、アウトリーチには別の軸が必要だという整理が示されている。

語り

社会へのコミットメントを評価する

「私は社会との、まずはその社会とのエンゲージメントで何をすべきかっていうのを最初に決めといて、そこで自分の役割と、それが明らかになった時点で、それをきちんと仕事としてやっていけば、そこを評価すべきだと思っているんです。」

〔中区分 63:環境動態解析関連〕

最後に考えるものではない

「ただ、今や研究をやって、それが社会的にインパクトがあるようにって言われているし、社会的にインパクトがある研究をするためには、常に常に社会とつながってなくちゃいけない。最後だけやればいいっていうのも、数十年くらい前はあったかと思うんですけど。最後だけ講評しましょうねっていう。」

〔中区分 63:環境動態解析関連〕

社会へのインパクト

「そういうところがあるので、そういう特殊性ですよ。実際にある法制度へのインパクト、それがどれだけあるのか。ある意味、審議会にどんだけ入ってるかとかは、尺度になるのかもしいですね。審議会って、各法分野で法改正の準備をする会議があるんですね。〇〇の場合は〇〇省が所管なので、そこで組織されるんですけど、大抵、民法とか刑法は法務省ですよ。大体そこに呼ばれるのは〇〇大学の人たちなんですけど、でも、〇〇大学もそれなりにいますしね。あれはやっぱり、一つ間違えるとただの御用学者になっちゃうとこもあるんだけど、でも、やっぱりリスペクトされてる人じゃないと声が掛かんないですね。」

〔中区分 5:新領域法学関連〕

研究者の役割と社会的評価の葛藤

「ちょっと考えたほうがいいのは、「社会に役立ちますか」っていうのには、確かに答えることはできるんだけど、「これは社会と一緒にやってるし、社会の課題を解決しようとしてます」って。多分、でもやっぱりアカデミアなんです。アカデミアで、自分たち、新しい知識をそこから取り出すとか、それを発信するとか、そこに重視があるので、「社会に役立つ、それが評価される」の意味が、例えばそこから、もう衰退してる地域を経済的に立て直すとか活性化するところまでは、多分、自分たちの力が及ばないところだと思ってる場所あるんです。逆に「餅は餅屋」ってよく言うんですけど、研究者は研究者のできること、あるいは私たちにしかできないことをやっぱりやったほうがよくて、ほんとにその地域活性化とか、その後、社会を変えてくのは、やっぱり地域に住む人たちだったり、そこに関係する人たちだったりでやれるように、後押し、寄り添うぐらいで止めといたほうがいいんじゃないかっていうのと、やっぱり研究者も当事者の中に入ってやるべきだっていう、まだ揺れてるところがあって、どっちを評価するんだっていうところとか。」

〔中区分 3:考古学関連〕

評価/社会

「やっぱり内容じゃないですかね。内容で研究を評価するのと同じように。だから、そうなると一般向けの本っていうのはおんなじ評価軸ではいけないし、おんなじ評価軸ですとどうしても低くはなってしまうので、そういうアウトリーチ的なものになると別の軸はありそうに思いますね。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

研究業績と社会貢献

「自分としては、分野の特性上、社会に向けて発信するっていう作業は不可欠だと思っているので、それ自身にはちゃんとエネルギーを割きたいと思っていますが、それがはたから見た時に研究業績かどうかっていうのは、そのように思われなくても、それは仕方がないのかなっていう感じです。」

〔中区分 8: 社会学関連〕

実務への影響がインパクトの好例

「そういう実務に影響を与えるのが、やっぱ社会的インパクトの最たるものですね、法学の場合。自分の説が判例になったみたいな。」

〔中区分 5: 新領域法学関連〕

有用性のより具体的定義

「アカデミアに関しては、それがあることによって次の研究が広がったっていうのが有用性だと僕は捉えています。だからもっとシンプルなイメージで言うと論文のサイテーションで、単に僕の論文がサイトされるだけじゃなくて、そのサイトした論文がさらに広がっていく、これがアカデミアにおける有用性じゃないかなと僕は捉えています。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

研究の有用性をどのように表現するか

「・・・それはそのとおりで、非常に難しくて。言語学の中ですら、かなりいつも説明から始めないと。自分がどういう理論を使っている、この理論を使うと言語学にとってどういういいことがあるのかっていうのを、言語学の分野内でもいつも説明してから始めるような研究なので、それは難しい。」

〔中区分 2: 日本語学関連〕

研究の有用性と社会への還元

「・・・現実の政治からすると役に立たないやつっていうか、そんな感じで見られるのかもしれないけども、われわれとしては距離を置きながらも、先人たちの教をいろいろ細かく調べることによって、現代のいろんな問題ですよ。さまざまな矛盾とかいろんな諸問題に対して、やっぱり1つの処方箋なんかを提示できるようにしなければいいんじゃないかなんていうふうに、私なんかも微力ながらちょこっとそういうモチベーションだけは高く持とうとしてるんですよ。」

〔中区分 6: 政治学関連〕

研究の社会への還元

「さっき言った現地の人に絵本を作っちゃんと還元するとか。あとは、日本の子どもたちにもほんとは何かそういう柔らかい、漢字が少ないような書き物しなきゃいけないなとも思ってますね。」

〔中区分 9: 子ども学および保育学関連〕

研究成果のアウトリーチ

「そういうような人の話も聞いて、論文にならんじゃないかというアウトリーチとか教育の世界が、どこまで論文になるのかっていうのを定年までやってみて。結局うまくいかんかもしれないけど、やってみようかなと。何人かの方から、失敗するぞ、やめとけ、何人もおんなじことやって駄目になったんだ。おまえまた、その死屍累々を見るのは俺は耐えられないのでやめろというふうに助言してくれる人もいます。」

〔中区分 9: 科学教育関連〕

社会還元への忌避

「しかも、もう一つ下のほんとの社会還元みたいなものは絶対嫌だっていう人もいるし、ほんとの上澄みの

「ここだけ僕はやっていればいいんだっていう人、やっぱり文学にもいますので。」

〔中区分 1:美学および芸術論関連〕

基礎的な知識ベースの重要性（有用性の別定義）

「特に研究者だけじゃなくて、それこそ起業家も経営者もそうなんですけど。彼らは何を話をするかっていうと、その時、ビジネスの話でつながるんじゃなくて、それこそ教養レベルの話で歴史だとか哲学とか音楽とか文学とか、そういうので話をして、しかもそういうところからつながりが出てきてやってるっていうと、面が世界的にあると思うんですけども。それがちょっとやっぱ、日本の中では全然分かってないというのが1つあると思いますし。」

〔中区分 1:宗教学関連〕

研究を通じた社会の自己理解の支援

「よりよく生きるためには、自分が分かってるってことは、すごく大事な要素だと思うんですけども、自分の範囲がそういう自分たちの生身の自分1つだけではなくて、海が好きな人なら海まで自分の延長だと思うかもしれないし、だけど人が好きな人にとっては、自分が生きている社会まで自分の延長というふうに、普段何となく認識して生きてると思うんです。そういう意味では説得的な経済史を語るということは、あるいは説得的だと思ってもらえるような経済史を語るということは、この社会で生きてる人により確かな自画像を提案することになっているはずで、その試みがうまくいけば、実際に経済を動かしてる人に、より確信を持って前に進んでいただいてるのではないかなと。少なくとも日本語で本を書く時には、そういうことをすごく願って書いてます。」

〔中区分 7:経済史関連〕

研究者の納税者に対する説明責任

「さっき言った、社会貢献っていったい何だっていうのは難しいし、求められる軸もぶれてく中で、どう説明すればいいんだろう。ただまあ、一つあるのは、うちにこもってるだけじゃあ何にも、納税者からすると、何に使われてるか分からないから、納税者側が、何かどうい、それぞれの研究者がどういう研究をして、どういうところにお金を使ってるんだろうっていう。」

〔中区分 3:日本史関連〕

社会のニーズと研究者の応答

「社会的な需要に適うか適わないか。研究者が社会還元というと自分の研究を押し出しがちだが、社会のニーズを考えて、その中で自分が何をできるかを考えるべき。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

研究者の自己定義としての有用性

「社会的、いや、一方、社会的意義はさておき、研究者は多分、みんな自分勝手に自分の研究は有用だと思っているはずなので。」

〔中区分 5:公法学関連〕

評価に関する根本的疑義

「難しいですね。どうしてかという、それ自体を目的化することによって、逆に言うと社会学は蓄積が難しい状態になっているという構造的な問題も僕自身は感じていますので、今以上にそれを強く推し進めることに関しては懐疑的です。」

〔中区分 8:社会学関連〕

敢えて積極的に関与する

「国際法学の有用性は、やはり国際法というものの自体が法典化されていないことが多いので、その法典化に向けた貢献というのが一側面としてあると思います。何が国際法かを国家もあまり意識して使っていないことが多いので、何が国際法なのかっていう範囲を明確化してあげるというのが国際法学の意義の1つではあります。」

〔中区分 5:国際法学関連〕

実務と学術

「いい面と悪い面は、いい面はやっぱり学者だけでとどまらないのがいいような気がします。そういった新しい例えばサービスが出てきた時に、そういった実務家の人、やっぱり営利活動やってる方々は動きが早いので、新しいデータだったり、新しい観点がどんどん出てくるっていうのはいいような気がします。同じテーマやってるような気もしますけども、新しいテーマというのがどんどん出てくるような気がします。」

〔中区分 7: 金融およびファイナンス関連〕

社会との対話

「つまり、英語で論文書くだけではなく、その成果を分かりやすく日本語で、中学生や高校生にも分かる形で。理系の方がよくなりますよね、ブルーバックスを書いたりとか、サイエンスカフェを開いたりとか。そういうふうな形でその最先端のものに対する憧れや畏怖やもしくはそうした親しみを持たせるような形で、一般の人とのチャンネルを作っておくという形では測定は十分できると思いますし、それはある程度しておく必要はあるのではないかなと思います。」

〔中区分 3: ヨーロッパ史およびアメリカ史関連〕

記録の重要性：社会的意義/社会的有用性

「そうですね。記録が残っていればっていうところ、まず前提になりますけれども、でもやっぱりその記録が残ってないと、そういった対処もできないので、そういった意味でやはり記録管理が重要であるっていうところで、社会的な意義をやっぱり、私たちも研究分野にいる立場として、もう少し強調していく、働きかけていくっていうことも同時に重要だとは思いますが。」

〔中区分 3: 博物館学関連〕

実社会への還元を意識した変化

「はい。原発までいかないにしても、活断層の上に公共施設が全国にどれぐらいあるとか、避難所があるとか、そういったことを活断層研究者が……阪神淡路大震災以降の話なんですって。阪神淡路大震災の前は、活断層研究はもちろんやっていて、活断層研究者は活断層というものの性質について特化する集団だったと。ところが、それがああいう結果を招くということを目の当たりにして、そこで、活断層研究者は活断層ばかり見てはいけないというふうにして、改心をしてというか、考え方を変えて、社会における活断層のインパクト、活断層があることのインパクト、動くことのインパクトを、ちゃんと世の中に発信していかなきゃいけないですねというふうの方針をちょっと修正したんですって。」

〔中区分 4: 地理学関連〕

研究の意義

「高等教育学に限って言えば、割と実用的な学問でもあるべきなので。実態はともかくとして。そういう意味では研究成果がより良くするために使われてほしいと思ってますが、すいません。現実的にはかなりの乖離(かいり)があるのかもしれないです。」

〔中区分 9: 高等教育学〕

論点 32：有用性の時間軸と事後性

論点の整理

社会的有用性をめぐる議論の多くは、実は時間の問題に還元できる。例えば、哲学の研究者は、ウクライナ情勢のような事態が起きた時にスラブ文学の蓄積が突然役立つ例を挙げ、社会的意義は事前には予測できない形で顕在化すると述べる。実験心理学の研究者は、自分たちが明らかにしたメカニズムがいつ有用と判断されるかは事前には分からないとし、別の語り手は「100 年経ってから分かることもある」と述べる。高等教育学の研究者も、どんな分野が将来役立つかは誰にも分からないとする。地理学の研究者は、社会的重要性が社会情勢によって変化し、短期的な流行が予算配分を左右することを指摘し、成果が1年後か3年後か分からないという事前予測不可能性を述べる。

アジア史の研究者は、社会的意義には即効性のものと遅効性のものがあると整理する。社会学者は、目の

前の社会に役立つかどうかは「ある意味どうでもいい」とし、大学を巨大な知のデータベースとして捉える時間スケールを提示する。経済政策と政治学の研究者も、有用性が時代によって変わることを指摘する。経済史の研究者は、役に立つことに寄りすぎると研究そのものが痩せるとし、思想史分野の研究者は「一定の割合で世の中の役に立たないこと」を担保しなければ社会全体がやせ細ると述べる。経営学の研究者からは、過度な有用性の主張が反作用を招くという指摘もある。

ここから導かれる論点は比較的明確である。社会的有用性を評価指標として用いるならば、その評価は必然的に長い時間軸を要求する。しかし現行の資源配分は5年単位で動いている(論点24参照)。両者のずれを埋める仕組みがないまま有用性を指標化すれば、測っているのは有用性そのものではなく、有用性を短期に説明する能力ということになる。他方で、資源に制約がある以上、ある種の優先順位の決定は避けられない、という現実的な指摘もある。

語り

評価されるタイミングは事前には不可知

「ただし、われわれがメカニズムとして上げたものがいつ評価されるか、いつ有用だと思われるかは、先生がおっしゃったみたいに時代の変化とか、それに目を付けてくれた方がいつ出るかっていうところとも大きく関係すると思うので。」

〔中区分10:実験心理学関連〕

社会的有用性の事後的性質

「だから、理想的過ぎるかもしれないんですけども、どんな分野が将来役に立つて誰にも分からないので。ウクライナの情報がこんなに必要になるなんて誰にも分かんなかったんで、やっぱりいろんな分野を研究者の興味に応じてそろえておけるような、ある一定のパラダイムじゃないんですけど、状況をむしろ担保したほうが戦略的には正しいのかなっていうふうに思います。分かんないですよ、多分。」

〔中区分9:高等教育学〕

社会的インパクトの時間効果

「とても難しいと思いますね。社会的意義っていうのは即効性と遅効性、早く効くものとそうじゃないものがあるわけですよ。科学技術なんかは最もはっきりしていて、より速く電車が走るとか、より安全に車が走るとかって、そういうのは多くの人が意義を認めるところだと思うんですけど、人文社会科学、特に人文学ですね。人文学の古典学なんかで行われていることっていうのは、現代的な意味でいえば意義や有用性はほとんどないと見なされてるわけだと思うんです。だけどそうではなくて、その後の有用性は測定されるべきかどうかという質問に対しては、基本的にはすべきじゃないだろうというふうに思っていて。ただ人文科学っていうのは大きな総体であって、そのもの大きな総体の中の引き出しを開けるといろんな知識が詰まっていて、総体として保たれていてそれを継承する人がいることで、人間社会全体が知的で思考力に満ちたものなる。そのためにはそれを伝えていくための教育制度や研究成果を維持するための経済力だと、いろんなものがあるんで何を優先するか非常に難しく、優先順位として低くなるっていうのは、ある程度理由があることだと思うんですけども。」

〔中区分3:アジア史およびアフリカ史関連〕

社会的有用性と時間スケール

「つまり目の前の社会に役にたつなんていうのは、ある意味どうでもいいことで。大学っていうのは巨大な知のデータベースで、世界の知を集める図書館みたいな場所だから、その図書館の管理だけでも大変だし。その学問にはそれ固有の論理と、それが積み重なってきた歴史とっていうのがあり、それを継承して何か前に持っていこうとするっていうのは、本当に狭い意味で、高々ここ50年とかそれぐらいのタイムスパンで役に立たないっていう評価軸とは全く一致しないし、それで構わないっていうふうに言っています。」

〔中区分8:社会学関連〕

研究の有用性と時間軸

「・・・時系列の時間的な変化があり得るし。しかもそれがどこで、つまり読み手、その研究受ける側によってはだいぶこれが変わるものであって、それが例えば第三の機構で測定して評価するっていうのは、あまりにも還元的っていうか、そこしか見えなくて。しかもそれを測定しようとする、それを意義とか有用性を捉える時の周りの視点も全部限られてしまって、こういうところだけが重視されてしまう。」

〔中区分 8:社会学関連〕

研究の有用性と時間的变化

「どちらもそういった意味で存在意義も有用性もあるので、成長していくし存続していくんじゃないかなとは思っています。」

〔中区分 7:経済政策関連〕

研究の有用性と時代

「いるけど、だから、この有用性がやっぱり時代によって結構変わりますからね。」

〔中区分 6:政治学関連〕

社会的意義の事後的把握可能性

「社会的意義、測定可能かもしれないですけど、例えば 100 年経ってから分かることもあると思うので今言われてもというのはありますね。」

〔中区分 10:実験心理学関連〕

社会的重要性の不安定性

「社会的な重要性というのは社会情勢によって変化するものですし、短期的にはやりみたいな形で研究の予算の強弱をつけるっていうのは間違いだと思う。はやりみたいなやつではね。」

〔中区分 4:地理学関連〕

研究成果の事前予測不可能性

「まあそうですね。われわれはこれが絶対将来役に立つと思ってやるんだけど、それが 1 年後なのか 3 年後なのかっていうのはちょっと分からない。だけど、これをやっという無駄になりましたってことはたぶんないと思ってやっていて、長い目で見てよと思う思いはあります。」

〔中区分 4:地理学関連〕

研究の予測可能性

「自然科学みたいに極めて実用的かつ予測可能性が高いものだと、それこそその緻密なモデルがつくれたことによって社会に対する貢献がダイレクトに大きくなることあると。iPS 細胞ができればちゃんと病気が治るとか、そういうことではあるはずだなと。」

〔中区分 7:経営学関連〕

役に立つに振りすぎない意味

「ちょっと違って。役に立つっていうところに寄り過ぎてしまうと、例えば金融史の論文を書く時に、あるファイナンスのモデルが、過去のデータに支持されるかどうかっていうこと、これは役に立つべきだと思うんですけど、そこに寄り過ぎてしまうと、多分面白い研究にならないんです。それよりも 100 年前の東京株式取引所の振る舞いはこうであったということ自体を取り出してくるほうが、例えばマーケットの中にいる人でも、ちょっと目線の高い人にとっては、面白いんじゃないかなと。なので、役に立つという方向に寄り過ぎないほうがいいと。だけど寄り過ぎないほうがいいというスタンスを取る以上は、ものすごく役に立ってますねと褒められることを期待してもいけないという、そういう感じです。」

〔中区分 7:経済史関連〕

敢えて開き直って考えない

「有用性だけにこだわっていたら結局は社会全体がやせ細ると思うので、一定の割合で世の中の役に立たないことでもやってる人がいていいと、いさせてくれよと思ってますので、そこで無理に自分の研究分野はこういう観点に立てば社会の役に立ちますっていうアピールをすること自体、もう私諦めてます。」

〔中区分 1:思想史関連〕

過度な有用性に対する反作用

「やっぱり社会の人にアピールするためには、一番分かりやすいのは、すごく有用性があるみたいな形で、こういうことに役立ちますっていうことを言うのがいいと思うし、またそれを社会も期待していると思うし、またそれを上手に出せば、そのことによって評判が高まるってことは重々承知なんだけれども、ただ、やっぱりそういうものが研究の中で増えていくと、研究そのものは非常に劣化しそうな感じがする。それを劣化と言ってる僕がどういう視点で見ているのかということは疑問、言われたら答えるのは難しいけど。何かやっぱりそうじゃないところに重要性があって、それを大事に、私たちは、学問共同体はしてきたように思います。少なくともこれまでは。」

〔中区分 7:経営学関連〕

目の前の社会的有用性

「測定してその人を評価するっていうことは、あつてしかるべきかなというふうには思っていますが、社会的な有用性があり思い付かないような分野、話だからといって、別にその学術的な研究を低く評価することはないかなっていう感じです。中国哲学なんて、やってて多分、目の前の社会的な有用性なんてあんまりないかもしれませんが、それはやっぱり非常に重要だっていうのは、自分で経験してよく分かっているもので、そんな感じです。」

〔中区分 8:社会学関連〕

資源制約と評価

「やっぱり医療のバジェットがあるじゃないですか。そうするとどうしてもトリアージじゃないですけども、優先順位っていうのを付けなきゃいけない。そういう視点でいったら、やっぱり測定はしないといけない。全てユニークでいいよと言っても、じゃあ全部母数で割ってお金をみんな平等に配ればいいのかっていうと、そうではないと思います。」

〔中区分 9:子ども学および保育学関連〕

社会的意義は突然明らかになる

「今回のウクライナみたいな問題とか起きた時に、ちゃんと文学部が役立つわけですね、それに。例えばスラブ文学やってる人たちは、きちっと文化的な背景もちゃんと踏まえてコミュニケーションを取ったり、あるいは受け入れをしたりとか、あるいは声明を出すとかっていうところにまでちゃんと加えて。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

論点 33：学術的質と社会的インパクトは両立するか

論点の整理

同一の問いに対する複数の回答が並ぶことで、この論点の分布そのものが見える。食料農業経済の研究者は、社会を扱う学問である以上は両立すべきだと述べる。新領域法学の研究者は、学術的に優れた理論が実際の判決になるなど、学問と実務が「ちょうどいいところで釣り合う」現象があるとして肯定的である。経営学者も両立はイエスだと答える。日本史分野の別の研究者は「両立しなければいけないと思って、やっています」と規範としての受容を表明している。人文地理学者は、学術的意義のある研究と社会的意義のある研究の両方があってよいと述べ、二者択一を退ける。考古学者は「ケース・バイ・ケース」と答える。会計学者は「両立はするとは思いますが、極めてまれなケース」と限定する。ある実験心理学者は、心理学が半世紀ほど社会的インパクトに軸足を置いてきた経緯を踏まえた見解を示す。ある地理学の研究者は、この問いを二律背反として立てること自体を批判している。

両立の可能性についてこれだけ回答が分散しているという事実自体が、社会的インパクトを評価指標として組み込む際の実務的なリスクを示している。

語り

質の高い研究と社会的インパクトの両立 (1)

「やっぱり社会科学って考えていくと、そこが両立するべきだとは思ってます。やっぱり社会を取り扱う学問として、やっぱりアカデミックな知見だけっていうところになってくると、やっぱりそれは本来的なインパクトじゃないのかなとは思って。両立していくべきなのかなと思ってます。」

〔中区分 41:食料農業経済〕

質の高い研究と社会的インパクトの両立 (2)

「結構するんじゃないですかね。落ち着くところに落ち着くみたいなのがありまして。要は、学術的に優れた理論が、実際に判決になって出てくるとかね。学問と実務が、結局ちょうどいいところで釣り合うみたいなのところは、現象はあるので。」

〔中区分 5:新領域法学関連〕

質の高い研究と社会的インパクトの両立 (3)

「ケース・バイ・ケースです。」

〔中区分 3:考古学関連〕

質の高い研究と社会的インパクトの両立 (4)

「両立は、するとは思いますが。ただ、極めてまれなケースだと思います。」

〔中区分 7:会計学関連〕

質の高い研究と社会的インパクトの両立 (5)

「昔は両立すると思ってました。でも、今はその両立、非常に難しいなと思ってます。というのも、学術、僕は〇〇とかそういったところを今、メインで研究してるんですけど、社会でわれわれのような〇〇を研究してる人に求められるのって、要はもう、簡単に言っちゃえば何とか〇〇のあの建物、復元してくださいっていう。昔の姿に木造再建したいんですよ。」

〔中区分 3:日本史関連〕

質の高い研究と社会的インパクトの両立 (6)

「両立させたいですね。ただ、心理学分野で、ご存じかと思いますが、ここ半世紀ぐらいは社会的インパクトにちょっと偏り過ぎていたって反省がここ 10 年ぐらいありまして。要は再現性の問題ということになりますが、インパクトだけ高くても再現性がないっていう研究が乱発されてきていると。今、そこから反省に向かっているフェーズですので、インパクトばかりを追いかけてはいけないっていう。」

〔中区分 10:実験心理学関連〕

質の高い研究と社会的インパクトの両立 (7)

「これは両立しなければいけないと思って、やっています。でもそれが、ただ、成功してるかしていないかということですね。成功していない場合は、ほとんどは力量不足とか力不足の側面っていうのがあるんだと思うんですけども、でもそれ以外にやっぱりどうしても面白いんだけど、伝わりにくいテーマとか、自分としては大したことないと思ってんだけど、思った以上に反応が世間的にはよかったテーマとかっていうのもあったりしますので、それは何か日々悩んでいるというのが実感ですね。自分が一番面白いと思ってるテーマよりも、片手間に始めたサブテーマのほうが世間で受けちゃったっていうことなんかは、そういう経験っていうのはたまにあったりしますね。それは何か、うれしいんだけど、素直に喜べないというような気持ちはあります。」

〔中区分 3:日本史関連〕

学術の価値と社会的インパクト

「学術的に価値があり社会的なインパクトがあるっていうのは、両立はするのはイエスだというのは、そう思いますが、ただ何となく社会的なインパクトを目指すと学術的には高くなく、逆に学術的に高みを目指せば社会的なインパクトは度外視されるみたいなのところはある感じはしますね。」

〔中区分 7:経営学関連〕

学術的意義と社会的意義

「やっぱり、両方あっていいと思います。学術的な意義がある研究と、社会的な意義がある研究、両方ある研究、いろいろあっていいんじゃないかなと、私は思ってます。」

〔中区分 4:人文地理学関連〕

二律背反的思考の問題点

「繰り返しになりますけど、やっぱり基礎的な研究をやんなきゃ駄目なんだと思うんです。よくいわれてることと結局一緒になっちゃうんだけど、すぐに成果が出るとか、この研究やったらこんなに社会に役立ちますよ、ほらねっていう、そういう安直なことが良くないと思う。何に役立つかわかんないけどもって言った瞬間に、じゃあやなくていいですよねっていうのが良くない。」

〔中区分 4:地理学関連〕

論点 34：誰に向けて発信するか——オーディエンスの構造

論点の整理

評価の議論は、最終的に「誰に向けた仕事か」という問いに行き着く。哲学の語り手は、自分の書いたものの第一の受け手は国内の近い分野の研究者であるとしつつ、自然科学系や研究者以外の読み手も存在するという重層構造を示している。この重層性が、単一の評価軸を成立しにくくしている。

社会との関係については、危機感も語られる。宗教学者は、読者に興味を持たれなくなった時に分野が終わるという認識を示し、哲学者は大学の中で研究を続けることへの理解をどれだけ得られるかについて「全く楽観しない」と述べる。同分野の研究者からは、楽しいから、面白いからやっているという動機を社会に対して語ることの難しさと、表に出ているものを支える背景と厚みの重要性が指摘される。

科学教育の研究者は、それとは対照的な事例も提供してくれる。天文学の出身者は社会との接点を好み、大学院教育の段階から社会にアピールすることを教えられてきた、という。分野の文化として社会発信が組み込まれている領域があるということであり、これは制度ではなく育成の問題として社会的インパクトを捉える新たな視点をもたらすものである。

ここでの論点は、評価指標が想定するオーディエンスと、研究者が実際に想定しているオーディエンスが一致しているかということである。両者がずれている限り、指標は研究者の実践を捉え損ねることとなる。

語り

研究発表のオーディエンス

「もちろん、研究活動として私の書いたものの第 1 位の受け取り手は、国内の非常に近い分野の研究者の人たちで。ですから、内容が学術的になればなるほど、その研究分野が非常に近い人たちの割と小さいコミュニティで。日本国内だと、いわゆる本当にストレートな科学哲学やってる人、多分 20 人とか 30 人とか、そんなものなんで、まずはそのコミュニティなんですよ。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

多様な研究発表のオーディエンス

「それは自然科学系もいますし、社会科学、人文科学の人もありますし、あるいは研究者じゃない方でも私のものを読まれる方はたくさんいらっしゃいますので、そういうオーディエンスも意識しながら物は書くようにはしております。」

〔中区分 1:哲学および倫理学関連〕

社会の興味としての研究の存在意義

「僕、これほんとに感想に過ぎないんですが、社会というか、読者といってもいいんですが興味を持たれなくなったら、それ、存在意義はないんだろうなと。もちろんいろんな考えがあって、基礎研究ってのは 10 年 20 年見向きされなくても、いずれ気付いてくれる人がいればいいんだって、そういう考えも持ってます、僕も。この文献を読んだからって、みんなが認めてくれるとは限らないっていうのがあるんだけども。」

〔中区分 1:宗教学関連〕

研究の存在意義と危機感

「全く楽観しないんですけどね。特に大学の中でやってくってことに関して、どれだけ理解をちゃんと得られるかっていう。そうなんですけど、どうでしょうね。難しいとこで、哲学的な分野って常に危機感持ってるんですね。だから、哲学そもそも意味あんのとか、哲学はそもそも存立するのとかかって、ギリシャ時代からずっとそういう。要するに自分自身を疑うっていうか、自分自身の足場を見つめ直すみたいなことをやってるので、そういう意味ではずっとそうなんですよね。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

研究の存在意義

「もちろん日本が良くて、海外が悪いなんて毛頭思っていないんですけど、いろいろリベラルアーツの関係のちょっと本を読んだりする中で一番やっぱり感じましたのは、考える力っていうもの、その答えが出ないことを考えて考えてやるっていうようなところが、やはりちょっと欠けてるなってふうに、おこがましいながらも思ってるんです。なので、やはり教育、研究、これから人文知、総合知っていうものを求めて、大学の中で活性化していくような仕組み、システムが必要じゃないかなって思っています。」

〔中区分 1: 宗教学関連〕

研究の体系性

「そうですね。まさにおっしゃるとおりだと思いますね。その背景とか厚みがないと、今表立ってるものも本当はうまく働かないはずなので。だから、僕とかが現在のところの哲学やれるのも、古代とか中世とか近代とかのかなり膨大なものを、ほんとに泥臭い文献の調査研究をやってる人がいるので、その僕は上澄みを使って、プラトンはこう言ってるけどとか、そういうことが無責任にできるわけですよ。同じようなことは多分いろんなことに関して起きるはずで。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

研究の社会的意義

「特に日本の社会にそういうのが、楽しんで仕事するっていうこと、楽しいからやってるとか、面白いからやってるっていうことに対して、それは不真面目であるとか、不謹慎って言った方がいいのかな。それでなぜ、例えば公金を使ってそれを支援しなきゃいけないのみたいな話にすぐなるので。でも、ほんと成果を上げられるものはそういうものなはずなんですけど、どこまでもそこはうまく……。耐えて、頑張って、勤勉に仕事を全うするみたいな。」

〔中区分 1: 哲学および倫理学関連〕

研究の社会へのインパクト

「あんまり役に立ててないような気がするんですけど。」

〔中区分 1: 思想史関連〕

社会との接点

「天文学を研究した人間は、比較的会社との接点なぜか好きです。理系の中では格段に好きと言われていて。たぶん理系全体の1%とは言わないですけど、随分小さい集団なんですけども。例えばテレビの番組や新聞の科学ニュース等で、うちの話がやたらめったら多い。科学館の展示もやたら多いというのは、私ども大学院の時にいろんな教育受けたんですけども、基本は会社に対してちゃんとアピールしなさいというので。」

〔中区分 9: 科学教育関連〕

社会の多様性の意義

「だから、そういう点である種そういう雇っておくっていうか、中国の食客と似てますね。ゲストとして食わせておく。そういう人がいると何かあった時に何でも聞いて役に立つ。そういうものをどれだけストックできるのかっていうところにかかっているんで、確かに予算をどう配分するのとかいろいろ難しい問題がありますけど、多様性とこれまでの歴史から考えると、そうしたいろんな人がある程度そうしたものをアクセスできるような形でしておくというようなのは、長い目で見ると結局有用性につながるような。」

〔中区分 3: ヨーロッパ史およびアメリカ史関連〕

社会への感度

「そのことは一応、折に触れているんな、今のXとかでも発信はするんですけど、やっぱりそこに対するセンシビリティが、研究者にそんなに自覚的ではないんじゃないかなという気がしています。つまり、自分の分野がどう見られているかっていうか、見られるかっていうことを考えなきゃいけないと私はすごく思うんですけど、そこら辺の感覚があんまり共有されないというか、分野の中で共有されないというか。要するに、自分たちは研究をただやってればいいんだっていうか、そういう感覚の人が多いように思うんです。だからそこはやはり、理論的な研究をやることは必要なんですけど、ただ、それがどういう社会的なコンテキストで承認されるかっていうか、そういうことに関して、やっぱりディフェンスするとか、そういうことをしていないと守れないっていうか、そういうことは常に思っています。」

〔中区分 2: 日本語教育関連〕

第 VII 部：総括——評価の対象と単位を再定義する

論点 35：研究業績の評価と研究者の評価は別のものである

論点の整理

本資料全体を貫く論点として最後に提起すべきことは、公共経済・労働経済の研究者が提示する区別である。それは、研究業績の評価は結果論であるのに対し、研究者の評価はその人が持つ研究アジェンダに対する評価を含む。現時点で業績が出ていなくても、そのアジェンダが 20 年戦えるものであり、いずれ花が開くはずだということは専門家には分かる、という指摘である。

この区別は、他の複数の研究者の発言と共鳴するものである。例えば、経営学のある研究者の「人文寄りの分野では 20 年かけて大きな花が咲く」という観察、あるいは環境動態解析分野の研究者の「ハードサイエンス的に査読誌のみを業績とする立場と、書籍やそれ以外の形態も成果と考える立場がある」という分岐の指摘は、いずれも評価の対象を成果物とみなすか、研究プログラムとみなすかという同じ評価軸の上にあるものである。

現行の業績評価は前者のみを対象としており、後者を評価する仕組みは制度化されていない。研究者の評価として制度化されているのは、実質的には人事の場面での専門家の判断のみであり、それは明文化されていない。

語り

研究者の評価と研究業績を区別する

「かなり、いろいろ違うんですけど。研究業績の評価っていうのと、研究者の評価っていうのは、微妙にちよつと違うところがあるじゃないですか。例えば、研究業績っていうのは、結果論ですよ。だけど、研究者の評価っていうのは、その人が持つ研究アジェンダであるとか、そういうところの評価っていうのもあるので、今、例えば研究業績が出てなくても、この人の研究アジェンダは、20 年間戦えるから、そのうち花が開くはずっていうのは、専門家だったら分かるわけじゃないですか。苦戦してるけど頑張ってるしとか、」

〔中区分 7: 公共経済および労働経済関連〕

人文・社会科学・自然科学

「私の感覚では、何となく社会科学って人文科学と自然科学に引き裂かれてるところがあって、自然科学に寄せてこうとする学会ほど、やっぱりそれこそ業績も量で測られるべきだ的な感じがあって、どっちかというと人文のほうは質ですから、その点では、もう経営史、経済史の人たちの場合、ずっとずっと自分の世界ですね。やっぱりもうそのことをずっとやってきて、何に役に立つんだってことを 20 年ぐらいやってきて、それで大きな花が咲くんですよ、そういう人たち。」

〔中区分 7: 経営学関連〕

サイエンスの捉え方

「一方で、私自身は研究者によって立場が違っていて。恐らくハードサイエンスのような、より学術の中でも査読誌のみを学術業績として、その他一切認めないっていうような立場から、一方でそこにこうソフトサイエンスと呼ぶ人たちもいますけども、もう少し広く書籍であるとか、書籍以外の形態も含めてサイエンスの成果だっていうふうに考える方もいらっしゃる。」

〔中区分 63: 環境動態解析関連〕

論点 36：未解決の問い

論点の整理

資料の中には、結論ではなく問いの形で残されている発言がある。日本語学の語り手は、人文研究は雑多なものが多く、英語論文だけで評価するとどうしても不満が出るとした上で、「一番良い評価は何なのかを考えている」と述べる。これは本資料が到達した地点を正確に表現している。すなわち、既存の評価方式への批判については広い合意があるが、代替案については合意がない、という指摘である。

会計学の研究者の発言は、この種の調査そのものの限界も指摘している。自分がどう答えるかと自分の分

野がどうかは別であり、国内と国外でも大きく異なる可能性がある。個々の発言は分野の代表的見解ではなく、その分野の一つの観測点として読む必要がある。これは本報告書の「序」の部分で促した本報告書の限界に相当するものでもある。

語り

一番良い評価とは何か

「弱気になっていけないが、評価が一番難しい。人文研究は雑多なものがたくさんあるので、英語論文だけで評価などするとどうしても不満が出てくる。一番良い評価は何なのかを考えている。」

〔中区分 2:日本語学関連〕

本調査の限界

「それは僕自身がどう答えるかというのと僕の分野がどうかということ、あるいは国内と国外で全然また違うんだと思うんですよね。」

〔中区分 7:会計学関連〕

SciREX 研究プロジェクト 2023
質問項目
(2023.12.10)

一橋大学 軽部大

以下の点について、順にお伺いします。可能な範囲でお答えください。当日は録音(録画)させていただきますが、お話しいただいた方の同意や許諾なしに、第三者と共有・公開されることはありません。

・研究分野の同定

- ・Q1:あなたの研究分野をお教えてください。

・研究者のアイデンティティ

- ・Q2:あなたの研究活動の使命(ミッション)や目標(ゴール)とは何ですか。
- ・Q3:あなたの研究活動を進める動機(モチベーション)とは何ですか。

・研究環境を取り巻く課題

- ・Q4:あなたの研究環境(研究時間)を取り巻く環境はどのように変化していますか。

- ① 年々極めて悪化している
- ② 年々悪化している
- ③ 変化なし
- ④ 年々良化している
- ⑤ 年々極めて良化している

- ・Q5:あなたの研究環境(研究資金)を取り巻く環境はどのように変化していますか。

- ① 年々極めて悪化している
- ② 年々悪化している
- ③ 変化なし
- ④ 年々良化している
- ⑤ 年々極めて良化している

・研究時間とトレードオフ

- ・Q6:以下の活動は、研究に割く時間とどの程度トレードオフとなっていますか。

- ① 教育業務
- ② 管理事務業務(大学や学会)
- ③ 家庭
- ④ その他(具体的には?)

・研究業績の境界線

- ・Q7:あなたやあなたの専門分野は、何を研究業績とし、何を研究業績として評価しないかお教えてください。(国内、海外、査読有無、書籍、翻訳、など研究業績タイプ)

・研究業績の質の定義

- ・Q8:あなたやあなたの専門分野は研究業績の質をどのように評価しますか。

・研究業績の高い質の定義

- ・Q9:あなたやあなたの専門分野は、高い品質の研究業績をどのように定義しますか?

・高い品質の研究業績への課題

- ・Q10:あなたやあなたの専門分野では、個人的に満足のいく質の高い仕事を目指す際に、どのような課題に直面しますか?

・研究の品質の維持努力・工夫

- ・Q11:あなたやあなたの専門分野では、どのようにして質を高める工夫や努力をしていますか? 参照している個人的または専門的な基準はありますか?

・研究の質の内なる動機

- ・Q12:あなたやあなたの専門分野では、高い質を追求する上で、金銭など外からくるものではなく、内からくる動機は何ですか?

・満足度の要因

- ・Q13:あなたやあなたの専門分野の学術活動において、どのような側面が最も満足感をもたらしますか? その理由は何ですか?

- ・ **優れた質の仕事例**
 - ・ Q14: 高い質を達成し、深い個人的な満足を感じた**過去の研究業績の例**をお教えいただけますか？
- ・ **質と外部圧力のバランス**
 - ・ Q15: 個人的に満足 of いく質の仕事と、資金調達、出版、評判などの**外部圧力とのバランス**はどのように取っていますか？
- ・ **キャリアへの影響**
 - ・ Q16: 個人的に満足 of いく質の仕事に焦点を合わせることが、あなたの**キャリアパスや選択**にどのように影響しましたか？
- ・ **キャリアを通じた変化**
 - ・ Q17: キャリアを通じて、個人的に満足 of いく質の仕事をするためのあなたの研究アプローチはどのようにこれまで**進化**しましたか？
- ・ **価値観の伝達・共有**
 - ・ Q18: 個人的に満足 of いく質の仕事の重要性を、あなたの**学生や（若手）同僚**に伝えますか？
- ・ **所属先の支援と妨害**
 - ・ Q19: あなたの所属先は、個人的に満足 of いく質の仕事を**支援**してくれますか？それとも**妨害**しますか？
- ・ **他分野との比較**
 - ・ Q20: 学術界における**個人的に満足 of いく質の仕事の追求**は、**他の分野と比べて**どのように異なりますか？
- ・ **国際的業績の範囲**
 - ・ Q21: あなたの研究分野では**国際的業績の範囲**をどのように定義しますか
- ・ **国際的業績の評価**
 - ・ Q22: あなたの研究分野では**国際的業績**をどのように評価していますか
 - ・ Q23: あなたの研究分野でのそのような状況はどのように**変化**していますか。
 - ・ Q24: あなたの研究分野のそのような状況を**変えるべき**でしょうか。
- ・ **社会的インパクト**
 - ・ Q25: 研究の**社会的意義や有用性**はどのように測定可能でしょうか。
 - ・ Q26: 研究の**社会的意義や有用性**は測定されるべきでしょうか。
- ・ **研究者と社会との関係性**
 - ・ Q27: あなたの研究分野の**存在意義や有用性**を教えてください。
 - ・ Q28: あなたの研究分野の**成長性や存続可能性**を教えてください。
 - ・ Q29: あなたの研究分野における**若手研究者の育成のあり方**を教えてください
 - ・ Q30: あなたの研究分野における**研究者と社会との関係性**について教えてください。

時間があれば、自由に質問させていただきます。

ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

(了)